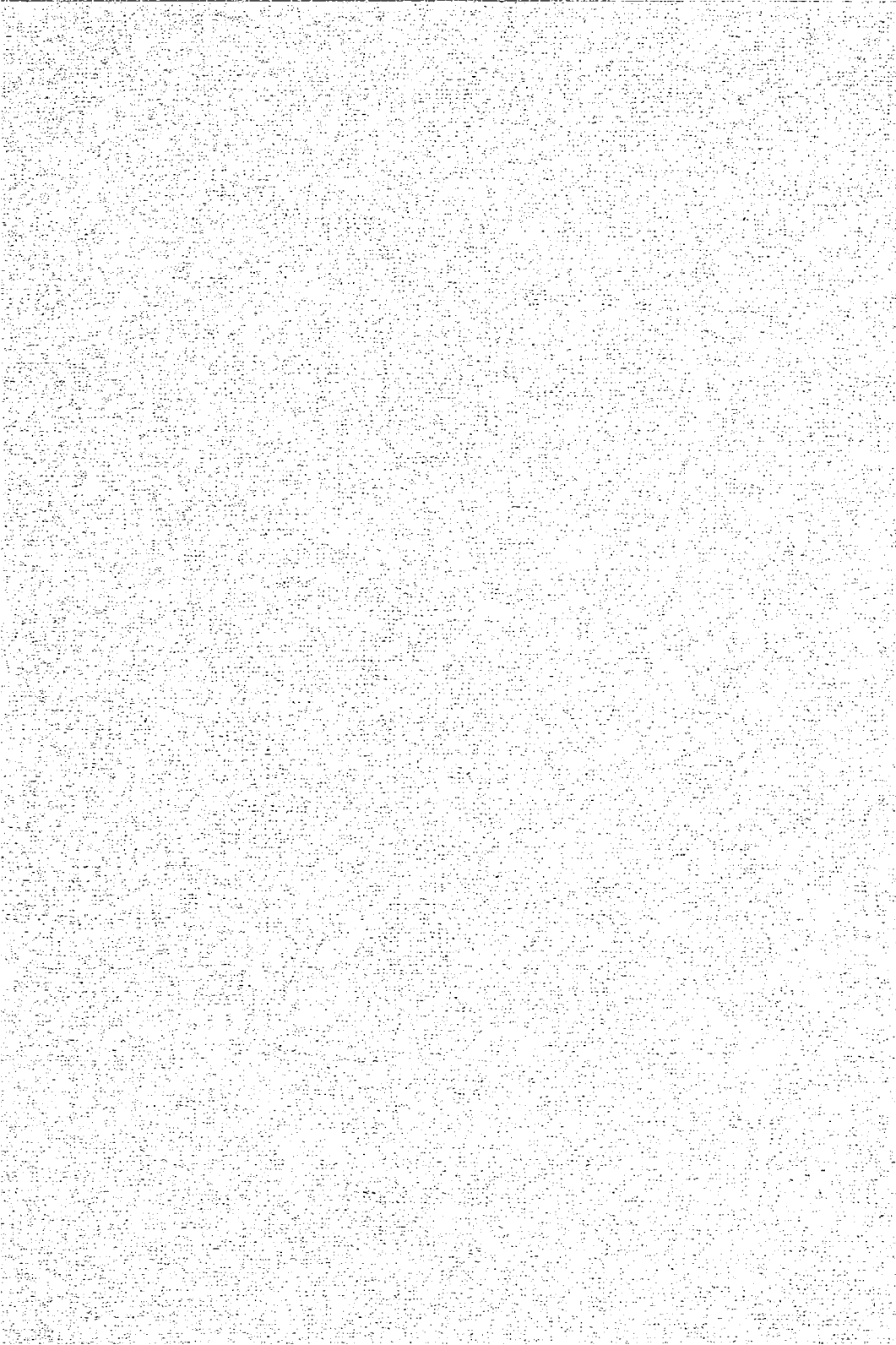


# 轍

わだち 1

日本自動車界のあゆみとヤナセ

梁瀬次郎



第一章 緒言 1

第二章 基礎理論 2

第三章 実験装置 3

第四章 実験結果 4

参考文献 1 目次

参考文献 1

参考文献 2

参考文献 3

参考文献 4

参考文献 5

参考文献 6

参考文献 7

参考文献 8

参考文献 9

参考文献 10

ヤナセの歴史 第一部 大正四年～昭和十四年

ヤナセの創世紀

父長太郎の生いたち ホンベイ時代 母の生いたち  
三井物産からの独立 梁瀬商会発足 呉服橋に移転  
車体の製造 バスとタクシー 当時の自動車業界  
大正六年 人材養成 芝浦の土地 芝浦工場の建設  
地代値上げの阻止 土地購入の経緯

第一次世界大戦

大戦の爪跡 日本経済の動向 日本外交の動向  
シヤ革命 シベリア出兵 文化の動向 大戦の戦後  
処理 断の一字 不況の今昔 大不況からの回復  
海外へ 五百台の乗用車

関東大震災

母の手記 震災復興 後藤新平内相 震災前後の文  
化動向 ジャズとダンスホール GM車絶対優先  
大正十二年前後の社業 工場の火災と広告塔 大正  
時代をふりかえる 再び本社を日本橋へ 弓をひく  
ヘラクレス

…… 九

…… 九

…… 三

…… 六

## 世界大恐慌と軍縮

……〇

外車業界の萌芽 暗黒の木曜日 一変した世界経済  
ファシズムの台頭 昭和の開幕 日本の金融恐慌  
田中義一内閣 悪しき人脈 動乱の中国大陸 内閣  
の崩壊 ドル買いを促した金解禁 軍縮会議

## 昭和動乱の時代

……一〇

軍部の隆盛と国民の窮乏 ファシズムの浸透 頻発  
するクーデター 五・一五事件 日本のファシズム  
無責任体制

## 第一期自動車黄金時代

……二七

米国車の日本進出 国産車の誕生 昭和初期の国産  
自動車業界 政府の保護 当時の世相

## ヤナセの歴史 第二部 昭和十四年～昭和二十年

……二六

## 戦時体制への移行

……二六

芝浦工場の想い出 代用燃料自動車係 本社への隸  
属意識 工務部の人々 ボディー製作 軍需特殊ボ  
ディー 高浜工場 その後の高浜工場 品川駅地下  
道 苦心三炭時代 天然瓦斯自動車 命を張っての

安全性試験

## 第二次世界大戦

……二八

高浜鑄工所の設立 経済統制 部門間の厚い壁 大  
戦の勃発 タイミングと勇氣 戦争体制の崩壊 D  
イツ・イタリアの敗北

## 戦火のなかで

……二六

本土空襲 花の芝浦一丁目防護団 隣組 家族を疎  
開 戦火にのまれた各支店 忘れ得ぬ五月二十五日  
全焼した麴町の家 芝浦工場被爆 清水雄太郎氏の  
死 去る者残る者 焼けだされ 社長就任 裸の王  
様誕生

## ゼネラルモーターズとヤナセ

……二五

## 日本GM社

……二五

フォード社の戦略 日本GM社設立 全GM車の販  
売権を放棄 苦難の時代 クエード氏からの手紙  
日本GM社の人材 日本GM社の販売網 日本GM  
社全国特約販売店協会

## 販売権をめぐる

……二〇

契約解除と復活のいきさつ G Mと国産各社 神谷  
正太郎氏 不況の苦しみ その後の日本G M社

## フオルクスワーゲンの誕生

……三六

## 第一次世界大戦とヨーロッパ

……三六

アドルフ・ヒトラー ドイツの敗戦 ドイツ共和国  
の混乱 左右の激突 パリ講和会議

## ナチス党の出現

……三七

天井知らずのインフレ 大統領選挙 ワイマルル体  
制の打倒 三者会談 国会議事堂放火事件 全権賦  
与法 ベルサイユ条約の粉砕 ヒトラーの戦争計画  
オーストリア、チェコの併合 国民車の構想とボル  
シェ博士 フォルクスワーゲンの完成 年間百万台  
の生産

## 想い出の人々

……三三

## 父の周辺

……三三

祖父孫平 祖父の死 祖父の知人たち 梁瀬孫太郎

父の性格 恩師の情 熊の銀ブラ 三七会 父の弟  
良次郎 隣人

私自身のこと

麴町五番町 麻布富士見町 吃音学院と中島玉置氏  
普通部時代 大学時代 ベルリンオリンピック 銀  
座の話 銀座と三田 ダンスホール 学生狩り ス  
キー・スケート 旅の思い出 西洋人との出会い  
病氣とケガ 梁瀬自動車へ入社 徴兵検査 新居と  
隣組 武田勝頼 二代目 五番町時代

会社の人々

大沢喜市さん 十ヶ条の賞讃文 律義と頑固 創業  
期の名物男たち 清水雄太郎さん 梅村四郎さん  
小林万寿夫専務 漆山一相談役 館野松十さん 保  
坂万一郎さん 梁瀬貿易 橋本万之介翁 山本条太  
郎翁

あとがき

……二六五

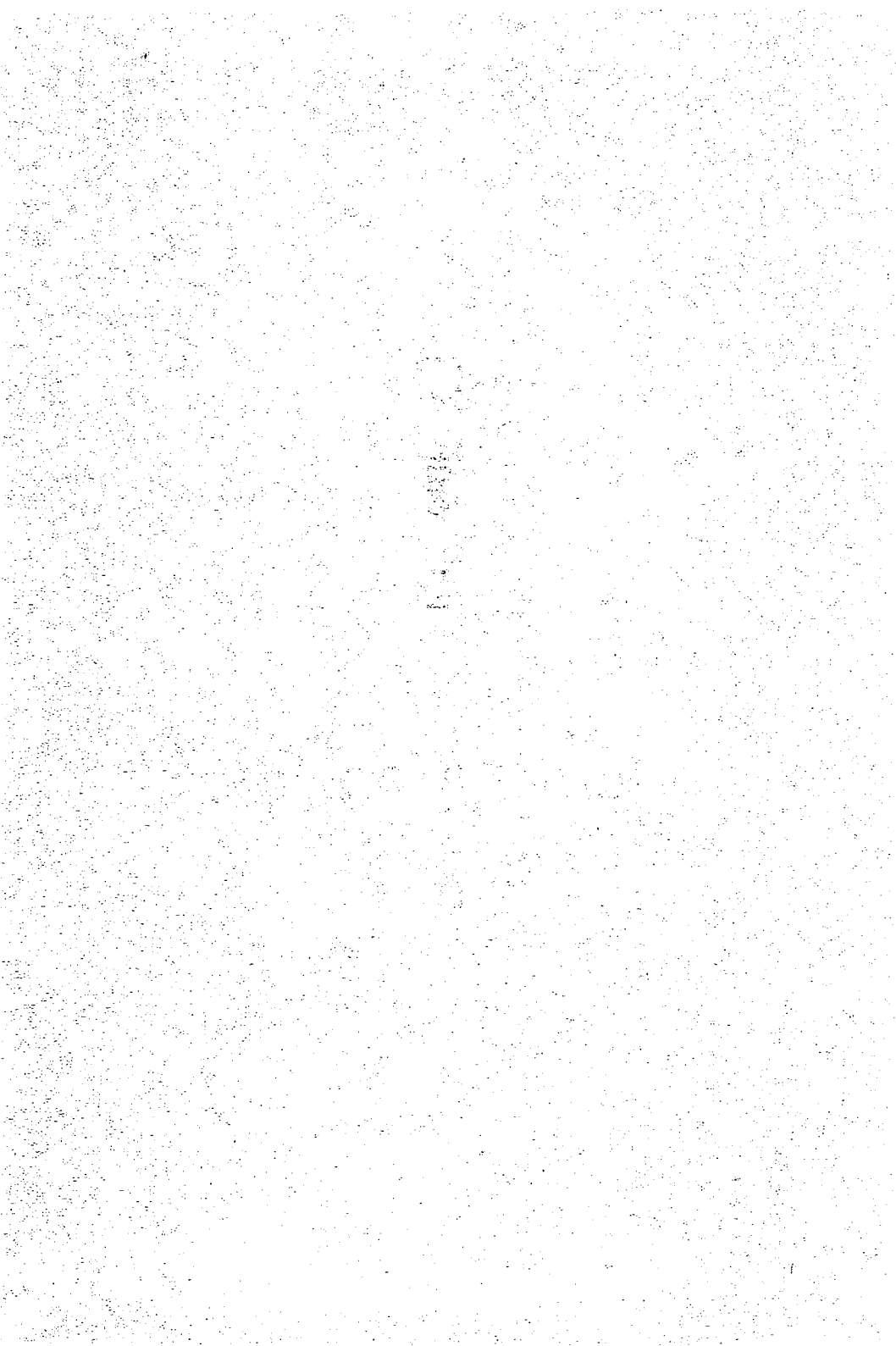
……三六

……三〇

轍

わだち

1



## ヤナセの歴史 第一部

大正四年〜昭和十四年 会社設立から私の入社まで

### ヤナセの創世紀

#### 父長太郎の生いたち

父梁瀬長太郎は、明治十二年十二月十五日、大根と張子達磨で有名な群馬県碓氷郡豊岡村の旧家、梁瀬家の長男として、呱呱の声をあげた。梁瀬家は村の旧家で、二十数代、農業、精米、養蠶などを家業としていた。また、中仙道と神山街道の分岐点で、青物市場を経営し、信州軽井沢行き、青物などのせり売り集荷を扱ひ、一方横浜へ絹糸などを輸出用として売りさばくなど、相当手広く商売をしていた。祖先は信州武田信玄に仕えた士族で、相当上位にいたが、武田勢が戦に破れた時群馬県まで逃げ高崎の一步手前の豊岡村に土着したときいている。

梁瀬家の主は代々孫兵衛を称することになっていた。長男である父も、本来なら父祖伝来の習慣によって、家業を継ぎ、二十五代目の梁瀬孫兵衛となり、あるいはあの田舎に埋もれていたかもしれないのである。しかし、

父は幼い時からなみの子供とは違ふ、風格のある子供であつたらしい。学業は必ずば抜けており、特に数学と習字と歴史が得意で優れていたという。

豊岡村の尋常小学校を卒業すると、隣村の八幡村の高等小学校へ入学した。この学校は八幡村の土地の素封家沼賀茂助が寄贈したもので、当時の校長は、かつて安中藩で剣道の師範をしていた小林喜三郎先生で、古武士氣質の飄逸たる人物であつた。この士族出身の小林校長は「教育の根本は人物をつくるにある」といふ、確固たる教育に関する信念を持っていた。したがつて学校の雰囲気には、高等小学校とはいへ、どことなく寺小屋風の趣きがあつた。

小林校長が行なう一年生の入学式の訓示の中で、毎年必ずふれる一つの訓話があつた。

「わしの家には、先祖伝来の鎧と槍がある。わしが何よりも大事に保存している家宝であるが、お前たちのなかで、将来大人物になる者があつたら、わしは第一番の人物には鎧を、次の人物には槍を与えよう。それが得られるように、お前たちは一心不乱に勉強し、嗜れてわが先祖伝来の家宝を受けとるような人物になつてくれれば、わしは本望である」

多感な感動しやすい少年期にあつた父は、小林校長のこの訓話を胸の奥深く、しっかりと受けとめ、心中ひそかに期するところがあつたようだ。高等小学校を終えると、直ちに前橋中学に入学したが、勉学の意欲に燃えた父は、是が非でも東京で学びたく、当時尋常中学といわれた東京府立一中へ転校した。この頃から、父は、将来は東京で実業家にならうと思ひ始めていたらしい。

府立一中は当時築地にあつて、父は京橋八丁堀の古道具屋の二階に間借し、夜は本を読みながら、この古道具屋の夜店の手伝いをしていたそうである。その頃の父は中学生とは思へぬほど、生活力と獨創性に富んだ学生生

活を送っていた。ある年の秋、どうしたことが野菜が大変な値上りをして、大根が一本十五銭もするようになった。大根の値上りを知った父は、早速三河島にとんでいき、大根一本三銭で買い求め、洗い賃と運賃二銭を加えた元値五銭の大根を一本十三銭で売ったのである。当時の八丁堀の瀬川病院前の塀際に、大根の山を築いて二日間、市価より安い大根は、もちろん全部売れてしまった。この利益で、父は学費と部屋代と本代を一年間まかかったという。

父が下宿していた八丁堀附近は、いわゆる下町で、交通も不便なところであつたらしい。ほとんど商店らしいものがなく、遠くまで買物にいかなければ用がたせなかつた。冬など木炭を切らして困る家もあつたので、父は学校から帰ると、暇をみては、あちらのお宅に一俵、こちらに二俵と、木炭の配達のアルバイトをはじめた。ところがある日、配達先のある家で「書生さん、手紙を一本書いて下さい」と頼まれ、気軽にそれを果たしてやつた。すると、その近所の人々から、次から次へと手紙の代筆を頼まれ、思わぬ代筆アルバイトまでしたそうである。お札に甘い大きな大福餅をごちそうになり、それから父の甘党が始まったのではないかと思う。これが父の十六、七歳の頃である。すでにその頃から、実業家としての片鱗がうかがえる。

府立一中を卒業すると、神田一ツ橋の高等商業（現在の一橋大学）に入り、勉学に励んだ。父が学生時代、いかにガリ勉型であつたかは、子供として想像に難くない。夏休みになると、郷里の群馬に帰り、家業を手伝い、祖父にかわつて帳簿づけなどをして、学校で学んだ商業学を実際に身につけていった。祖父からも大変に重宝がられていたという。

明治三十七年、一橋大学を卒業し、直ちに大阪商船に入社した。当時の船会社は、なかなか派手で、書生あがり、なにも世間を知らなかつた父は、大いに戸惑つたらしい。しかし、父の商人になりたいという気持ちは次

第に強くなつていった。学生時代から大根を売ったり、木炭を運搬して利益を得るといふ商いの興奮と手応えを知っていたからである。どこへ行ったら商人の勉強ができるのかと、父は父なりにいろいろと考えたらしい。最後に三井物産にとび込むことに意を決し、入社することになった。その頃の三井物産では、大学によって初任給が異なり、帝大と一橋が三十円、慶応が二十五円、早稲田が二十円であった。大阪商船の方が、帝大、一橋が三十五円で三井物産より五円も高かったそうであるが、父は勇躍、三井物産に身を投じたわけである。

東京にも財界にも、また三井物産にも、一人の縁故者知人もいなかった父は、当時の三井物産常務の山本条太郎翁に体当りでぶつかつたらしい。その後、父は一生涯山本翁を師として仰ぎ、尊敬し、恩人として仕えた。不変の信念の強さには頭が下る思いであった。戦時中、自動車の不便の時も、山本翁の墓参に未亡人が自動車のご入用の時は、父は喜んで自分の自動車を山本未亡人に提供し、自分はタクシィで出社した。それを見て、恩人に対する恩返しはライフワークであることを教えられた。

### ボンベイ時代

三井物産入社そうそう、即ち明治末期の独身時代、父はインドのボンベイに転勤を命ぜられた。ボンベイ時代は父にとつて、あまり面白い毎日ではなかつたらしい。決して私に仕事の話をしなかつたことから考えると、何も仕事らしい仕事はしなかつたのではないかと思う。

ただ一つ父からよく聞かされたのは、インド人が「日本人はちつとも偉くないし、尊敬する価値はない。しかし、英国人は偉い」と言っていたということである。その理由は、日本人はインドで、暑いからといって家の中でも食事の時でも、すぐ裸になるが、英国人はどんなに暑くても食事の時は必ず上衣、ネクタイを締める。インド人ができないことをするから英国人は偉い。インド人と同じことしかできないから日本人は偉くないと。

この話を子供の頃からよく聞かされたが、父がインド在勤で得た一番大きな収穫は、行儀が良くなったことで

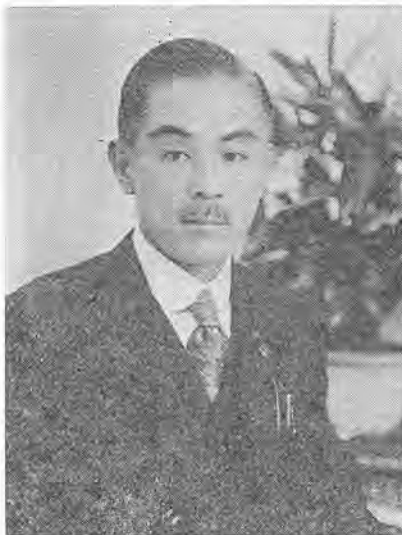
あろう。父はほとんど絶対と言ってもいい位、人前では上衣を脱いだり裸にはならなかった。大東亞戦争が始まって戦況がよかった頃、日本の陸海軍人が南方の占領地域で、住民に大きなウチワであおがせて裸でいる写真を見るたびに、これでは戦争に負けるだろうな、とつぶやいていた。

会社の常務故大沢喜市さんの言によれば、父はよほどボンベイに行くのがいやだったのか、赴任途上の京都、神戸、香港で目茶遊びをして旅費を使い果たした上、各地の三井物産で莫大な借金をして、やっと赴任したらしい。そのため三井物産の旅費規定が改まり、各支店よりの仮伝票借入金が禁止されたそうである。学校から三井物産と同期であった大沢喜市さんは「何ですゾー」が口ぐせであったが「何ですゾー、物産の若手は梁瀬のおかげで借金できなくなった、旅費がやかましくなった、と批難ごうごうでしたよ」とよく私に話して下さった。

生来胃腸の強くなかった父の健康には、ボンベイは不向きであつたらしく、体をこわして滞在二年半で帰国した。その後、病院生活、塩原温泉に約四十日間療養して東京にもどり、三井物産本社の機械部鉱油係となった。そこではじめて貿易事業と国内商売のレッスンを得られるようになり、明治四十年春、峰岸喜三郎商店の支配人で、梁瀬家の一族の梁瀬米太郎氏が夫妻の媒酌により黒沢ちやうと結婚した。

### 母の生いたち

母利子は本名ちやうであつたが、結婚後、長太郎の長（チャウ）とちや



三井物産時代の梁瀬長太郎

うでは重なると考えたのか、利子と改名した。明治二十一年四月二十九日、群馬県多野郡多胡村大判地（現在の吉井町大字大沢）で生まれた。今の上信電鉄で高崎駅から下仁田に向かい、吉井駅で降り、さらに山に入ったところであるが、母の祖父は群馬県一の煙草の栽培業者で、いわゆる土地のお大尽であったという。

母が生まれた頃は、実家の黒沢家は全盛時代で、高崎から大判地まで、ほとんど黒沢家の土地だけを歩いて行くことができたほどの土地持ちであった。祖母の妹が、父の叔父のところに嫁いでいたが、この叔父は、私の祖父梁瀬孫平の弟孫太郎である。したがって、大判地から豊岡村までは、かなりの遠隔地ではあったが、両家は全く知らない間柄ではなかったらしい。煙草の栽培で身代をつくった黒沢家も、母の父と母の兄、二代続いての相場の失敗、遊びによって、大正の初期には、すべての身代を使い果してしまつたと聞いている。

母は上京して、浅草の府立第一女学校に通った。卒業後、父と結婚したのであるが、女学校時代に、試験勉強や宿題を、よく父にみてもらつたという話を、母からもきかされているので、単なる見合結婚ではなかつたと思われる。

### 三井物産からの独立

大正四年、父長太郎は三井物産から裸一貫で独立した。当時、三井物産は機械部の中に砥油係と一緒に自動車係を設け、ゼネラルモーターズの前身、ビュイックモーターズと契約し、車の販売をしており、父がその担当であった。ところが、その頃、日本ではまだ、自動車に対する認識が低く、値段も高い上に、危険であるという印象があり、商売の名人三井物産が考えたほどには販売が伸びなかつた。販売難の在庫増から二百万円の赤字が計上されるようになり、機械部としても、自動車係が赤字を抱えて継続していくことが困難となり、三井物産では取り扱わないという方針が決められた。自動車の販売は大企業の一部で取扱うことに無理があり、パーツ・サービス工場が絶対必要であり、むしろ中小企業体の方が適切で

あるとの結論に達したのであろう。これを誰かに引き継がせたいということになって、父に白羽の矢が立ったのである。

山本条太郎翁の「お前がやれば自分も出来る限りの応援を惜しまない。資本も出してやろう」という言葉に元気づけられ、父は独立を決心した。機械部の取扱い商品のうち、輸入自動車の手販売権、並びに輸入砥油類の一手販売権を三井物産株式会社より譲り受け、同時に、日比谷公園前の約二百七十坪の店舗及び工場設備を三井物産より拝借し、麴町区（現在の千代田区）有楽町三丁目三番地で営業を始めた。ここには、現在は三井銀行の日比谷本店がある。店頭の看板は金色で「三井物産株式会社砥油及自動車一手販売」と「梁瀬商会」の二枚であった。

#### 梁瀬商会発足

営業開始当初は自動車も砥油類（潤滑油、モーター油）も需要は少量であった。たしか、自動車の保有台数は全国で一、二四四台と少なく、自動車自体の性能も現在の如く発達しておらず、非常に幼稚であった。自動車を始動するのに手で「クランクシャフト」をまわし「ヘッドライト」も「テールライト」もみなカーバイド灯であったため、点灯するには発車前から「カーバイドタンク」に水を注入し、「ガス」の発生を待ち、「マッチ」で点火してから発車していた。運転台には扉がなく、スピードは非常に遅々たるもので、時速十キロ位であった。

砥油類の需要先は全国の機械工場、炭坑、鉾山、電燈会社、変電所等で、需要量も少なく、日本の工業発達の黎明期の感にて、大きな得意先は三井物産株式会社系列の北海道室蘭にある株式会社日本鉄鋼所、三井鉾山株式会社の三池炭坑等であり、潤滑油類、



創業期に三井物産よりもらい受けた看板

モーター油類は大体五ガロン（二十リットル）缶元詰であり、多量に輸入するようになってからは木製のビヤ樽で入荷していた。ガソリン及び石油（灯油）の需要は少なかったため全部五ガロン缶詰であり、当時の国内の精油所としては秋田県と新潟県に国産原油を取扱う小規模な精油所がある程度であった。

大正時代が過ぎて昭和の初期には、外国の原油を国内で精製する精油所の設置が必要となってきたので、昭和八年六月七日に、梁瀬商事株式会社（大正九年一月一日創立）では今日の興亜石油株式会社社長野口榮三郎氏、薄井久男氏と共同出資で資本金十萬円の東洋商工株式会社を創立し、鶴見海岸に精油所を設置し、原油を輸入して精油の仕事始めた。しかし、経済界の情況回復が待てずに、父は、五萬円の株を野口氏の懇請により譲渡してしまった。野口氏と薄井氏はこの仕事を発展させ、現在では資本金三十一億円の興亜石油株式会社になった。大正六、七年頃には、第一次世界大戦に参戦しなかった日本は戦争による特需景気で、会社も店舗、陳列場、修理工場、車室製作工場等が狭隘になり、設備拡張の急務を痛感するようになった。

鉱油類の加工工場および倉庫として深川猿江裏二丁目四番地の旧三井物産株式会社倉庫約八百坪を従業員つきで大正四年に借り、それ以後昭和二十年三月戦災により焼失するまで借用していた。地主は小林伝之助という村木屋さんであった。



大正4年ヤナセが初輸入したビュイック

## 呉服橋に移転

麹町区銭瓶町二番地（現在の山叶証券会社）に、たまたま東京市下水課所有の空地（更地）があったので、この土地（約一千坪）を短期間借用することにし、自動車組立工場車室製作ととした（大正五年五月）。社内ではこの銭瓶町を呉服橋と称しており、大正六年一月には本社も日比谷から銭瓶町へ移転した。従って事業場が日比谷と銭瓶町の二カ所になったわけである。呉服橋の社屋上には自動車型の回転式電灯広告を掲げ、当時の市民が驚異の目を見張り話題となった。自動車のネオンサインの第一号である。

その当時のことを社友梁瀬喜作氏に思い出してもらおうと、  
「当時、世間には社員と職工との区別が整然とありました。職工（職人とも言う）は紺の印半纏に麻裏草履、豆絞りの手拭いで鉢巻をして若々しい元気な姿。

青年社員は黒または紺サージの詰襟服に丸坊主頭で、自転車か電車または徒歩で通勤し、工場の始業時は朝七時、終業は五時と定めてありましたが、仕事の都合で時には徹夜残業で働き、皆仕事本位に、名人気質とか職人氣質とでも申すべきか、残業手当など請求する者は一人もなく、食事の用意さえすれば、満足して仕事に没頭してくれたものでした」

大正六年暮には、呉服橋の本工場がまた手狭



大正6年当時の呉服橋本社。屋上に自動車の形をした広告塔

になり、工場内での作業ができないほど車が多くなった。毎日毎夕、数十台の車を表道路に押し出したり押し入れる始末で、道路上に放置した車が路上作業のため交通妨害になるので、警視庁交通課より毎日のように呼び出しを受け、嚴重な注意を受けるようになった。また、作業能率も著しく低下したので、市内中心部より離れた所に四、五千坪の工場建設地を至急探さねばならなくなった。それほどに仕事が多忙になり、財務的にも安定して、この業種の発展の兆が見えてきたわけである。

赤坂溜池にあったハドソン号の販売会社日本自動車株式会社も同様に工場拡張を計画中であつたので、両者共同で現在の国鉄中野駅前に約八千坪の賃借ができる畑地を梁瀬と日本自動車と半分ずつ分割して借りる契約が成立した。それは大正七年の春のことであり、日本自動車は直ちに工場建設に着手したが、父は研究した結果、日本橋に工場と店舗を持ち、横浜港との往復が頻繁なので、その当時の中野ではあまりに郊外すぎて、物資を輸送するにも、労働力を集めるにも、通勤上不便である事を勘案して、考え直した方がよいと判断した。そこでせっかく中野の土地の契約ができたのに、京浜地区の方が会社繁栄と将来のためには望ましいと決定し、京浜地区の土地物色に全力を注いだ。一方、地主の中野町町長浅田氏は、醤油醸造業を営み、中野町に工場ができれば土地発展に役立つとして工場誘致を計画中であり、そのために諸々の便宜をはかってくれ、賃貸料も一ヶ月一坪当たり七銭でよろしいとのことであつた。この賃貸料は、当時としても格安であつたと思う。

### 車体の製造

結局、東京駅脇の呉服橋より大手町交差点に向かい右側、俗に言う「ガード脇（現在の中央電話局）」の所に約五百坪の土地を借り、バラック工場を建築して鉄瓶町二番地に収容できない自動車（商品）を搬入し、この一隅で堀久氏の設計による純国産自動車ヤナセ号の製作を始め、別に市街乗合自動車納めのクライスデル乗合自動車の車体（ボディ）を五十台製作した。この土地に、父はヤナセビルを

建設するつもりで準備を始め、計画を進めていた。当初は貸ビルにする目的で、ヤナセの大阪支店長になった三井物産時代の友人の早川吉次氏の知人である滝川工学士に設計施工を依頼し、五階建ビルディング二千五百坪の設計見積りができたが、結局は大正九年の大不況で中止せざるを得なかった。

その当時、外車輸入は全部箱詰で、しかも体積を小さくするため「ホイール」「タイヤ」「ラジエター」等は解体し、「シャシー」に「エンジンブロック」を取付けた形の幌型車で「シボレー」の貨物車等は二車軸分を箱詰にして輸入していた。リムジン型の完成車は一台ずつ箱詰されており、ビュイックのシャシーは当社で国産ボディを製作取付け、完成車として販売していた。シボレートラックのシャシーは前車輪はニューマチックで小型、後車輪はソリッド・タイヤで大型であった。

また、乗用車は幌型のシボレー（小型車）を多量に輸入した。が、このシボレーの小型車は売行き不振で三百台も滞荷し、大苦境に陥ったこともあったそうだ。そこで幌型の幌を取り外して、ウインタートップ（箱型のこと）に改造して、神戸市街乗合自動車に一手に売り込んだが、その代金回収ができず大損をしまい、梅村四郎氏（初代大阪支店長）がその会社に派遣されたこともあった。ビュイック乗用車はシャシーで輸入し、幌型も箱型も国産ボディを架装し、毎日二、三十台を販売していたが、父は車体の製造の先駆者であった。

父は自動車の車体製作に力を入れた。大正五年頃は、日



1917年（大正6年）製のビュイックリムジン

比谷の工場ではボディの製造を行っていた。その中心的技師として堤七郎（堤自動車社長）泉藤吉氏（現・泉自動車工業会長）高橋一郎氏（元高橋内燃料社長）山懸政夫氏、田中常三郎氏（元日産自動車取締役吉原工場長）田尻春男氏の名前が残っている。日比谷の工場で月二十台〜五十台を製作していたが、一番大きな問題は塗装であった。その当時の有名な美術家で、藏前工大の先生であった六角紫水氏を迎え、静岡の東照宮から漆工を借りてきて漆の研究を始めたが、静岡の漆は太陽の直射でヒビが入り、持続性に乏しく、職人も乗客も漆にかぶれて失敗に終わった。アメリカのデュボン社でデュコ塗料が開発されたのが大正八年頃であった。父はこのボディの製作のどこが気に入ったのか、バス車体、乗用車車体を中心として力を入れた。芝浦工場の車体工場では戦時中、魚雷運搬車、探照灯（サーチライト）、自動車、ダンプカー等を製造した。昭和十四年にこの部門が高浜工場に移転して車体専門工場となったのである。しかし、常にシャシー（車台）メーカーに支配され、利益もシャシーメーカーに取られ、車体メーカーは決して旨味のある立場ではなかった。下駄のはなお屋であった。なぜ父が車体製作を好んだのか、それは今でもわからない。

### バスとタクシー

車体製造の他に、バス事業も一般大衆のために必要と信じ、バス路線を開拓した。もちろん、これらの



大正14年東海自動車へ納入するビュイック

バスに使用されるシャシーはシボレーで、車体はヤナセ製であったので、この点も充分考えてのことであつたらう。伊豆の伊東を中心とした東海自動車の設立も、伊東の熱心な指導者中村長五郎氏と共に、修善寺の新井屋旅館から出発し、伊東までの乗合自動車を通したのを始めとして、逐次、バス路線を増加していった。同社には、ヤナセより橘川安衛車輛主任が赴任した。東海自動車の第一回走行区間は大仁・修善寺・伊東間で、(大仁にはヤナセの出張所があり、当時の所長は潮田菊次郎氏であつた)シャシーはシボレーとビュイックであつた。

大正四年、ビュイックのシャシーに半分貨物、半分乗用車を作って、武州川越(埼玉県川越市)と越生(おごせ)間のバス事業を始めた父は、続いて常陸の土浦と筑波山下までの土浦乗合自動車、九州では博多から別府までの乗合自動車、関西では京都・大津間の大津自動車、京都から若狭間の京狭乗合自動車、岐阜から高山までの濃飛自動車、四国松山から高知までの愛媛自動車、横浜―鎌倉―藤沢―戸塚と廻った相武自動車(現在の神奈川中央バス)、東京市内では吾妻橋から玉ノ井間の隅田乗合自動車、また、三浦半島を一周する臨海自動車、伊勢神宮の参宮自動車、その他多数のバス事業を創業、経営していた。

今日このバスラインの権利を所有していたら、それこそ左うちわと悔まれるが、父は株式を額面ですべて、その土地の人々に譲ってしまった。バスがこんな大きな権利になるなどは考えなかつたのも一つの理由であろうが、それより、売上金額がどのバス会社も毎日三円から五円位違う。即ち車掌さんと運転手さんのポケットに入ってしまうということが、几帳面な父の性格から許せなかつたらしい。ごまかされるような仕事はやめてしまえ、の一喝で売却したらしい。私などは五円ピンハネされても、会社が五十円儲かればいいじゃないのかな、と子供の頃から思っていたので、つい父に聞いたら大雷落下、頭から「馬鹿者」の一声であつた。

当時、梁瀬自動車が直営していた乗合自動車は、相武自動車、隅田乗合、和歌山の白浜温泉自動車、九州の小

浜自動車（雲仙峡の麓の温泉）であった。また、父の個人所有、個人経営であった日比谷の梁瀬ガレージでは、平出円一氏を担当者として、東京―大垂水―富士五湖―東京の循環路を運行する帝都遊覧バスを経営していた。これが多分、遊覧バスの先駆者であらう。タクシーは京都タクシー、神戸に神戸市街自動車（梅村四郎大坂支店長が経営担当）がシボレー五十台を駆使して、タクシー業を営んでいた。このタクシー業も父の性格には合わず、後に売却してしまった。白髪になった今日、一つでも残しておいてくれたらと残念に思う。

父は車庫を個人所有、個人経営していたが、昔の経営者は会社の給料以外に個人の収入が上がり、生活が不安定にならないように、個人事業を持っていた人が多かった。昭和二十五年頃の戦後の大変化の時、私も自分自身の仕事を持つ機会が度々あったが、その度に父から「お前は会社の仕事だけをやれ。この大馬鹿者」と叱責された。その結果、何一つできなかつた。親とは勝手なものよ、と嘆いたこともあった。

#### 当時の自動車業界

当時の自動車販売業者は、大倉系の日本自動車、高田商会、山口勝蔵商会、三井物産機械部であり、三井物産機械部の自動車係の仕事を継承して発足したが、梁瀬商会であった。その頃の自動車登録台数は、一千三百台に近づいており、梁瀬（梁瀬長太郎社長、ビュイック、キャデラック）、三和（藤原俊雄社長、パカード）、日本自動車（石沢愛三社長、アメリカのハドソン）、セールフレージャー（フレージャー社長、フォード）の四社が、販売の中心であった。その頃早稲田大学の創立者大隈重信さんが名誉会長で、フレージャー氏が会長、大倉喜七郎氏と父が理事で、日本自動車協会を設立し、帝国ホテルに事務所を置いていた。

当時、エムパイヤの柳田諒三氏は電気商であったが、父が柳田氏にハイヤーの仕事を勧め、ビュイック四台でハイヤーを始められたのが、自動車業界に足を踏み入れた第一歩であった。

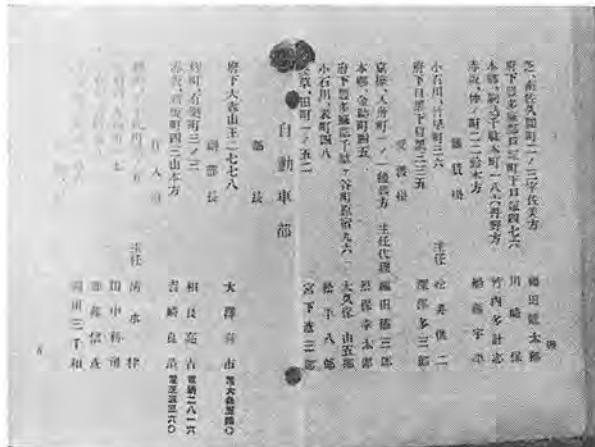
大正六年

大正四年五月二十五日に誕生した梁瀬商会の、全従業員の出所録が、大正六年十二月一日にできた。これがヤナセの第一回の住所録である。社員三百六十五名、電話の所有者七名、現在生存されて居るのは、梁瀬喜作、大原当一郎、泉藤吉、中山信市くらいであろう。

職制も簡単であるが、名称も給仕を小供(こども)と称していた。また、珍しい名称に「傭丁」がある。私もよくわからないので、梁瀬喜作氏に「傭丁」とはいかなる仕事をする人々か、と聞いてみたところ、「雑用雑務をしてくれる雑工ですよ」とのことであった。

鉄工係修繕の部に、泉藤吉氏の名が見られる。今日のピストンリングメーカーの最右翼である泉自動車社の社長泉藤吉さんである。その下の方に市来宗男氏の名を見付け、懐かしさで胸が一杯になる。私の入社後、天然ガス自動車係で私と組んで働いた名物男である。学問はなかったが、第六感の修理マンとしては最高であり、横浜の夜の町でも有名であった。鉄工製作係に小林長三郎氏の名もあるが、今日の大阪日産の重役である。松平八郎さんは宝塚の寿美花代さん(高島忠夫氏夫人)のお父さんで、大阪へ移り、奈良日産の社長になった人である。

梁瀬商会の発足以来、父は死にもの狂いで働いたと思う。その姿を見ていた母も、何か協力をと考えたらしく数少ない従業員の



大正6年12月1日現在の梁瀬商会出所録

家族を集めて和の力を涵養することを考えついた。それが、子供会であり大正六年頃、赤坂檜町の陸軍大将台湾総督明石元次郎氏の邸を借用した時から始まった。

子供会は、昭和の初期まで続いたが、従業員の頭数が増加し、子供達も、いつまでも同じような手品や歌に飽きて来て、人氣が無くなったこともあり、いつの間にか立ち消えになってしまった。その頃の子供会は田中常三郎氏（後の日産自動車取締役吉原工場長）田尻春男氏（後の田尻ボディー社長）梁瀬喜作氏らが中心であり、田中氏の手品は、子供達の人氣的であった。同氏は今なお元気で、アマチュア・マジシャン連盟の役員として手品を楽しんでおられる。

### 人材養成

大正九年、梁瀬商会から梁瀬自動車株式会社に組織がかわって、いよいよこれから本格的に自動車の仕事の勉強をしなければならなくなった。そこで父は、自動車の販売、修理の担当者、海外派遣を計画し、会社の技術者及デスク（事務系統）工具、職長等の中から選択して、十二名の人を順次アメリカとヨーロッパに派遣した。この中には今は物故した人もいるが（△印がその物故者）次の通りである。

△清水雄太郎氏（父の郷里の小学校校長清水武兵衛氏子息、初代ニューヨークの会社駐在員であった。十二年父母が外遊の時案内役を務める）

△保坂万一郎氏（会社より前任の清水氏の後任として派遣されたニューヨーク駐在員。後商事の砥油部長）

△橋戸義雄氏（橋戸頌鉄氏弟）

△相良亮吉氏（会社より三昭自動車に転じ、後エンパイヤ自動車にも在社、業界人のゴルフファーとして有名）

△吉崎良造氏（原安三郎翁と共に山本条太郎家を卒業して後会社に入りその後東京ダットサン商會を創立する）

田中常三郎氏（会社から日産自動車株式会社取締役吉原工場長となる）

△大沢喜市氏（会社の常務取締役を経て常任監査役）

△梅村四郎氏（会社の取締役大阪支店長から豊国自動車の社長となる）

泉藤吉氏（会社から独立して現泉自動車工業株式会社社長となる）

堀久氏（会社から青バス〔現在の東急バス〕に勤務して現在日本自動車興業株式会社社長となる）

△山県政夫氏（東京―大阪間を最初に無着陸飛行した山県豊太郎氏の兄）

△富安良三氏（元高田商会にいた人で、後にヤナセに在職した人）

父は、こうした人材を海外に派遣したものの、これには面白い現象がある事に気がついた。最初父は、会社から経費を払ってこれらの人々を洋行させたのであるから、帰国したら、また会社のためを思つて、一生懸命働いてくれるのが普通であると、主観的に考えていた。しかし、これを客観的に考えてみたら、大きな間違いであった。外国で学び覚えて帰朝した人を前と同じ給料で使っていたのでは、他の会社の人々がこれらの人を五割増または倍額の給料で誘つてしまう。こうして瞩目された人々が皆、他の会社に行ってしまった現象は、あまりにも馬鹿々々しいと思つた、と父は語つてくれた。

これにこりたのか、戦後私が社長になつてから、多くの社員を勉強のため外国へ出張させようと思つた時も、父は、外国へ出せば必ず退社するからなるべくやめるよう、または絶対に退社しないと誓約書を作るべし、と厳重に注意をされた。しかし、私は人は紙でしぼれるものではない、昔のようなことはしないことを確信すると言ひ切つて、毎年若い人々を外国に出した。

青年渡欧の第一号は当時のフォルクスワーゲンサービスの伊藤鉄之助君であつたと記憶している。確か一九五四年であつた。その青年が今日サービス担当の取締役として活躍してくれている。父に見せたいような心境であ

る。戦後今日まで、千人以上の青年を外国に出したが、退社した人は数人しかいない。このことは、私の一番大きな自慢であり、嬉しい誇りである。

### 芝浦の土地

ここで、芝浦の土地入手について触れておきたい。大正六年春に、当時の東京市長奥田義人氏が逝去され、それに伴い農学博士田尻稻次郎氏が市長に就任されたが、市の財政は非常に行きづまり、市政運営は困難をきわめていた。この田尻稻次郎市長は、非常に節約（俵約）家で、豆糟を常食としたので、豆糟市長と言われ、東京市の財政立て直しに適当な人物として選出されたが、昔の二宮金次郎のような為政者であったようだ。

当時芝浦の埋立は、東京市港湾部の継続事業として続行され、約十二万坪の埋立が完成していたので、田尻稻次郎市長は東京市の財政立て直しの一助にこの埋立地を売却して財源とすることに着目し、処分することを決定した。かねてから京浜地区に土地を物色中であつた故藤原俊雄氏（バックカード車の輸入元、元三和自動車社長）と父はこの吉報を得て、待望の土地はこの土地以外にはないと考え、芝浦の土地十二万坪の払下げ公入札日に、高橋政右衛門氏を加えた三人で、この十二万坪の土地払下げに、入札金二百七十万円で応札した（一坪当たり金二十二円五十銭）。競争相手は、新潟県新津市の当時石油王と称せられた中野完市氏であつた。中野氏は総額三百万円で応札した結果、芝浦の土地十二万坪は中野完市氏に落札されてしまった。坪当たり二十五円となる。

しかし、中野完市氏には、この土地を手に入れても直ちに使用する目的がないことがわかり、梁瀬、藤原、高橋の三人は中野氏に面接して、その一部の土地賃貸借を依頼した。三人は「我々は実際にこの土地を使用する必要があつて応札したのだから、その一部約一万五千坪ほどを賃借させてもらいたい」と懇請したところ、中野完市氏は子息中野忠太郎氏を通じ、賃借の件を快諾され、大正八年三月二十八日賃貸借契約が成立した。

この賃貸借契約当時の芝浦埋立地は、見渡す限り丈なす草原で、埋立後十数年も放置されたままになっていて見る影もなかった。芝浦岸壁には魚釣り姿が見受けられ、埋立地と埋立地の間の掘割には橋もなければ道もなく所々に掘立小屋が散在し電灯水道ガス等はもろろ何の設備もない荒野であった。地主中野氏としても、入札の結果、落札して土地の所有者となつたものの、使用する方針が確定していないので、当方の申し出を、当地利用の先覚者が現われたと考へ、渡りに舟という感じで、簡単に父個人に賃貸借契約をしてくれた。

契約（三者契約）の内容は別掲の通りの契約書である。大正八年三月二十八日に本契約が成立したが大正八年十二月末日まで九ヶ月間は使用料金は無料で大正九年一月一日から起算して坪当り金十五銭に定め、逐次値上げをなし、大正十七年一月一日より十二月三十一日まで一坪

### 参考書類（芝浦土地の最初の覚書）

地所賃貸借証（原本通り）  
 大正十七年一月一日より十二月三十一日まで一坪二付一ヶ月金四十銭ノ事

地所賃貸借証（原本通り）  
 梁瀬長太郎ハ工場並ニ店舗用建築敷地トシテ左記地所ヲ中野忠太郎ヨリ賃借スルニ付中野忠太郎ヲ甲トシ梁瀬長太郎ヲ乙トシ契約スルコト左ノ如シ

第一 賃貸借地所ハ左ノ如シ  
 一、宅坪五千九百四十一坪詳細ハ添附図面通り

第二 賃貸借期間ハ大正八年三月二十八日ヨリ大正十七年十二月三十一日迄トス但シ前記期間満了ノ際ハ双方協議ノ上賃借料ヲ定メ尙相当期間契約ヲ延長ヲ為スヲ得ベキ事

第三 賃借料ハ左ノ通り  
 大正八年五月三十一日迄ハ無料トス  
 大正九年一月一日ヨリ大正十年十二月三十一日迄一坪当り一ヶ月金十五銭ノ事  
 大正十一年一月一日ヨリ大正十二年十二月三十一日迄一坪二付一ヶ月金二十五銭ノ事

大正十三年一月一日ヨリ大正十六年十二月三十一日迄一坪二付一ヶ月金三十銭ノ事

大正十七年一月一日ヨリ大正十七年十二月三十一日迄一坪二付一ヶ月金四十銭ノ事

第四 賃借料ノ支払ハ毎月末日迄二翌月分ヲ乙ヨリ甲ニ前払スベキ事

第五 乙ガ市有道路ノ許可ヲ得テ使用スル場合ニハ永久借地人ノ余徳トシ甲ハ乙ニ対シテ地代ヲ請求セザルコト

第六 賃借地内ノ下水道等ノ新設修理及海ノ浚渫ニ要スル費用並ニ下水掃除ニ係ル始末等ハ總テ乙ニ於テ負担スベキ事

第七 契約解除又ハ期間満了ノ際ハ乙ニ於テ地所ヲ原形ニ復シ返地スベク若シ其履行ヲ怠リ甲ニ損害ヲ及ボシタル件ハ一切乙ニ於テ之ヲ賠償スベキ事

右契約ノ確實ヲ保証スル為メ本証書ヲ作成シ各一通ヲ保有ス。

大正八年三月二十八日

賃借人 新潟県中蒲原郡金津村大字金津五十五番地  
 戸主 中野忠太郎  
 代理人 東京市牛込区納戸町十九番地 新田定五郎  
 賃借人 東京市豊町区銭瓶町二番地 梁瀬長太郎

につき金四十銭の定とすること、また借地内にある道路予定地約六百坪は市所有地である故に地代は免除とし、この土地を後日市より地主が払下げに成功した時は約六百坪の土地の使用権は永久借地人の余得として地代は請求せぬという、現代にない寛大なる約束であった。賃貸借用地は芝浦南浜町二番地より七番地まで約一万五千坪であった。

その後東京市電気局の電車車庫（現在の五冷ビルの隣り）を設置するため路線及び道路（現在本社前の道路）が芝浦一丁目二丁目三丁目を横断して、借地も二分されてしまったので、海に近い岸壁に面した方を梁瀬が借用した。現在の東京倉庫及び森永倉庫の土地を藤原、高橋の両氏が借用した。その土地に藤原氏は内外自動車興業会社の芝浦工場を建設して梁瀬と同様自動車組立工場並びに修理工場に使用した。

父は、個人名義で契約した借地五千九百余坪とこの土地内の道路予定地約六百坪合計六千五百坪の内約四千五百坪を梁瀬自動車会社に使用させ、残る二千坪の内一千坪を自動車保管倉庫（ガレージ）に使用した。（現在のウェスタンの新館ビルの場所）他の一千坪は大正九年三月第一次世界大戦後の世界的不況のため大正十年春に借地権を手放すことになり、現在の芝浦会館及びその隣地のホンダの地続き一千坪の借地権を金六万円で細川力蔵氏（雅叙園の創立者）に譲渡した。

### 芝浦工場の建設

話は元に戻り、大正八年春、会社は工場四棟一千三百坪と付属の四百坪計一千七百坪の建設に着手した。設計者は後日日産自動車の吉原工場長になった田中常三郎氏で、大正八年十二月に工場は完成した。施工者は清水組で、米国より初入荷の米松を使用した。屋根には浅野スレートの新建材スレート葺を使用した。建築費は坪あたり金六十円（現在の十五万円位）であった。

大正十一年には道路に面した土地に二階建木造社屋百七十坪を建てた。この建物は新宿淀橋角筈の煙草専売局

の古家屋を再建したものであり、建築費総額は金三万円（現在の五千万円位）であった。この建物は工場と離れた別棟であったので、大正十一年四月から通信省に貸貸し、昭和二年に簡易保険局が発足したので保険局の書類倉庫として使用された。使用料は一ヶ月坪当たり金四円の割で（現在の一坪当たり金一万円に相当する）毎年六百八十円を受け取った。昭和十年頃からこの建物を自動車部品倉庫として、昭和十六年まで会社で使用し、そこに田島要次郎（現・監査役）、大井寿郎（退社）、金子潔（現・GM事業部パーツ部長）君たちが働いていたわけである。

終戦後は一時米軍に接収されたが、解除後は改造して、階下を富士銀行に家賃毎月九千円で貸し、後に高浜工場より本社が移転してきて、本社事務所として使用されるようになり、これが現在のヤナセ本社となった。

大正七年に第一次世界大戦が終了し、昭和四年欧米諸国に大不況が起こった。そのあおりをうけて我が国にも大不景気が発生し、日本経済は大破綻をきたした。当時我が国の主な輸出品である絹糸が大暴落して、その余波を受け、諸物価、特に株価の大暴落、国内諸銀行の取りつけ騒ぎが相次いで起こり、倒産者が続出する等の恐慌に遭遇した。自動車販売は中斷され、世相は一変して、暗黒時代が出現した。

これは芝浦工場開設三ヶ月後の出来事であり、当分の間明るい見通しもつかない有様であったので、会社は開店休業状態が続き、その年の七月には社員の半減整理を断行せざるを得ず、多くの人材を失った。



当時の芝浦工場。中央左手に荷揚げ用クレーン

大正九年頃には工場法も制定されておらず、労働基準法もなく、従って退職金等の定めは皆無であった。その後このような事が社会問題となり、大正十二年九月一日の関東大震災を契機として労使間の紛争が起きたので、その結果、大正十三年に工場法（警視庁工場課新設）が制定・実施され、続いて昭和二年には健康保険法（社会局創立）が制定・実施された。

その後、第二次世界大戦終了後、昭和二十二年に、従来の工場法が改定されて現在の労働基準法ができたわけである。労災保険、失業保険、厚生年金法等社会保障に対する法律が制定され、労使間の紛争を調整し、産業の発展に寄与することになった。

大正十年五月の会社創立記念日には、芝浦工場の守護神として伏見稻荷神社の御神体を奉戴して芝浦工場の一隅に安置し、我が会社の発展と芝浦工場並びに従業員の安全を祈願し、守護神として毎年五月二十五日を稻荷神社の祭日として盛大なお祭が行なわれた。これは、大阪支店長梅村四郎氏が伏見本殿に参拝、御神体を奉戴、芝浦に奉迎したものである。

既に述べた通り、芝浦工場が完成したので、前述の中野町の浅田の借地権を手放すことになった。麴町区内幸町の車庫（梁瀬長太郎個人経営の自動車保管業）もますます狭隘を感じてきたので、呉服橋の旧工場の古材（一棟一五六坪のバラック三棟分）を使用し、芝浦の空地約一千坪に建設、自動車保管の車庫業を拡張した（鈴木喜藤治氏が建設担当者となった。鈴木氏は梁瀬ガレージ株式会社梁瀬正寿常務の厳父）。そして前記の内幸町の車庫と芝浦車庫の二ヶ所を、平出円一氏が支配人となり、丸山道雄氏が芝浦車庫主任となった。昭和六年には清水利徳氏と交替し、昭和二十三年十二月二十九日、平出円一氏死去の後、梁瀬正寿氏がその後を引受け支配人となった。

## 地代値上げの阻止

芝浦借地契約當時は大正十七年まで地代金四十銭の約束であったが、大正十年より地代が上昇し、大正十五年には一坪当たり金四十五銭の値上げ請求を受けるようになった。

借地人はその負担に耐えかね、大正十五年春借地人大会を開き、大会決議により芝浦土地の地代値上反対期成同盟会十二万坪の借地人団結)を結成して会長に細川力蔵氏(雅叙園のオーナー)を選定し、地主中野完市氏の子息中野忠太郎氏を相手どり、当時法曹界の実力者横山勝太郎氏と高橋義次氏、桑野氏、塩坂氏の四弁護士を顧問弁護士とし、借地人代表十七名は新潟県新津町の中野家に乗り込んだ。しかし交渉決裂によって本訴に及び、裁判判決の結果、大正十三年までさかのぼって、坪当たり一ヶ月金四十五銭が金三十一銭五厘に値下げの判決があり、大勝利を得たことがあった。その後地主は借地人たちの団結の強さに驚き、以来二十年間地代値上げは思いどまり、昭和二十一年の固定資産税確定により正当な税率により地代を訂正し、地主と借地人と円満なる交渉を得るようになった。

自動車保管の車庫業も安全を期する見地より車庫取締の法規が制定され、火災予防等のため、従来のバラック建ての車庫では営業が困難な時代になったので、表道路に面した所(現在のヤナセ新館)に間口十七間(三〇・四メートル)奥行十二間(二一・五メートル)、約二百坪の鉄筋コンクリート(屋根もコンクリート)の車庫を建設することになり、請負人関口元司氏(見積金二万一千円)に発注した。この車庫は昭和二年十二月に完成し車庫業を継続することができた。その後改造して現在のウエスタン自動車株式会社として使用、現在のヤナセ新館ビルになったわけである。

## 土地購入の経緯

第二次世界大戦終了後、中野家は、新潟県内所有の田畑六百余町歩の土地が農地法により解放されたことにより、必要となった財産税納税資金のため、芝浦十二万坪の土地全部を

借地人にまとめて売却してもよろしいとの申し出があったので、借地人大会を開催して種々協議を重ねたが、各自の事情の相異により、この地主の申し出は不調に終った。地主の申し出は十二万坪を三千万円、坪当り金二百五十円の希望であった。今にして思えば全く夢のような話と思われるであろう。

その当時の経済状態から見て、前途の見通しが定まらぬため、また、借地借家法により借地人が有利に取り扱われていたので、地代が安価で借地の方が得であると考えた人が多く、ほとんどの借地人はこれを断った。その中で、ただ一人西芝浦三丁目の五十嵐冷凍株式会社五十嵐社長は、借地約四千坪を一坪当たり金三百円、合計百二十万円で買取ったのであり、今さらながらこの先見性には頭が下がるのである。

昭和三十年より固定資産税増額による地代値上げと契約期限満了による更新契約、又は名義変更書替等の場合は、高額な手数料や更新料が必要となり、期限満了の場合、地主より借地人に対し土地明渡し等の通告がなされることも考えねばならぬものとなった。当社の大正八年三月二十八日より満四十年間の借地権も昭和三十四年三月二十七日をもって期限満了であった。この芝浦の土地は期限満了後も実際には明渡しはできない事情にあったので、会社としては昭和三十四年三月二十八日以前（明渡し通告がなされる前）に、芝浦の土地を会社所有にしておかねばならなかった。当時、会社の不動産関係は父の独断で行なわれ、その助手的働きをしていたのが現社友の梁瀬喜作氏のみであった。

昭和二十年、社長の座について私は、毎月の社員の給与を支払うため、朝から晩まで駆け回っていたが、その当時、日本昼夜銀行芝浦営業所（ボーリング場のある東京倉庫の建物の場所にあった。後日、安田銀行―富士銀行に合併され、富士銀行芝浦営業所となる）所長笹井健二氏から、芝浦の土地が借地契約満了の時、継続するにしても莫大な金がかかる故、今の内に買い取った方が良いのではないか、今日ならば、百五十万円で手が打てま

すよ、その資金も私の方で面倒をましよう、との話があった。

私は大いに喜び、その話を是非進めてほしいと答えた。これを当時の経理部長大原当一郎氏に話した所、その夜父からの電話で「安く借りているものを買う馬鹿者がどこにいる。余計なことをするな。土地というのは借りているのが一番良いことだ」と理屈ぬきになられてしまった。私は、借地契約満期の昭和三十四年三月には一体どういふことになるのだろうと一人気をもんでいた。

しかし正しいと思ったことを言っただけなられたからには、父に何かそれなりの理由があつたのと思つて黙つてしまつた。ちょうど、五十嵐水産が買い取られた前後であつた。そこで、その当時不動産の仕事は一切父から委されていた梁瀬喜作氏の話を聞いてみた。梁瀬喜作氏は大正五年の入社、現在は社友として毎日出社しておられる。梁瀬喜作氏の話は、つぎのようなものであつた。

「芝浦の土地は、最初より梁瀬長太郎氏個人名義の賃貸借契約で、大正九年に梁瀬自動車株式会社に転貸をしていたのであります。この転貸ということが如何に重大な意義を持つかは、次の事例でも明確であります。

終戦時、江東区猿江裏町深川に商事の砥油倉庫の土地があり、それは大正四年創業以来、三井物産の油倉庫を前述の通り地主小林伝之助氏より引続き四十余年にわたり借用の土地でありましたが、大東亜戦争による戦災で倉庫焼失後は焼跡整理に手が廻りかねてそのままに放置してあつたので、蓮見徳男氏に一時的に石炭置場として転貸をしていました。この倉庫の土地は、三井物産株式会社の砥油類の倉庫として使用していた土地を、大正四年梁瀬商会が承継して昭和の今日まで借地していたもので、期限満了後四十年以上も経過していました。そこで地主に借地更新を申出た所、地主の申すには『土地が瘦せるから石炭置場には使用しないと約束してある筈だ』と父から聞いておつたが、その約束を無視して石炭置場に転貸することは、約束違反である。自分等兄弟は戦

災により焼け出され、仕事もなく、行くところもないから、材木屋を開業するのに使用したい。更新は事実上できないから明渡してもらいたい』と申し出があったわけです。

当方から強く断ったところ、本訴訟により明渡し請求をしてきたので、岩松顧問弁護士に委任し、四年間地主と戦いましたが、ついに会社の敗訴となり、四百坪の借地を明渡し、是非とも必要なる残り百三十坪余の土地を新規に権利金を出し、三十ヶ年の賃貸借契約をする判決が下り、残念ながらこの判決に服した事がありました。

この裁判における会社の敗訴は、転貸した事が最大の理由であった事を体験しました。土地賃貸に対して多額の授業料を支払わねば、一人前にはなれないでしょう。この芝浦の借地についても、会社使用分について転貸を理由に明渡しの話が出たら、それこそ一生の不覚だ、と心ひそかに心痛しておりました。そして軽々しく行動できないことなので、何とか良い思案はないものかと思ひ悩んでおりました。

話はさかのぼりますが、終戦後、芝浦の土地を中野興業株式会社から買い取った当時の中野土地株式会社の社長鈴木武治氏は、当時ある事件のため、米国へ逃避旅行をされており、不在中でありました。そこで中野土地株式会社の土地賃貸事務所は星氏が一切担当しており、この星氏は大正八年中野忠太郎氏が芝浦土地十二万坪を手に入れた当時より今日まで、引続き五十年以上勤務しておられた古参者でありました。私は星氏と同様五十年以上も芝浦に居り、星氏とは親密に話し合ひのできる間柄でありました。

従来、芝浦土地の地代は契約通り梁瀬長太郎氏個人宛の領収書であり、実際は梁瀬自動車株式会社の経理部が代行して支払いをなしておりました。中野土地株式会社の代表者（社長鈴木武治氏）が交替したので、芝浦土地賃貸契約書の書き替えを致したいとの話があり、契約書の原案がきたので、岩松弁護士と相談し内容を検討しました。その結果転貸を禁ずる条項があったので、星氏と相談して個人の借地契約を会社代表取締役梁瀬長太郎氏

に差し替えてもらいたい旨を話したところ、星氏は好意的に契約書を会社代表取締役社長に変更して契約書を作成してくれました。これによって転貸の事は直ちに解消できた次第です。昭和二十五年十二月二十日のことでした。

これで後日会社が土地購入の際、少しの支障も生ずることなく事を運ぶことができ状態になりました。永年にわたる星氏との交際がこの良い結果となった事は実に嬉しいことと感謝しており、星氏が万事承知の上で取り計らってくれた事を心から今もなお感謝している次第であります。この事は土地購入ができるかできないかの分岐点であって、非常に重大な事でありませう。

賃貸契約期限満了は昭和三十四年三月二十七日であり、転貸解消は昭和二十五年十一月二十日で、約九年前に用意ができた次第であります。そこで、土地購入のことにつき、現社長梁瀬次郎氏に今日までの経過と五年前よりの実状調査報告をなし、芝浦の借地を我が社の所有にする方法につきお話し申しあげたところ、社長の申されるには、会社の将来のためにも、芝浦の土地五千五百四十九坪を我が社の所有にする事は重大な意義をもつものだから、万難を排して実現してもらいたい、とのことでありました。当時、砥油部長の職にあった私は、砥油類を売る努力より土地購入に全力をつくしてもらいたいとの命令で、一大決心をもって交渉の方針を良く研究し、良く考え、その上で直接支配人中村功氏に面接、我が社では従来の借地を全部買受けたい希望であるからよろしくお願いする、と申し入れました。

さて、従来芝浦土地の一般借地人の考えは、土地の使用料金を支払っていけば地主に対して恩も功もないと考えているような態度でありましたが、我が社では土地を借用しそれを使って営業が継続できることを感謝しており、毎月の土地使用料金は、大原経理部長に懇請して社員の月給日の毎月二十五日に支払うことに心がけ、実行

しておりました。また、益と年末には必ず事務所に出向き挨拶と感謝の意を表わしておりましたので、特に支配人申村功氏に土地購入を好条件で成立するように尽力を懇請したところ、快く応ぜられました。この土地購入は会社としても重大な事であり、会社に不利益な条件や手落ちがあつては申し訳がないことだと思い、当時経理部長の大原当二郎氏にご協力を願ひ、最初より二人で交渉を重ね、長日時を費した後、土地購入の契約が成立しました。これにより大正八年三月二十八日より満四十年間借地として使用しておりました芝浦工場の土地も、会社の所有となりました。借地から所有地に移行したときの代金が八千四百三十四万円でありました」

梁瀬喜作氏の話は以上のようなものであつたが、父の個人名義の借地権は、会社で土地購入したことで失われたものの、これを父は七面倒なことよ、と私の姉妹に徹底しておかなかつたため、昭和三十一年六月父の死去後遺産として、芝浦のガレージの土地について誤解が生じ、悩まされた。土地のみならず、ガレージ経営権が梁瀬正寿氏の名義になつていたことも問題をむずかしくし、いやな思いをした。結局、かつて私が百五十万円で購入しようと考え、父に叱られて買い取りを中止したその土地を、八千四百三十四万円で購入したことになる。

## 第一次世界大戦

### 大戦の爪跡

大正三年（一九一四年）から大正七年（一九一八年）まで九九〇万人の死者、二千万人の負傷者、当時のお金にして四千億円の戦費という大変な犠牲をもって戦われた第一次世界大戦は、その後数多くの爪跡を残して終戦した。第一次世界大戦の遺産として多くのものがあるが、第一に挙げるとすれば大正八年（一九一九年）十一月のロシア革命であろう。これにより、世界が資本主義と社会主義という二つの

体制に分裂した。これを契機にいずれの資本主義国でも共産党を中心とする社会主義運動の力がにわかに強くなり、従って社会主義運動に対する支配階級の対策も強められた。昭和の時代になり、日本においてもファシズムが台頭した原因は、こういうコミンテルンを中心とした国際共産主義運動への対抗の意味が強かったのである。ドイツでヒトラーのナチス党が現れたのも、同じ理由である。

第二にはアメリカの経済力が著しく大きくなり、これが世界の経済を動かすような力を持ち始めた。アメリカ経済は第一次大戦前に既に発達をみせてはいたが、ヨーロッパに対しては、農産物を輸出し工業製品を輸入する後進国であった。またヨーロッパから大きな借金をし、年々金利を払っていた債務国でもあった。大正年代すなわち第一次世界大戦以来、アメリカは強大な工業国に成長し、ヨーロッパに対し大きな債権を持つ国になった。ドルが世界の経済を支配し、世界中の金がアメリカに集中し、ますます経済力が強くなって、こういうアメリカの勃興とヨーロッパの没落が世界経済の不均衡を著しくした。第三に、植民地諸国における民族主義の台頭である。この動きは第二次大戦後特に強くなり、また植民地の独立も実現されたが、その火種はすでに第一次大戦後にまかれたものである。

日本が新しい近代国家、世界の一員として仲間入りし、新しく出発したこの大正年代に、会社も大正四年（一九一五年）に発足した訳である。大正七年（一九一八年）十一月十一日、ドイツの降服により第一次世界大戦は終わり、ベルサイユ講和会議で戦後処理の問題が片づけられた。ドイツは戦後激しいインフレに見舞われ、大正十三年（一九二四年）には、一兆倍という考えられない物価騰貴に悩むことになった。日本も既に記した如く、第一次大戦時に拡大された経済が戦争終了と同時に縮小され、大正九年（一九二〇年）の大ガタに遭遇し、ひ弱な体質の企業は倒産し、大正十二年（一九二三年）におきた関東大震災の復興経済として多少立ち直り、昭和の

時代を迎えたのである。

### 日本経済の動向

第一次世界大戦が起きると、世界経済の中心であった英国を初めとするヨーロッパ諸国の経済は、一時麻痺状態に陥った。その中で、ヨーロッパの主戦場から遠く離れていた日本経済も、様々な影響を被った。まず大正五年（一九一六年）後半から輸出の増強をきっかけに好況に転じた。この年の春からロシアと英国に対する輸出が増大し始め、下半期になると軍需品の輸出が増大した。日露戦争以来入超続きであった日本の貿易は、一挙に輸出超過に転じたのである。出超額は大正四年には一億七千五百万円、五年には三億七千万円、六年には五億六千万円に達した。ところが大戦勃発以来、しばらくの間は企業熱が起らなかった。資本家、企業家は日露戦争以来のブームで設備過剰に悩んでおり、また他方で戦争の早期終結を恐れ、設備の拡張を手控えていた。その頃日本の工業家の提唱で日本工業倶楽部設立の声がおこった。既に商工会議所が主に中小商工業企業の利益を代表するものとして設立されていたが、これに対し工業倶楽部は三井、三菱、渋沢、大倉、安田、日比谷などの代表的大資本家により結成された。大正六年三月に創立総会が行なわれ、理事長は三井の団琢磨氏（前プリンス自動車団伊能社長の嫡父、音楽家団伊久磨氏の祖父）、評議員会長は三菱の豊川良平氏であった。

大正五年から六年にかけて企業の利益は急増し、造船をトップに海運、鉱業、綿糸、紡績機械、製紙、化学工業と発展した。当時鐘紡社長であった武藤山治氏は、全紡績業界を強く掌握していた。未曾有の戦争景気の到来により成金が続々出現し、その横綱は鉱山では日立鉱山の久原房之助氏、船成金は山下亀三郎氏、勝田銀次郎氏等で、中でも徒手空拳の状態から成金となったのが内田信也氏（後の鉄道大臣）であった。内田氏は父と同級生で三井物産の船舶部から独立し、大成功をおさめた人である。貿易では大戦景気の中で最も発展したのが神戸の鈴

木商店で、英國、アメリカの鉄を買い占め、造船に目をつけ、幡磨造船、鳥羽造船を経営し、米、豆類、穀類、銅、亜鉛など手広く買い占め、日本セルロイド、帝國染料、帝國人造絹糸、豊年製油、旭石油など六十数社を持ち、三井、三菱に並ぶ大財閥にのし上がった。

この反面、大正三年を一〇〇とした物価指数は四年が一〇二、五年一二二、六年一四五、七年が二〇二と上昇し、賃金指数は七年が一五三と大きな開きを見せた。また、この頃から労働運動が次第に盛んとなり、大正五年九月一日には西尾末広氏（戦後芦田内閣副総理、民社党初代委員長）などが職工組合期成同志会を作り、資本と労働との調和に努力を始めた。

### 日本外交の動向

第一次世界大戦が文字通り国家の総力をあげた死闘となると、交戦諸国は戦争の重荷にあえぎ、イギリス・フランス・ロシアの連合諸国は、ヨーロッパの戦争に日本が積極的に協力することを強く要望するようになった。とりわけロシアの内情勢が著しく悪化したため、日本の協力で軍需品を補給し、政治的にもてこ入れすることが急務となった。

大正五年一月にはロシア皇帝の特使ゲオルギー大公が日本に特派され、軍需品の供給と日露同盟の締結を要望し、その代償として、松花江以南、満州鉄道を日本に売却することを申し入れた。それまでも日本はロシアに大砲その他の武器を供給し、同時に数多い従軍将校を送りこんでいた。満州事変当時に陸軍大臣となった荒木貞夫氏もその一人であった。大正五年七月三日に第四回の日露協約が調印され、これによってロシアは背後の安全を保障された。ロシアの大蔵省証券は大正五年二月から五回にわたって日本で売り出され、総額三億四千万円に達した。日本からは兵器、衣服、靴など多量の物資が供給されたが、ロシアが代償として申し出た満州鉄道の譲渡は、ロシアが極力ひき伸ばしをはかったため、なかなか実現しないまま、ロシア革命を迎えてしまった。

その頃から日本の中国侵略も次第に露骨になってきた。大正四年（一九一五年）秋に中国の大總統の袁世凱が帝政を採用し、自らが皇帝になろうと企てると、日本はこれが中国の動搖を招き、ひいては國際情勢に悪影響を及ぼすという理由で、イギリス・フランス・ロシアの三国を誘って袁世凱の帝政延期を勧告した。その結果、大正五年二月末には袁世凱もやむなく帝政の実施を延期した。日本は袁世凱を排撃するチャンスがきたので、革命派や清朝の復活をはかる滿州の宗社党を応援し、袁世凱排斥の兵を上げさせ、その混乱に乗じて日本に都合の良い政権を作り出そうとした。

これら一連の袁世凱排斥工作は田中義一、福田雅太郎らに代表される陸軍の中堅層が中心となって、大陸浪人や一部の政商と手を組んで進めたもので、ほんの目先だけしか見ようとしないうる無謀極まるものであった。大隈内閣はこれに追隨をし、中国政策には完全に失敗したと言えよう。同じ軍国主義者でも明治國家の建設にあたった山県元帥は列強の圧力を絶えず考慮に置き、國際情勢の推移に慎重な配慮を怠らなかつたが、日露戦争後に陸軍の要職についた中堅層ははるかに冒險主義的であつた。日露戦争以後、日本軍は青島攻略などの機会を利用して中支那派遣隊、青島守備隊を新設し、中国全土にわたつて軍事顧問、特務機関、駐在武官、諜報機関などの網の目を張り巡らした。当時、中国各地の情報を最も早くキャッチしたのは日本の參謀本部だと言われている。当時の日本軍部は長州の陸軍と薩摩の海軍と二つに明確に分かれていたようである。この長州の陸軍を牛耳つていた実力者が山県元帥で、山県公の屋敷が今日の椿山荘であることから、いかに山県公が力があつたかがわかると思う。長州の陸軍と薩摩の海軍に加わつて、官僚派と政党派が互に入り組んで、大正五年・六年の総選挙に臨み、後藤新平などが内務大臣として大いに活躍した時代である。

大正七年（一九一八年）五月になると、ロシア革命後の情勢を利用して、日本は中国と秘密に日華陸軍共同防

敵軍事協定を結んだ。そのため、日華両軍の北滿州からシベリア出兵、中国地方官吏の日本軍への協力、諜報交換、兵器・軍需品・原料の相互供給が定められた。しかし、実際はロシア革命に対抗するため中国軍に兵器などを供給すると共に、中国を日本軍の勢力下に置こうという狙いであった。その年の秋には、日華軍事協定に基づいて、日本軍の援助で日本の兵器、日本の資金、日本の軍事顧問による中国の軍隊が作られることになった。

他方、大正六年（一九一七年）になると世界大戦はさらに拡大した。イギリス海軍の海上封鎖に苦しめられたドイツは、この年二月にはついに無差別潜水艦戦を宣告した。ドイツの潜水艦の脅威が激化すると共に、連合国では輸送船団の護衛のために日本の駆逐艦を派遣するよう要請した。それまで日本は、ヨーロッパの戦闘には参加をしていなかったが、その年二月には特務艦隊を編成して地中海に派遣し、連合国船団の護衛にその性能を発揮した。日本はこの機会をとらえてイギリスとの間に秘密条約を結び、太平洋の赤道以南のドイツ領諸島に関するイギリスの要求を日本が支持することを条件に、山東のドイツ権益と赤道以北のドイツ領諸島の処分に關する日本の要求を講和会議で支持することを保証させた。

アメリカもドイツが無差別潜水艦戦を宣言すると、直ちにドイツと国交を断絶し、四月には宣戦を布告した。大戦の初期はアメリカがむしろイギリスの通商妨害に抗議をしていたが、その後イギリス、フランスに對する債権国になるにつれて、次第に両国に接近するようになった。アメリカは西部戦線に兵力を送ったが、それよりも経済的な援助が重大な意味を持っていた。

### ロシア革命

このアメリカの参戦にさき立って、敗戦続きのロシアで革命がおこった。國際婦人デーにあたる三月八日、ロシア暦の二月二十三日に首都ペトログラドで女子の織維労働者がストライキに立ち上がると、多くの婦人が合流して、パンをよこせと叫んで市庁に押しかけた。十二日には兵士が反乱をお

こして労働者と合流し、労働者と兵隊の委員会が組織され、ペトログラード全市を支配下に置いた。これがいわゆる二月革命である。ロシアの社会民主労働党は、皇帝の専制政治に対しては少数精鋭主義で革命的な地下工作を行なうべきだとするポリシェヴィキと、ドイツ社会民主党の影響下にある合法政党的メニシェヴィキとの両派に分裂していた。ところが第一次世界大戦が始まると、ヨーロッパ諸国の社会主義政党的はいずれも戦争協力の態度に転じ、その中で戦争反対を叫び続けたのはポリシェヴィキとイギリス労働党内のマクトナルド一派だけであった。ポリシェヴィキの指導者レーニンはスイスに亡命していたが、大正五年（一九一六年）には『帝國主義論』の原稿を書きあげていた。

ロシア革命がおこったことは、一方では日本の北隣に社会主義国が生まれることを意味し、他方ではロシアの軍事力が弱体化したことを意味した。ロシア革命がおきると、日本の陸軍や外務省の間からはシベリアに出兵してロシア革命の波及を防ぎ、東シベリアに日本の勢力下にある緩衝国を作ろうという画策が始まった。イギリスとフランスは、穀物の宝庫であるウクライナや油田地帯のコーカサスがドイツの手に落ちるのを防ぐという理由で、南ロシアの反ポリシェヴィキ政権を支援する方針を決め、また、ウラジヴォストークに集積してある軍需品がドイツに渡るのを防ぐという理由で、日本とアメリカにもシベリア出兵を要請してきた。しかし、当時アジアで対抗しうる唯一の実力者であったアメリカは、日本のシベリア出兵には反対であった。シベリアを日本の手に委ねることは危険であり、また中国にも重圧を及ぼすことになるという反対をしていたのである。

### シベリア出兵

日本の軍部の一部や外務省はシベリアに勢力をのばす機会をねらっていたが、一月にウラジヴォストークの市会と労働者並びに兵士との間に紛争がおきると、海軍は軍艦を派遣し、四月に日本人殺傷事件がおきると陸戦隊を上陸させた。他方、陸軍は北満州で反ポリシェヴィキの旗揚げをしたコ

サックの隊長セミョーノフ大尉に武器を援助して、シベリアに攻め入らせた。八月二日には日本とアメリカがシベリア出兵を宣言し、日米協同出兵が実施され、日本軍一万二千人、アメリカ軍七千人、イギリス・フランス軍五千八百人で、日本が指揮権を握ることになった。ところが一旦出兵が始まると、参謀本部は軍隊が窮迫しているとの理由から独断で増兵をすすめた。アメリカと協議もせず、統帥権の独立を楯に外交調査会にも諮問しなかつた。第十二師団をウラジヴォストークに上陸させ、次に満鉄沿線駐屯の第七師団、その次に第三師団がソ満国境の満州里からバイカル州方面に出動した。そして九月中旬までに日本軍がハバロフスクやチタを占領し、ニコラエフスクにも陸戦隊が上陸した。十月末には、シベリアの日本軍は北満派遣の一万二千人を含めて、約七万二千人に上った。このシベリア出兵はシベリアの民衆の敵意をあおると共に、日米関係の悪化を招いたのである。

一方、日本国内では第一次大戦勃発直後に暴落した米価が、大正六年の中頃になると、急テンポで上昇し始めた。大正六年一月に初めて一石十五円をこえたのが、六月には早くも二十五円をこえ、翌大正七年に入っても騰貴を続け、その年七月十七日には三十円台に上った。米の価格の暴騰の背景には、大戦中の資本主義の発展が、地主制の下に、遅れた農業との間に引きおこした大きな矛盾があった。この米価の暴騰は一般民衆の生活難を深刻にし、社会不安を増大させた。その頃におきたのが米騒動である。これは富山県魚津町で漁民部落の連中からおこり、全国的にだんだんと波及し、大正年代のいわゆる米騒動となったわけである。

### 文化の動向

大正七年の小学校教科書の改定で、その時代の教育方針、または児童中心の教育思想が大幅に変わり、その年の新入生からそれまでの日の丸の旗で始まる「ハタ、タコ、コマ」の国語読本にかわって、表紙が薄墨色の「ハナ、ハト」を使うようになった。この教科書は昭和八年（一九三三年）に「サイタ、サイタ」の色刷りの国語読本とかわるまで、十五年間使用されたわけであるが、基本方針として国家主義

的な教育方針ということには変わりがなかった。

東京駅が完成されたのが、大正十二年の関東大震災の約十年前の大正三年十二月十八日、贅沢品なら何でもよろうと言われた三越呉服店の五階建の新館が開業されたのも、大正三年十月一日であった。それより少し前、大正二年七月に小林一三氏によって作られた宝塚少女合唱隊が、翌大正三年四月に宝塚少女歌劇と改称され、日本で初めての少女歌劇が公演された。

この様に、明治の終わりから大正の初めにかけては思想、文学、演劇などの世界で自由を求める動きがあちこちから燃え上ってきた。日清・日露の両戦争を闘うために政府は国民に耐乏生活を強要してきたが、日露戦争後には国家主義の呪縛がわずかながら解け始めたのである。

芸術座が大正三年三月に帝国劇場で初めて公演した『復活』は、驚くほどの成功をおさめた。カチューシャに扮した松井須磨子の人気はすばらしく、松井須磨子が前年に病死した島村抱月の後を追って自殺する大正八年一月までの間に上演した回数は、実に四百四十四回に上った。この『復活』の成功には、劇中でカチューシャに扮した松井須磨子の歌うカチューシャの歌、すなわち「カチューシャ可愛や 別れのつらさ」せめてあわ雪とけぬ間に 神に願いをララかけましようか」があった。芸術座は東京だけでなく大阪、京都、中国から九州まで巡業にでかけ、全国津々浦々このカチューシャの歌が歌われた。当時はもちろんラジオもテレビもトーキーの映画もない時代であり、全国の民衆を瞬く間に魅了したことは驚くべきことであった。聞くところによると、四十年以上当社に勤務し先年退社した小山貞子氏は、松井須磨子の姪に当たられるらしい。カチューシャの歌の作曲は、作詞の島村抱月の書生をしながら上野の音楽学校を卒業した中山晋平氏であった。

また、世界大戦の中で日本の社会が大きく変化し、ヨーロッパ思想がどしどしと日本に流入してくる中から哲

学の流行が生まれてきた。大正二年の暮に東京の神田の一角に岩波書店が誕生し、大正四年から哲学叢書全十二巻が刊行されたが、その御主人の岩波茂雄氏は私の父とも非常に親しく、よく熱海の山王ホテルの集まりで一緒であった。

大正七年六月に、作家の鈴木三重吉氏が作家・詩人・作曲家の協力を得て、雑誌『赤い鳥』を創刊した。鈴木氏は子供たちのための説物や音楽のないことを憂慮して、童話と童謡を創作する運動を進め、五千人の会員を集めた結果、『赤い鳥』という雑誌を発行したのである。この『赤い鳥』の大正八年五月号には西条八十作詞、成田為三作曲の『カナリヤ』の曲が掲載され、大変に大きな反響を呼びおこした。「歌を忘れたカナリヤはうしろの山に捨てましょうか、いえいえそれはなりません……」この歌が当時の人々の心を強くゆさぶったのである。この当時のカナリヤは「金糸雀」と書いた。

労働問題が非常に活発化してきたと同時に、婦人の参政権運動も積極的な動きをみせてきた。すなわち、大正の後半になると社会主義的な動きが顕著に現われてきたわけである。

また、第一次世界大戦中の産業の発展に伴って、人口の都市集中が進んできた。大正七年末までには六大都市に総人口の十二％近い六百十三万人が集中し、しかも近郊までだんだんとあふれ出してきた。家屋の密集化、住宅難と借地・借家問題、地価騰貴など色々と深刻な問題がおきていた。東京も急激に膨張・発展してきたので、大正九月末にはかねてから市制改革の必要性を力説していた後藤新平氏が市長に就任し、いわゆる八億円計画と呼ばれる東京市大改造計画案を作ったが、この案は大風呂敷と非難されて実現することができなかった。

戦争をきっかけとして、高揚してきた様々な大衆運動にゆさぶられながら、日本経済の指導者は資本主義を不況から引き上げ、新しい国際情勢に対応するという仕事を果たさなければならなかった。

大正九年（一九二十年）の、戦後の大ガラ（恐慌）が政府の救済で一応収まったとは言え、その後も不況情況が続いた。戦後にヨーロッパ諸国が復興してくると、日本は戦争中に拡大した市場を巻き返さずしてしまつた。また、大戦中に中国をはじめアジア諸国の工業化が進んだ上、中国で排日運動が続いたことも、日本商品の市場を狭める要因となつた。その上、政府の放漫な財政方針によってインフレが助長され、財政の整理はつかず、物価は割高になり、輸出も自ずから不振に陥つてしまつた。しかも軍備の拡張や生産設備の高度化を進めるためには欧米諸国からの機械類、鉄材、化学製品などの輸入に頼らなければならなかつた。そのため日本の貿易は大正八年以来輸入超過が続いて、関東大震災直前の大正十二年八月までの輸入超過の合計は、実に十九億五千万円に達してしまつた。これは第一次世界大戦中の四ヶ年の輸出超過での蓄積の合計十四億円を、はるかに上まわつた数字である。その結果、大正十年元旦には、それまで一貫して海軍拡張を主張してきた時事新報が、一転して海軍縮小を主張し始めた。

この軍縮は日本だけにとどまらず、国際的な問題として世界的にその関心が高まり、第一次世界大戦が終わつても続いていた建艦競争を何とかしなければならぬというのが、当面の大きな問題であつた。建艦競争の中心は何と言つてもアメリカ、イギリス、日本の三国であつたが、簡単にこの競争をやめ、直ちに軍縮に切りかえるということには多大な困難があつた。こうした情勢の中で、一九二一年七月、アメリカは軍備制限並びに太平洋極東問題を討議するために「ワシントン会議」を開くことを提案し、この海軍の軍縮にはアメリカ、イギリス、日本、イタリア、フランスの五ヶ国の他、ベルギー、オランダ、ポルトガル、中国の合計九ヶ国が参加した。ロシア革命後のソ連はもちろんワシントン会議には招へいされず、これに対抗して一九二二年一月に極東民族大会をモスクワで開き、日本から徳田球一氏、鈴木茂三郎氏、片山潜氏などが参加した。ワシントン会議はアメリカ

の実にみごとな演出のうちに始まり、イギリス、アメリカ、日本、フランス、イタリア五ヶ国の主力艦隊の保有量の比率を五対五対三対一・六七対一・六七というように決めた。航空母艦もほぼ同様の比率で保有量が制限された。

ワシントン会議に臨んだ日本全権団事務所の幣原全権付の佐分利貞男参事官（在米大使館参事官）は、ウェスタン自動車営業部担当課長佐分利一君のお父さんの叔父、つまり大叔父にあたる。また、全権顧問の横田千之助法制局長官は、第一勸業銀行名誉会長横田郁氏の嫡父であり、事務総長の松平恒雄欧米局長の令嬢が、秩父宮妃殿下となられたのである。

ワシントン条約が調印されたのは一九二二年（大正十一年）二月六日であったが、その数日前の二月一日に元老山県有朋翁が八十三才の生涯をとじた。日露戦争以来、山県元老が中心となって進めてきた対外政策の基本線は、日英同盟と日露協約とを使い分け、軍備の拡張を進めて、帝國主義的対立の中の日本の地位を確保し、朝鮮の支配を固め、中国に対する支配を広げていこうとするやり方であった。それがロシア革命とワシントン会議で崩れてしまった時に、ちょうど山県元老はその生涯をとじたわけである。

### 大戦の戦後処理

前にも記した如く、大正年代の大きなでき事である第一次世界大戦の爪跡として残されたものは、第一には一九一七年のロシア革命であった。また第二にはアメリカの経済力が著しく増大し、欧州諸国に対して債権国となり工業国となり、ドルの価値が非常に高くなったことである。その結果、世界中の金がアメリカに集中し、ドルが世界の経済を支配する傾向がにわかになくなり、アメリカとヨーロッパの間に大きな格差を生じてしまった。第三には植民地諸国における民族主義の台頭である。

一九一八年十一月十一日、ドイツの降伏によって第一次世界大戦は終わりを告げ、翌年六月のベルサイユ講和

會議で戦後処理の問題が一応片づけられた。そして戦後の恒久的な平和の維持をめざして国際連盟が一九二〇年（大正九年）十一月の総会で発足し、翌年十一月からワシントン軍縮會議が始まり、戦後の世界再建の体制が次々と作られていった。しかし反面、戦争が終わってもソ連ではなお内戦が続いており、日本、アメリカ、イギリスがシベリアに出兵をしていた。ドイツをはじめ東欧諸国でも敗戦後一時社会主義勢力が権力を握り、ほとんど革命に成功しそうなところまでいった。しかし、その頃からドイツは激しいインフレに見舞われ、一九二四年のマルクの安定まで、一兆倍という物価騰貴に悩むことになった。フランスもドイツほどではなかったにしろ、かなりのインフレを経験し、イギリスを除くほとんどのヨーロッパ諸国はインフレに悩まされていた。工業生産の回復もなかなか進まず、主要交戦国の工業生産は一九二四年、二五年まで、戦前より低い水準に低迷せざるを得なかった。

工業生産の回復が容易に進まなかったのは、一つには戦争による生産基盤の破壊があったのであるが、イギリスの如く直接の破壊をほとんど被らなかつた国まで生産の低下が著しいのは、戦前からの植民地に対する支配力が弱まり、アメリカや日本のそこへの進出が著しくなつたことや、アメリカとの生産力の格差が開いたためであつた。ドイツの場合は非常に破壊が大きかつたというだけのことではなく、領土の多くを失い、賠償という重い負担を負わされ、その上激しいインフレに見舞われるという悪条件が重なり、生産回復のめどはほとんどなかつたわけである。これは単に工業生産だけでなく、農業生産も回復は遅れた。ヨーロッパ全体からみても、小麦の生産は一九二〇年（大正九年）には一九一三年の六〇％の水準に下がっており、一九二五年に至るまで戦前の水準には戻らなかつた。

こうした生産の回復が遅れたことは、単に国民生活を窮乏におとし入れ、外貨の状態をいよいよ悪化させたば

かりでなく、多数の失業者をうみ出す原因となり、これがまた国内の政治不安を拡大させる条件ともなった。特にドイツは膨大な失業者をかかえ、その救済のために財政は破産状態におちいり、その経済はまさに壊滅的な様相を呈していたのである。このように世界大戦後数年、世界は政治的にも経済的にも著しい不安定な状態におかれた。その不安定を一層大きくしたものにドイツの賠償問題があった。

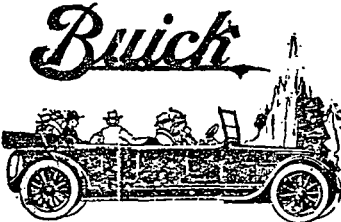
### 断の一字

事業も軌道に乗りかけて得意満面の父は、しかし、大正九年の大不況期に、再び裸一貫に舞いもどってしまった。強気で負け惜しみの強かった父ではあったが、この大正九年のガラ(株の暴落)については、晩年によく話をしてくれた。

「第一次世界大戦の影響で好況飛躍した日本経済は、大正九年の正月、お屠蘇を祝い、モチを腹一杯食べた頃から様相が変わり始めた。三月の声を聞くと、まず株式の様子に変調が見られ始め、その頃東株五百円、鐘紡六百円という勢つよい株式に、三月十五日から大ガラが見舞って来た。その日、朝から東株は六十円下げ、昼食に二十円戻し、後場で再び四十円下げてしまった。これが導火線となり、株式市場に大混乱が起きた」

父は第一次世界大戦後の好況で自動車の売れ行きが思いのほか良かったためか、この好況がもう少し続くと安心したのであろう、アメリカのゼネラルモーターズ社に大量発注であった。また、次の事業場として考えたのか、東京駅前約一千坪の土地を三菱地所から借り受け、地下室を

謹賀新年



ビウイク自動車

第六百五十四号新力新

總代理店

梁瀨商會

東京 大塚

東京 大塚 池袋 目黒 目黒 目黒 目黒 目黒

大正9年正月の新聞広告

合め建坪五千四百坪の七階建てのビルを建てるべく、すべて手配済みであった。三菱地所には建築発注、着工しており、加えて鉄材の値上がりを予想して数千トンの鉄材を購入済み所へ、このガラガラが始まったわけである。

「アメリカのゼネラルモーターズ社に発注した自動車は、間もなく船積みされる。これを心配された三井物産の武村貞一郎常務、安川雄之助常務は、至急アメリカ向け発注を取り消すよう強く忠告された。ただ一人の恩人として仰いでいる山本条太郎翁のもとへ相談に参上したところ、『悪い時は思い切つて処置をしなければならぬ、眼をつぶつて断の一字のみ』との御意見であった。そこで三菱地所にあやまって建築・借地をお断りし、加えて鉄材も転売してしまった。その頃、鐘紡の株だけでも三千株持っていたので、一日百円下つても大損害であった。結局、株のみで百万円以上をなくしてしまった。ゼネラルモーターズへの注文は、ようやく三井物産の武村常務にお願いして半分は開設して頂いた。株は全て売却し、結果として大借金が出来てしまった苦しい時代だった」

この大正九年に、高田商会や神戸の有名な鈴木商店も倒産してしまつた。

私が幼年の時、ちょうど父の一番苦しかった時にぶつかったためか、子供心に覚えているのは恐ろしい、こわい、怒つてばかりいる人が父なんだという印象であり、それが頭の中にしみ込んでしまつた。

大ガラの苦しい経験は父の仕事に対する考え方を大きく変えた。大ガラ（大不況）の時、恩師山本条太郎翁に相談した所、悪い時は思い切つて捨てろ、との教示を頂き、これが父の一生の営業方針、事業哲学になつた。人にまかせられない、人は信用できない、ちよつとでも悪い時には切り捨てる、の三大基本方針である。これが最も明確に表われているのが、新しい仕事を始めても、少しでも赤字が出たり、不愉快な事があれば、直ちにその

仕事をやめてしまうという所である。

私は子供心に父の三大基本方針には強い疑問を抱いていた。大正九年の大ガラの時、京都、大阪、名古屋、横浜、博多、広島、仙台、秋田、松山、京城の十支店のうち、大阪、名古屋、博多のみを継続し、七店を閉鎖してしまつた。とても私には支店を閉鎖する勇氣もないし、決断力もない。これが断行できる経営者、進む以上に難しい退却のできる経営者は本当に偉い人と頭が下がる。

また父は、資本金の減少（減資）を行なつた。公称五百万円の資本金を払込済九十一万円に、商事会社は百万円を二十五万円に減資した。この決断により、会社が今日迄六十余年続くことができたと感謝もしているが、ただ一つ、数多くの人材を失なつた事は大きな損害であつたと思う。特に、父に向かつて遠慮なく意見を具申し、会社の方針について考えを述べる人が全部いなくなつたことで、ヤナセが父一人の力以上には発展しない会社になつてしまうことになつた。

しかし、一方、父の先見の明は、歴史の上に明瞭に残っている。成績芳しからずと、直ちにこれをやめてしまひ、それが幸いしたことがいくつもある。

たとえばタイヤである。タイヤを取扱つた歴史はヤナセが日本では一番古い。USタイヤの代理権を持ち、ミシエリンも取扱ひ、国産のタイヤが生まれた後は横浜ゴムのタイヤも取扱つていた。ダンロップタイヤは名古屋以西がヤナセで名古屋以東が日本自動車を取扱つており、日本自動車のサブディーラーとしてエムパイヤ商會が販売していた。その後、BSタイヤの台頭で競争が激しく、利益も期待できなくなつたので、父はタイヤの仕事に興味を失なつてしまつた。

日本自動車は続いてタイヤの仕事に入れて、最近迄タイヤ業界の雄であつた。

## 不況の今昔

第一次世界大戦が大正四年六月二十八日に勃発し、日本は英米の連合国側に加わり、ドイツ領の青島を占領し、軍需の増大により明治時代の後進国の地位から一躍成長国へと発展した。第一次世界大戦は連合国の勝利で終わったが、その反動として世界中に大不況が襲って来た。日本も当然この余波を受け、大正九年の大ガラ時代を迎えたわけだが、生産を抑え、供給を減少することによる収縮均衡政策を思い切ってとつたため、不況は益々需要の減退を呼び、数多くの金融機関にも取り付け、破産などが生じた。

すでに記したように、大正九年の大ガラ（大不況）の時、京都、大阪、名古屋、横浜、博多、広島、仙台、秋田、松山、京城の十支店のうち、大阪、名古屋、博多のみを残し、あとの七支店を閉鎖し、従業員の数もほぼ半分にするというような思い切った縮小政策を父は断行した。私はこの進む勇氣より退く勇氣の偉さということに非常に頭が下がるが、さてこれほどの思い切ったことをしなければならなかった大正九年の大ガラ（大不況）の実態について、今後の勉強のためにも、今の時代と比較して、もう少し掘り下げて考えてみたいと思う。

昭和四十八年十一月におきた石油ショック後、すでに昭和五十六年まで八年も続いている日本経済の不況は、単に景気循環の波の上に現われる不況、いわゆる循環不況ではなく、それは経済の高度成長から低成長へ移る過程において生じる経済体質、すなわち経済構造の悪化による不況、いわゆる構造不況であった。もともとと経済の高度成長が起こる根本原因は産業革命であり、産業革命は新しいエネルギーと新しい機械装置とが結びついて起こるものである。近代に入って、一八〇〇年頃から起こった第一次の産業革命は蒸気エネルギーと軽工業機械が、次に一八七〇年頃から起こった第二次産業革命は電気エネルギーと重化学工業の機械・装置が、そして一九四五年以降、すなわち第二次世界大戦終了後起こった第三次産業革命は石油を含む核エネルギーとオートメーションが結びついたものである。ひとたび産業革命が起こると、次から次へ技術革新が生じる。その技術革新に基

づき次々に設備の近代化投資が行なわれ、従って高度成長期には設備投資の伸びが高いわけである。同時に設備が近代化されるため労働生産性が飛躍的に向上し、そのため賃金が大幅に引き上げられ、個人消費の伸びも当然高くなるわけである。産業革命による技術革新、それによる設備の近代化投資があらゆる産業分野に普及するのに、第一次、第二次産業革命の時はいずれも約三十年かかっている。今度の第三次の産業革命の時も、一九四五年から一九七三年（昭和四十八年）のオイルショックが起こるまで、ちょうど三十年近くかかっていることになる。その間、産業革命による技術革新、それによる設備の近代化投資の活況、設備投資の高い伸び、それと同時に労働生産性の向上、大幅賃上げ、そして個人消費の高い伸び、すなわち国民総支出・総需要の高い伸び、それに見合う国民総生産の高い伸び、つまり経済の高度成長が続いたわけである。ところが、第一次、第二次産業革命の時と同様に、一九四五年から約三十年近くたった一九七三年（昭和四十八年）頃までに、産業革命による技術革新とそれによる設備の近代化投資があらゆる産業分野に一巡していたが、この高度成長から低成長への移行が世界的に表面化してきたのが、一九七三年（昭和四十八年）のオイルショックを転機にしてである。

高度成長から低成長へ移行し、国民総需要の伸びが急に低くなっても、高度成長期に急速に拡大してきた供給能力を急に縮小することはできない。企業がかかえている膨大な設備を急に廃棄したり、膨大な借金を急に返済することはできない。その結果、国民経済からみて、需要と供給能力との間に大きなギャップ、開きが生じてくるわけである。この需要と供給のギャップは、欧米に比べて日本の方がはるかに大きく現われた。それは高度成長の爛熟期の一九六五年～一九七三年までの間、日本の実質成長率が、欧米先進国の年平均五%に対して倍の一〇%近くに達していたためである。このことはすなわち供給能力の伸びも約二倍であったことを意味する。従って欧米よりはるかに大きい需要と供給のギャップが日本に生じてしまったわけである。これが今日の日本経済の

構造不況と言われるものであるが、この需要と供給のギャップを調整するためには、ある程度時間がかかる。不況が急激に高度成長に戻るといふことは期待できない。

この需要と供給のギャップを調整するには二つの方法が考えられ、一つは供給能力を縮小して需要に合わせる縮小均衡策であり、もう一つは需要を拡大して供給能力に合わせる拡大均衡策である。当然、縮小均衡策が本筋であるが、今日のように社会的・政治的抵抗が強いと、現実にはその実行は不可能である。労働組合の勢力が強く、社会的抵抗が強いため、縮小均衡のために膨大な過剰人員を整理するなどということは、できないからである。西欧諸国でも日本でも、いずれの国も保守と革新が伯仲しており、いずれも政権が弱体であり、膨大な過剰設備の廃棄とか膨大な過剰人員の整理とかを強行すれば、世論の不評を買い選挙に破れ、たちまち政権は崩壊してしまう。

### 大不況からの回復

これが昭和五十年代現在の状態であるとすれば、日本経済が経験した第一回目の低成長期の不況は、一九二〇年（大正九年）～一九三一年（昭和六年）までの十二年間に及ぶ長期の深刻な不況である。欧米では第二次の産業革命による高度成長期が一八七〇年～一八九〇年まで続いていたが、一九〇〇年くらいから第二次産業革命による技術革新による設備の近代化投資が一巡して、一九〇〇年～一九三〇年まで低成長期が続いた。そして、この低成長期の不況の長期化、深刻化から脱出しようとして、欧米先進国は海外市場と資源の争奪戦を行い、その結果、二度にわたる世界戦争に陥ってしまった。一九一四年～一八年の第一次大戦と一九三九年～四五年の第二次大戦である。一九一八年（大正七年）に第一次世界大戦が終了し、軍需が失われるや、たちまち膨大な需要と供給のギャップが発生し、一九二〇年（大正九年）から一九三一年（昭和六年）まで深刻な構造不況が続いた。この時は需要供給のギャップの調整策として縮小均衡策がとられ

た。今日と違い、第一番目には革新政党もなく保守政党だけであったことから、政府の政治力が強く、縮小均衡策を強行することができた。第二に当時は労働組合の抵抗がなく、思い切った人員整理ができた。第三には通貨制度が金本位制であり、待たなしのデフレ政策で、思い切った企業整理が行なわれた。すなわち長期で深刻な構造不況から金融機関は膨大なこげつき債権をかかえていたが、日銀は金本位制なるが故に、その保有する金の量に日銀券の発行が制約されており、任意に日銀券を増発し、民間金融機関に救済融資を放出することができなかった。そのために、すでに一九二七年（昭和二年）の二月には金融恐慌が勃発し、銀行が驚くなかれ三十七行破産した。次に一九三〇年（昭和五年）一月の金輸出解禁に伴い、日銀が保有する金の減少があり、日銀券の発行が自動的に収縮し、日銀が待たなしのデフレ政策を強行して、民間金融機関に対する貸し出し制限を開始した。そのために膨大な不良こげつき債権をかかえていた銀行は、一挙に五十八行が倒産した。この多数の銀行の倒産から、取引先企業の無限連鎖反応倒産がおこり、思い切った企業整理が行なわれたわけである。従って、大正九年の大不況は膨大な失業者の発生と倒産の無限連鎖反応を伴った大暴風型の不況であったわけである。その代り、急激に過剰設備、過剰人員、過剰借金が整理された結果、供給能力が縮小され、需要と供給のギャップの調整が急テンポに行なわれ、昭和六年頃には、ほぼ需要と供給のギャップの調整が終わった。そして一九三二年（昭和七年）から国債の増発により公共事業と軍需を拡大すると、すでに過剰設備、過剰人員が整理されていたから、過剰投資、個人消費の増大という需要創出波及効果が現われ、景気が回復を始めていた。大暴風が吹いただけに、かえって秋晴れがきたということで、大正九年の大ガラから昭和七年以降の秋晴れの好況を迎えることができたわけである。

こういうような状態が理論的に言える大正九年の大ガラに当たって、支店の閉鎖と人員の整理による極端な縮

小均衡政策を父が断行したことは、誤まりであるどころか経営者として正しい判断であり、りっぱな経営者であったと尊敬せざるを得ない。人間はいい時より苦境に立った時に、その人の本当の真価が発揮でき、例えば経営者の場合は、経営的な手腕があるかないかということは、好況より、むしろ不況時に表われるものであろうと思う。数多くの人材を失なったということは誠に残念であったが、梅村四郎さんのように、最後まで私を我が子のように可愛がって下さり、退社後も長くおつき合いをして頂けたということは、本当にうれしいことであった。

海外へ  
大正十二年の五月十日、父と母は海外視察と不況脱出のため、初めて外国に向かって出発した。関東大震災が東京を襲った時、父母はちょうど船上にあった。五月に出発したのは大洋丸で、その時

の乗客の中に松平保春子爵ご夫妻や上田健太郎氏がおられ、父と母は船の中で、非常に親しくお付き合いさせて頂いたらしい。

松平保春子爵の令夫人は蜂須賀公爵の令嬢であり、松平子爵の令嬢が、日比谷株式会社の取締役会長で家内のいとこに当たる日比谷誠一郎氏の夫人となり、TCJの日比谷輝夫君、日本ライジングサンの日比谷平一郎君のいとことなったわけである。また、上田健太郎氏（浅野セメント常務）の弟さんは三和銀行におられ、後に山下汽船に移られた方であり、この船の交友関係から、上田家ともその後長く父母がおつき合いを続けさせて頂いていた。この上田健太郎氏が、商事事業部担当の大島仁夫常務の親戚に当たり、また、大島常務は元海外経済大臣の牛場信彦さん（現在日米賢人会議座長をされている）の親戚にも当たることとなる。

ハワイ、サンフランシスコ、ロサンゼルスと旅を続け、まず父が驚いたことは、カリフォルニア州に自自動車が多く走っているかということであった。太平洋沿岸すなわちアメリカ西部での自動車の発展を眼のあたりに見て、鉄道でシカゴを通り、ニューヨークへ直行した。

その当時、ゼネラルモーターズ社におけるすべてのラインの輸入代理権を、一人で所有していた父は、ゼネラルモーターズ社からも大変な歓迎を受け、夜会（パーティー）を幾度か開いてもらったり、オペラに案内されたり、破格と思われる待遇を受けて、大満足の態であつたらしい。ニューヨークの後でデトロイトを訪問し、キャデラックの製造工程や他の車に類例のない高級車の製造方式を眼のあたりに見、続いてミシガン州のフリントにあるピュイックの工場でも、あたかも町全体がピュイックの町であるかのような感を得て、全く驚いてしまつたらしい。この頃デトロイトにおいても、ゼネラルモーターズ社はシボレーを大衆車として大々的に売り出す計画をしていた時であつた。

アメリカに二ヶ月半滞在した後、ニューヨークから大西洋航路のアクイタニア号という五万トンの大きな船でヨーロッパへ向かつた。

イギリスのサザンプトン港に上陸すると、父はさつそくロンドンのウーズレー自動車会社を訪問した。その頃父はアメリカの車の他にイギリスのウーズレーの代理権を持っていたが、これは父が大正四年に梁瀬商会を創立する以前から三井物産が取り扱っていたものを、そのまま扱っていたわけである。イギリスに約一ヶ月半滞在した後、ドーバー海峡を渡ってフランスへ向かつた。その当時、パリの日本大使館の参事官として駐在されていたのが、



大正12年4月、外遊をひかえての家族写真。  
左右に父と母、後方は孫平翁、私と姉妹たち

明治三十七年一橋大学の同級生であった佐藤尚武氏（のち参議院議長）で、朋あり、遠方より来たる、又樂しからずや」とばかり色々とご案内をしていたが、ルノーの工場なども見学することができたそうである。

さらにフランスからイタリアへ行き、フィアットの工場を見学した父はこの工場の屋根がフラットルーフになっていて、これを試運転コースとして使っていたのに、全く驚いたらしい。ここで父はアメリカ、イギリス、フランスで得られなかった何かを強く印象づけられたようである。このときの旅程を見ると、ほとんどドイツには滞在しておらず、第一次世界大戦で敗れたドイツは大変なインフレの下で、まだまだ工業らしいものが復活していなかったとみえる。

### 五百台の乗用車

そのまま欧州から日本へ帰るべきところ、もう一度アメリカの自動車工業をイギリス、フランス、イタリアと比較してみたい気持ちになつたらしい父が、アメリカに戻るためフランスのルーブル港から船に乗ったのが、ちょうど関東大震災のあつた大正十二年九月一日であつた。

その時の船は「パリ」という名の大西洋廻女航海の大きな船で、大勢のお客を乗せ、お祝い気分で出港した後まもなく船の電信係が受け取つた知らせが、日本に大変なことがおきたということであつた。東京や横浜は自茶苦茶になり、富士山は半分に折れ、横浜港の入口には新しい大島が出現して、船は横浜港へ入れなくなつてしまつた。そして伊豆の大島は全く消えてしまい、東京と横浜では約三十万人の市民が焼け死んでしまつた、というニュースが、楽しめるべき船旅の第一日目に入ってきたわけである。

その時、たまたまニューヨークに駐在していた清水雄太郎氏（初代ニューヨーク駐在員）が父と母に同行していたが、父は清水氏に船の図書館で従来の地震に関するあらゆる文献を朝から晩まで読むことを命じた。その結果、ロンドンにも二百年ほど前に市街をほとんど焼いてしまつた大火災があり、またサンフランシスコにも大地

震があった。サンフランシスコの場合を調べてみると、復興はそれを計画する人間の頭脳と活動が主であり、人と人の動きが活発になされることによって早められるのだということを、知ることができた。さらに、復興の速度と復興の力は人間によって作り出されるものであり、そのためには人間を乗せて走る車、乗用車の用意が最も要することであるとの結論を得たのが船の中であった。父が東京にいてあの関東大震災のまっただ中にいた場合、はたしてどんな結論が出たかわからないが、大西洋の船の上という手も足も出ない所で、本を読み静かに物考える時間があった時にこういう大きな事件にぶつかったということは、何と言っても幸せであったと思う。従って何事も復興には物より人の移動が優先するというのが父の得た信念であり、これによりニューヨークに着くや否や、GM社に対し、二千台の乗用車を発注したのである。

地震後の復興にトラックが必要ということなら理解できるが、乗用車のみ二千台とは、ミスター・ヤナセは頭がおかしくなったのではないかと、相手はなかなか注文を受けてくれなかった。また、輸入手続きをお願いしていた三井物産ニューヨーク支店も「関東大震災という大きなショックを旅先で得て、お前は頭がどうかしたのではないか。今この災害にあたって、乗用車なんかを持って震災地に乗り込んでどうなるものか。少し休んで頭を冷やしてから考えた方が良いのではないか。むしろこの際、トラックを持っていくというのなら我々は賛成しよう」という同じような返事で、本店の安川雄之助常務と連絡の上、在庫未整理に加えての新規輸入は見合わせるべきなりと、ノーの回答となった。

しかし、父は頑として乗用車優先を変えず、やむを得ずニューヨークの正金銀行（現在の東京銀行）へ行き、乗用車の販売は絶対に自信があることを強調して、L/C（信用状）を開いてもらい、ピュイック四気筒の一九二三年モデルとシボレーの乗用車を合わせて二千台出荷してもらおう了解を得た。次が船腹の取り合いで、その頃

は神戸の鈴木商店が最も盛んな時であったので、鈴木商店は木材を仕入れて、船腹をほとんど占領してしまったが、それによりやく割り込んで、二千台の内五百台の乗用車を積み込むことができた。

第一回目の五百台を積んだ天洋丸に乗って、父は震災地である東京へ自動車とともに帰ってきたのである。

ところが、この新規注文の荷と同船して両親が日本に帰国した十月四日には、在庫の山となっていたそれまでのストックはすべて売り切れ、新入荷の二千台もほとんど予約される物すごい売れ行きを見せ、これで一挙に会社の財政が立ち直ったわけである。車がよく売れ、その代金を芝浦工場の真中に穴を掘ってうめた等の話が語り草として伝えられている。私も一生に一度こんなに埋めるほど金を集めてみたいものと、子供心に思ったことがある。

関東大震災のおかげで、私は体質が一変したのか健康になり、会社も陰から陽に転化できたことから考えて、火事サマサマであった。後年、大空襲で焼け野原になったその日、社長に就任し、火災で兄を失い、後天的あとつぎになってしまったなど、どうも、私の人生は火事で始まった様である。この時期に、復興こそ先ずトラックと、トラックのみを輸入された日本自動車さんは、かなり販売に苦しめられたと後日譚として聞いている。このようなアイデアについては、父は優れた才能を持っていた。

この当時、同業者である日本自動車、エンバイヤ自動車あるいは安全自動車は、いずれもトラックのみを輸入し、その販売に最善をつくしていた。当社のみが乗用車の輸入に踏み切ったわけである。不思議なことに、トラックの方は思いの他販売が伸びず、大変に苦労されたとのことであるのに、当社では最初の船で入荷した五百台の乗用車は瞬く間に売りつくして、その後続いて入荷した残りの車は、着くのを待たずしてプレミアム値が一台につき三百円という巨額なものに上り、約六ヶ月の間に完売することができた。その時の、トラックより乗用

車を選んだ父の考え方は、まことに敬服に価すると思う。

この考え方が戦争中も同じように続き、日本政府が乗用車の生産を一切停止してトラックのみ生産するという方針をうちたてた時、父は時の商工省に行き次のようなことを言った。

「戦争は物が動くより先に人が動かなければならない。石炭と木材と米と野菜が口をきいて話をするものではなく、人間がその行き先をいちいち指令しなければならぬ。また大勢の兵隊を運搬する場合にも、指令官の完全な指示を与えなければ、鳥合の衆となってしまう。トラック九台に対して乗用車は必ず一台は不可決のものである。このように物だけに重点を置く考え方をすれば、戦争も必ず思いの通りには進行せず、日本の将来に非常に大きな憂いを残すことになるであろう」

当時有名な商工省の担当官をつかまえて、木端役人の目先の考えで国を誤ることは大変なことである、というようなことを大声で主張し、商工省から全く嫌われてしまったこともあったが、この「物より人が優先である」という考え方は、関東大震災の時から強く信念として父の胸の中に生まれたものである。

### 関東大震災

#### 母の手記

震災については、外国から見た当時の東京の様子を、母の著書『福寿草つづき』から引用してみたいと思う。「大正十二年五月十日、主人とともに外国の自動車業界を視察するため、大洋丸で、横浜を発った。途中ハワイに一泊、五月二十六日にはサンフランシスコに到着。ロサンゼルス、ニューヨーク、シカゴ、デトロイトをまわり、カナダ、フランス、イギリス、イタリア、スイスを訪ねたあと、またアメリカへ

引き返すことになった。

大正十二年九月一日にカレー港よりフランス第一の華美をつくした客船アクイタニヤ号に乗船した。その夜は最初の晩餐会で、各国の客人がお国自慢の美々しい姿で出席しての大宴会、さすがフランス第一の船とて客人も各国上流の人ばかり。その美しさは言葉にはいいつくせない。それぞれの国を自慢しての服装で、眼を驚かすばかりの美々しさであった。

近頃は私も大分場馴れがして化粧も上手になり、動作も物なれて恥じないようになったが、その頃は大変であった。その夜は日本服を着て最高の仕度をなし、入場したところ、大変な歓迎で、拍手をもって迎えられ、恥ずかしかった。婦人を先頭にして入場するのが西洋のならわしなので、私が先頭に立って入場した。その時の服装は、衣服は綵しぼりの藤色、刺繍は唐子人形が宝船を引き、その宝船はさまざまの宝物を金銀系にて縫いつづり全身に宝物を散らした立派なものであった。帯は夏冬両方に使用できるよう、日本楽器を前とおたいこに派手に美しく出していた。料理は実においしく、他では食べたことなしというほどの美味だった。

その夜はよく眠れ、翌朝も平常通り起床、朝食をすませ、昼間のお茶の頃かと思う、船のニュース係が日本大地震の報をもたらした。主人とつれの清水雄太郎氏は顔色を変えたが、私は気づかなかった。

二人は下の部屋へ行き、しばらくするとデッキに上り、また部屋に行く。私は最初は気にもとめず本を読んでいたが、遂にこらえかねて下の部屋に行つて見た。二人は何やらヒソヒソと語り合っていたが、主人は私に向かい、今ニュースにて日本の大地震を知った。富士山が少し頭を出して他は水中に没したとあった。家族の心配もあるだろうが今は一大事の時、小さく自分のことのみいう場合ではない……。三人こうして無事であったことを幸いと思つて、今後の方針について相談中だ、とはじめて聞かされ、ただただポーンとして眼の前の暗くな

った想い、最初は言葉も出ない。

けれども静かに二人の言葉を聞けば、この際泣いている場合ではないと知り、今後の方針を考えるほかはないと思ひながらも、誰はどこで死んだか、誰はどうしたか、と子供のこのみ案じて何日かを夢のように暮らし、他より慰められても返事が出なかった。

日のたつにつれて、同船の方々は同情をよせ、何かと慰めてくださった。ニューヨークに着くまでには無電にて家族無事の報が来た。ホツとして、万神に感謝して合掌した。家族が無事ならば、後のことは帰国してからでも何とか方法はあるもの。主人と雄太郎氏は大いに馬力をかけて朝から晩まで商売の話ばかり。二人とも商売の鬼となつてしまった。

船の無電係はすっかり同情して、すべてのニュースはすぐに持つて来てくれた。この船は日本人はわれわれ三人だけだった。

ニューヨークに着いた時は、GMの重役たちまで多数に出迎えていただいた。だれもが日本の大惨事に心から同情を寄せてくださった。市中には大プラカードを作り、

『日本を救え。サンフランシスコの大地震の時、日本は第一番に救いの手を延べてくれた。昔の恩に対し大いに救え』

と各所で大声をあげて救済品を集めていた。半日で船一ぱいの品が集まったそうである。さすが米人の心意気はたいしたもの、心から感謝した。なかには着ているコートをその場でぬいで寄附される人もあった。

私たちは心から感謝して、大量の車と大量の砥油を発注して、GMの人を驚かせた。地震を聞いてヤナセは気が狂ったかとまで驚いたそうだが、幸いと万事注文通りにおさまった。外地にあつたおかげで、これがかえつて

大変な大当たりとなった。

ニューヨークの日本の皆様にはいろいろな同情と親切な言葉をいただき、家族のためにと、シカゴで衣類を求め、雄太郎氏とも別れてサンフランシスコにまわり、三井物産の皆様や友人の方々の温かいお心づかいに感謝しながら、日本郵船の船で帰国の途に着いた。

船中は大勢の乗客で、留守宅を案ずる方、仕事を心配する方、それぞれに騒然たるものだった。ある方などは留守中のお宅に無電したがいまだに返事なく、毎日食事も通らぬありさまだった。船がハワイに着いた時、日本語の新聞が一枚百円という値段で飛ぶように売れ、われもわれもと買いあさった。新聞に載った、あまりにも無惨な写真にあきれて言葉もなく、日々心が痛かった。船は夕方ホノルルを出航して一路帰途を急いだが、来る日も来る日も留守宅を案じてぼう然としている方、泣いている方、憤っている方、船の上は種々の顔色だった。

ある日、『アマカス、オオスギをころす』というニュースが船内の掲示板に掲げられた。一同びっくりしたが、何のことやら皆目わからず、船中異様な想いだった。後に文面もわかり、甘粕大尉という人が共産主義者の大杉栄とその子供まで殺したものと知った。

この軍人は部下をつれてヤナセの芝浦工場へやってきて『タイヤとガソリンのありったけを出さねば殺すぞ』と言っておどした。当時の経理部長（鈴木武平氏）が『ここにあるのはお客様の預りものです』と断ると、いったん帰って、二、三日すると徴発令書を持ってまたやって来た。やむなく預り品のガソリン全部を徴収されてしまった、という不愉快な話は後になって聞いた。

やがて船は横浜に入港し、私たちはまず横浜支店に落ち着いた。出迎えた文字（長女・のち漆山相談役夫人）も思いのほか元気で安心した。迎えの車中の天井には真っ黒に蠅がとまり、震災の屍体から生じたものであると

聞いてびっくりした。会社の裏のみじ橋の下に来ると、二、三人の遺体が流れついていた。この地でもたくさん  
の死人が出て、行くさきさき遺体があり、当時の惨状を想像するだけで、肌粟を生ずるような思いであっ  
た」

いかにも女性らしい感想である。母はアメリカ到着後神経衰弱（今でいうノイローゼか）が昂じて、ロッキ  
山中で、大陸横断中の列車から危く落ちそうになったことがあった、と後日譚で耳にした。

### 震災復興

一方父は、震災復興のためにと緊急輸入した二千台のビュイックが、箱のまま飛ぶように売れ始  
め、苦しみの種であった在庫車も合わせて現金にて完売し、この嬉しい悲鳴と大満悦のうちに、  
麻布富士見町二十八番地の高橋さん（勸銀総裁）のお邸を借家して移転し、私も避難先の田舎から麻布へ帰って  
来た。この麻布の家には、芝生の庭が一千坪以上もあり、球遊び、自動車遊びには最適であった。田舎で丈夫に  
なった私にとって、この麻布の庭こそ私の一生を変えたものであると言えるだろう。父も私も会社も、関東大震  
災のおかげで繁栄し、丈夫になり、建て直しができたともいえるのである。禍（わざわい）転じて福となす。  
とはこのことであろう。梁瀬家にもし震災なくば、当然会社は倒産、私は死亡していたに違いない。何が人に幸  
いするか分からないものである。これが人の運命といえるのであろうか。それ以来私は禍（わざわい）が来ると  
これを福とすることに努めることを、生涯のモットーとしたのである。

大震災によって田舎に避難し、その田舎の生活の間に健康状態が全く変わった私は、大正十三年の三月に、慶  
応義塾大学幼稚舎の編入試験を受けることになった。その時に一緒に受験した子供は三人であった。まだ吃音が  
非常に激しかった私は、姓名をきかれても返事ができず、口頭試問もわかっていながら全く答えられない状態で  
あった。幸運とは言えないが、もう一人私以上にひどい吃音の子供がいた。自由にしゃべれた子供は堤正夫君と

いったが、この堤君と私が四月から幼稚舎の二年に入学を許された。堤正夫君は大学時代、有名なアイスホッケーの選手で、卒業後も全日本アイスホッケーチームの監督や国際審判員などをして、アイスホッケー界では有名な人である。彼と私のつき合いは、こうして大正十三年から始まり、今日まで五十五年間の長い年数になる。彼は自分の趣味のアイスホッケーの道具をアメリカから輸入し、日本で販売するという趣味と実益とをかねた、ほどほどに忙しく、ほどほどに儲かり、ほどほどに暇があるという誠に恵まれた境遇にいる。彼の息子も慶応大学を卒業後、徳川家のお嬢さんと結婚して、今CBSソニーの中堅社員として働いている。従って私の親友である堤正夫は上様の上になったわけで、我々の友達の中では最も恵まれている一人であると思う。堤正夫君のお父さんは、家内の母の実家の日比谷商店に勤務しており、特に家内の父の津田五郎家に何やかやと出入りし、義父のこまごまとしたことを手伝ってくれていたらしい。

この堤正夫君が昭和二十二、三年頃、自分のいとこが関係している会社が大変将来性があると思うので、もし良かったら株を少し買わないかということを書いてくれた。これが東京通信機工業という会社で、後に東通工となり、ソニーへと発展した。その当時の東京通信機工業の資本金は十九万八千円であったが、もしもその時に彼のアドバイス通り、少しでも株を買っていたら、今頃は大変な金持ちになっていたと思う。その当時は占領軍の法律や命令によって、資本金二十万円以上の会社を作ることは一切許されていなかった。

私は大正十三年から慶応の幼稚舎に通い、麻布富士見町の広い庭でキャッチボールを覚え、サッカーを覚え、ラグビーを覚えて、体がだんだんと丈夫になり、腕白なはずら小僧になった。度々述べた通り、大正十二年の関東大震災が私を健康にしてくれた大恩人であったと思う。しかし、残念ながら吃音は全く改まることもなく、相変わらず吃り続けて学校へ通っていたのである。

大正時代は十五年と年数にすると短いようだが、実感としては決して短いものではなかった。大正十五年（一九二六年）十二月二十五日、大正天皇は葉山御用邸で崩御され、大正時代は幕をとじたのである。

#### 後藤新平内相

大正十二年（一九二三年）九月一日午前十一時五十八分、関東地方南部を激しく襲った大地震はM七・九という大きなもので、震源地に近い神奈川県では最も大きい打撃を受けた。この関東大震災により焼け落ちた東京の復興に取り組んだのは、後藤新平内務大臣であった。彼は内務大臣就任と同時に帝都復興の根本策をたてた。第一に遷都せず、第二に復興費三十億円、第三に欧米最新の都市計画を採用する、第四に地主に対して断固たる態度をとるということであった。後藤新平氏は日清戦後の台湾経営や日露戦争後の滿鉄経営に手腕をふるい、東京市長として八億円の都市改造計画を立案した人であるが、彼は異常な熱意をもって帝都復興にあたった。しかし、この復興費三十億円という案はなかなか思うように進まず、伊東巳代治氏の強い反対により大きく後退せざるを得なかった。

関東大震災後の丸の内の発展は実にめざましく、岸本ビル、昭和ビル、八重洲ビル、丸の内ホテル、中央郵便局、第一銀行などのビルが続々と竣工し、一流の会社がこれらのビルに争うように移ってきた。また、丸の内と並んでめざましく発展をとげたのが、渋谷、新宿などの副都心であった。国電渋谷駅の一日の乗降客数は、震災後わずか二ヶ月足らずのうちに、震災前の三万三千八百人から一挙に六万五千人とはね上がった。一方、丸の内の発展と同時に銀座にもデパートが進出し、大正十三年に松坂屋が銀座のデパート第一号として開店すると、その後を追うように大正十四年松屋が神田から移り、同年に三越も銀座支店を開設した。その年に新宿に伊勢丹が誕生した。

第一次大戦中に我国最大の産業都市となった大阪での近代都市作りは、もっと計画的に進められていた。私鉄

網は東京より早く整備され、阪神、阪急、京阪、南海、大軌（現在の近鉄）などの沿線に、芦屋、西宮、豊中、枚方、堺、八尾などの純然たる住宅衛星都市が形成され、大阪は世界的な商工業都市へと成長した。大正十四年には第二次拡張を行なって、人口二百万に達し、世界第六位の大都市となった。

### 震災前後の文化動向

大正十二月一月に『文藝春秋』が作家の菊地寛氏によって創刊され、大正十四年に一般大衆誌『キング』が講談社から発売されて全国的に愛読された。この『キング』は一部五十銭で七十四万部を売り切り、出版界に大反響をまきおこした。

雑誌と同じ様に、新聞界にも大きな転機が訪れていた。大阪では大阪朝日と大阪毎日が、それぞれ百万部に達し、断然他紙を圧していたが、東京では名の通った新聞だけでも十五、六を数え、群雄割拠の状態であった。大正十二年八月には東京において、報知新聞が三十四万部、国民新聞と時事新報が三十万部、読売と万朝報が十萬部、大阪系の東京日日（現在の毎日）と東京朝日は共に二十四、五万部であった。

大正十四年三月からはいよいよラジオの放送が開始された。この新しいメディアの登場は人々に驚きの念をもつて迎えられたが、たちまちマスコミの新しいヒーローの地位におどり出た。第一年目の放送は東京、大阪、名古屋の三つの放送局からそれぞれ独立して送られ、翌大正十五年八月に三局が統合され、社団法人日本放送協会を設立し、通信省の監督下に入った。

大新聞の紙上でも大きな変化がおこり、夕刊紙に小説欄が設けられ、大正十二年秋に東京日日は中里介山の大作『大菩薩峠』の掲載を行なった。また、キングを始めとする月刊雑誌に加えて、大正十一年四月に週刊朝日とサンデー毎日の週刊誌が発刊され、大衆文学の名作を次々と世に送り出すこととなった。大佛次郎は『照る日曇る日』を大阪朝日に、『赤穂浪士』を大阪毎日、東京日日に連載する一方、『鞍馬天狗』を週刊朝日に発表した。

その頃、白井喬二は長編小説『富士に立つ影』を報知新聞に書き、同じ報知新聞には矢田挿雲の『太閤記』などが載せられるようになった。明治の末に大阪に生まれた読物講談の立川文庫は、大正の半ばに空前の当たりを示し、『猿飛佐助』や『霧隠才蔵』などがその代表的作品であった。これらの作品は映画化されて、目玉の松ちゃんこと尾上松之助の人気と相まって、スクリーンに時代劇全盛の風潮を生み出した。

### ジャズとダンスホール

アメリカの南部ニューオリンズ（ルイジアナ州）にすむ黒人や、黒人とフランス人との混血人などの間で、新しい音楽が作られたのが一九一〇年頃と言われている。一九一七年からジャズは一般化され、白人社会からもまともな音楽として認められるような空気が強まってきた。たまたまニューオリンズの白人ミュージシャングループがこの黒人の演奏スタイルを取り入れて、自らオリジナルデキシードジャズバンドと名乗り、ニューヨークに進出し、人気を呼んだ。これに目をつけたアメリカコロンビア、アメリカビクターが相ついでこのバンドのレコードを売り出し、これが大変な評判となったのが一九一七年（大正六年）一月から二月にかけてのことであった。アメリカで大ヒットしたレコードは、当時渡米した日本人が宝物のようにして日本へ持ち帰ったと言われている。日本のジャズはダンスホールの開設、普及と共に急激に活況を呈することになったが、その皮切りは意外に早く大正九年（一九二〇年）鶴見駅前にあった花月園の一角に、社会舞踊場と名付けて開かれたダンスホールが、日本の最初のものであった。関東では東京でダンスホールが開設されたが、まもなく花月園のダンスホールが閉鎖され、大正十一年になると神戸、大阪でダンス熱が高まり、ダンスホールのはしりのような場所が次々とできた。このダンスホールにタクシーダンサー、つまりダンスの相手をする

女性を置いたのは、大阪が最初であった。

大正十二年大震災前に大流行した『船頭小唄』—おれは河原の枯れすゝき—や震災後に日本中を風靡した『籠の鳥』は今日言われる演歌の大ヒット曲たるものであるが、当時はこれを流行歌と言っていた。

大正十三年一月二十七日、皇太子裕仁親王殿下（今日の天皇陛下）が、久邇宮良子女王殿下と結婚の大典をめでたくあげられた。大正十四年十月十九日、早慶戦が復活され、帝大が加わり、六大学リーグ戦として再発足された（中央公論社発行『日本の歴史』第二十三巻及び第二十四巻を参照）。

我が国で自動車を経済上も文化の上にも必要なものであるということが認められたのは、何と言っても大正十二年九月一日の関東大震災であった。この時の復興のために自動車の価値が認められ、大正十三年から自動車に対する国民の関心が大きくなるに従って、需要も急速に上昇し、またこれを取り扱うことに関心を持つ人々が急激に増えてきたのである。

別表でもわかる様に、大正十三年に一挙に一万台以上も増加した原因は関東大震災であった。

### G M車絶対優先

子供の頃、父が帰宅してから独り言のようにしゃべっていた仕事の話などは、不思議に記憶をしているものである。父はよく、三井物産時代から自動車の仕事に手をそめ、いろいろ

#### 自動車の登録台数

明治41年	65台
42	135
43	205
44	385
45	512
大正 2	892
3	1,066
4	1,244
5	1,648
6	2,672
7	4,533
8	7,051
9	9,998
10	12,117
11	14,886
12	16,476
13	27,233
14	31,881
15	40,070

ろと経験をしたが、どこの国の自動車を扱うのが最も利潤があがるか、ということを話していた。

まずアメリカ車は極めて割安で部品もふんだんにあり、これを扱うことが一番便利で口銭も多いから、まずアメリカの車を取り扱うことを第一とすべし。次はイギリスの車で、これはその時々事情にもよるが、部品が少なくて口銭の率も少ないので、なるべくさわらぬ方がよい。フランスの車はイギリスと大同小異である。イタリア車はサンプルと実際の車との間に大きな差があって、塗装や部品に欠点があることが多い。イタリアという国は貧乏国であるので、材料を儉約し、さびたスチールでも平気で使って輸出してくるということで、率直に言えば、ごまかしが多い。また利回りがすこぶる悪い。従って、取り扱うべき車はまずアメリカで、次にイギリス、フランス。四番目にドイツが入り、五番目がイタリアの車である。

これが父の根本的な考え方で、アメリカの車、特にゼネラルモーターズ社の車に対しては絶対的な尊敬を持つと同時に、信頼を置いていた。また、ゼネラルモーターズ社と手を握ることによって、極めて大きな利益が得られるということを強く信じていたらしく、ゼネラルモーターズ社の商品だけを取り扱っていることを人生と考えていたような所があった。

戦後、再び会社が外車の輸入販売権を獲得するにあたり、外貨の割当制に応じた私の考えと、意見が真っ向から衝突してしまったのも、父のこのアメリカ車絶対優先主義によるものと思う。この点についての詳細は、後日戦後編で述べたいと思う。

こうして父はゼネラルモーターズ社の二千台の乗用車を売り切ることによって、本社を京橋の千代田館（千代田生命本社の一階二階を借用）へ移し、かくして本社は千代田館、工場は芝浦というような一つの確固たる体系ができたわけである。

## 大正十二年前後の社業

その頃の社業の状況を数字の上で見つめる。大正九年頃までは、大正七年に終了した第一次世界大戦の戦時景気の残りが続いていた。大正九年五月一日から十月三十一日までの第二期の決算によれば、数字が正直にその時の情勢を表わしている如く、五万三百一円四十九銭という利益をあげることができた。大正九年十一月一日から大正十年四月三十日までの第三期を迎えると、大正九年の大不況がそろそろ現実的に数字に表われてきて四千七百四十一円八十一銭の数字となり、第四期の大正十年五月一日から十月三十一日になるとこれが五万六千五百三十四円八十二銭と増大し第五期の大正十年十一月一日から大正十一年四月三十日の六ヶ月間では、十七万三千三百九十九円二十四銭というような大きな赤字が出たわけである。第六期の大正十一年十月三十一日には、この赤字も八万一千六百八円十五銭というように次第に落ち着いてきているが、この時の繰越損失金が三十万三千八百八十九円九十五銭、今の貨幣にだいたい三千倍で換算すれば約十億円近い繰越の赤字となったわけである。これが第九期になると関東大震災後の復興とこれのための緊急輸入に成功したことが数字に明確に表われ、三十七万五千四百九十一円十一銭の利益を計上でき、繰越の赤字が一挙にとり消され、十九万三千七百七十一円九十銭の繰越金を作ることができたわけである。これが大正九年の大不況並びに関東大震災によるところの様相一変の具体的な数字である。

## 工場の火災と広告塔

震災後、折角順風に帆をあげていた会社は、大正末期にまた試練に遭った。大正十四年十二月十八日朝の芝浦工場食堂より自家出火で、バラック建工場（自動車置場建坪九百十坪）と輸入車ビュイック、シボレー、キャデラック、GMC車等約二百五十台と部分品が灰燼に帰してしまつた（現在の駐車場ビルの場所）。

私は丁度幼稚舎の三年生であつたが、この火事は今でもはっきり記憶している。

夜半家中が急に騒がしくなり、目を覚ましたのは午前四時のことであった。芝浦工場から出火して、燃焼中とのこと、麻布富士見町の高台から見ても、芝浦方面が真赤に焼えている。父は直ちに現場へ飛び出したが、子供心に大震災の後遺症が治っていない時なので、恐しい気持ちで朝まで寝られなかったことを覚えている。焼失自動車の内には、東伏見宮海軍軍令部長が正月元旦に宮中へ参内するために使用する予定で宮内省が発注したキャデラック箱型車と、修理でお預り中の東久邇宮家のキャデラックがあったので、恐懼、翌日父はもちろん工場長及び自動車販売部長相良亮吉氏が礼服着用、宮内省主馬寮に御詫言上のため参上したのであった。

そのとき焼失した自動車保管倉庫は、バラック建の小屋であったので、下積の自動車は火を被った程度で、火災を免れた車も沢山あった。しかし焼け残り自動車を梁瀬が手直しして販売したとの評判が立つことは、会社の信用を落とすことが予想され、これを恐れて全部火災保険会社焼残係に引渡し、商売を犠牲にして、急ぎ後荷を輸入して補填したので、不評判の噂も立たず商売上、信用上、効果的であった。

火災跡に鉄筋スレート張の倉庫六号、七号、八号、九号工場約五百二十五坪を（五万二千五百円、坪当たり百円）杉山工務店関口元司氏に発注、昭和二年に完成した。その屋上に高さ七十五尺の広告塔（自動車ネオン）を建設、芝浦沖の海上や東海道の汽車の窓より、ヤナセの存在が望見され、効果的であった。当時慶応大学の三田山上から、夕方暗くなると、ヤナセのネオンがよく見えたものであった。



芝浦工場。左の建物は専売局の旧舎屋，中央は広告塔

また芝浦工場の護岸は木製のシガラミ作りで、台風ごとに崩れ落ちる有様であったので、荷上場建設を計画し地主（中野土地株式会社）と建設費折半の話が成立し、共同投資により護岸百四十間（二百五十メートル・工費四万円也）が施工された。その護岸は高さ十五尺、上端幅一尺、基礎幅六尺で昭和二年五月発注し、昭和三年三月完成を見た。以後台風などによる土砂崩れの心配がなくなったわけである。

### 大正時代をふりかえる

大正時代の会社の歴史をもう一度回顧してみると、大正四年五月二十五日、梁瀬商會設立。大正九年一月には梁瀬自動車株式会社（資本金五百万円）、梁瀬商事株式会社（資本金百万円）を設立し、梁瀬商會の業務一切を引き継いでいる。

### 創立時の役員氏名

代表取締役社長 梁瀬長太郎

常務取締役 大沢喜市 尾花信 梅村四郎

取締役 橋戸義雄 鈴木武平 相良亮吉 吉崎良造

監査役 岡野悌二 原安三郎 丹沢善利

相談役 山本条太郎

ということである。

父は三井物産在職中から山本条太郎翁に師事し、心から尊敬し、合社設立の時相談役をお願いした。

監査役の岡野悌二さんは日本火薬の原安三郎翁と非常に親しいご関係もあり、朝鮮生糸、朝鮮火薬の社長をしておられた。温厚篤実で緻密な数字に明るい方で、父も大変に尊敬し、長く監査役をお願いしていた。この岡野悌二さんのお孫さんが、日本橋の商事時代の営業の中心人物であった金子忠一氏（現アルファ・レコード常務）

の夫人の令弟孝君で、現在財務部の第一線に勤務している。従って、おじい様も監査役であり、お孫さんの孝君が財務部に勤務をされていることなど、やはり非常に数字に強い血の流れであろうと思われる。

また、岡野孝君のお母様の実家は、三井物産のインドの初代支店長を大正十年にされた香椎純一郎氏である。この当時、確か山本条太郎翁は三井物産の上海支店長ではなかったかと思う。この孝君のお母様のおじ様にあたる方が、二・二六事件のとき戒嚴司令官として「兵に告ぐ、今からでも遅くはない」というあの名文を書かれた香椎浩平陸軍中將である。

今日大正時代を振り返ると、日本が近代経済国家として誕生した明治時代における急激な発展のしわ寄せが押し寄せてきたのが、大正時代である。明治天皇の余りの偉大さに、大正時代はむしろ影薄い存在と言わざるを得なかった。大正時代に生まれた人は、明治時代の偉大な日本人の眼に見えぬ圧力により、いずれかと言えば傍観的な気概なき人が多く、また昭和の時代になれば、昭和の新しい力に押しまわれ、常に戦争の第一線にさらされたためか、氣迫がないと批判される人が多くなった。

日本だけでなく世界的にも大変動期であり、第一次世界大戦以前の如くそれなりに安定した世界ではなく、世界全体が激しく動揺し、全人類が様々な苦難に責めさいなまれた時代であった。日本の動揺・苦悶も単に日本の国内的な条件に由来するものではなく、むしろこういう世界全体の動きの一環に組み入れられることによって生じた面が強い。すなわち明治三十八年の日露戦争後初めて日本は世界に仲間入りをしたと言える。言い換えれば、政治的にも経済的にも世界の資本主義の中では著しく後進国であり、未熟であり、それ故に種々な弱点和矛盾を抱え込んだ日本は、世界の苦悩のしわ寄せを受け、最も激しく悩まなければならなかった。またこの時期の日本は世界の動きの影響を受けたというだけでなく、歴史上初めて世界に対し日本の存在が認められた時でも

ある。

大正時代の僅か十五年の間に、十二回も総理大臣が変わっている。これをもても如何に国内の政治状況が不安定であったか、大正時代の特徴を如実に示している。大正二年並びに大正十二年九月二日、震災後の混乱期に総理大臣を受けられた山本権兵衛氏は元当社銀座営業所の財部所長（昭和五十四年退社）の曾祖父であり、財部海軍大臣は彼の祖父である。

#### 再び本社を日本橋へ

錢瓶町の本社社屋は、大正十二年九月一日の関東大震災による火災で焼失してしまつたので、一時芝浦工場の構内に本社を移していた。その後、昭和二年十二月十八日に京橋区南伝馬町二の十八の千代田生命ビル（千代田館）の一階の電車通りに面した半分をシヨールム兼販売事務所に、二階を梁瀬自動車株式会社及び梁瀬商事株式会社の事務所として賃貸借し、芝浦工場内には用品部を移したのである。この千代田館の家賃は一階と二階の一部で毎月四千五百円であったが、偶然その当時の六気筒のビュイック自動車が一台約六千円であった。家賃と自動車の販売価格が殆ど同じであったわけである。

こうしているうちに、何とかして自分自身の本社を建築したいという父の念願がようやく叶って、高島屋の斜向い、津村順天堂の並びの日本橋通り三丁目に約二百坪の空地をみつけた。この土地の所有者は偶然父の故郷高崎在の倉ヶ野町出身の藤田金之助氏であった。この藤田氏はその当時食用油を手広く販売し、芝浦にも油の倉庫を持っておられ、話し合いの結果、二百坪の土地を賃貸期間六十年として、権利金二十万円を支払い、賃貸料を毎月五百八十円、坪当り二円九十銭で借用することになった。

その当時すなわち昭和二年～七年頃までは、まだまだ不景気が続いて、本建築をする者も少なく、建築業界は不況のどん底であり、銀座の数寄屋橋の日劇がコンクリートを打ち上げながら、資金不足で仕上げが数年間中止

になって立腐れになっていた時代であった。父は不思議に建築というものに強い関心を持っていたので、本社の建築についても、アメリカの建築設計家レイモンド氏の門下生の遠藤新氏にお願いした。日本橋通り三丁目、レイモンド氏が建てた帝国ホテルと同じようなデザインのもの、鉄筋コンクリート三階建約三百二十坪の建物が、昭和六年に完成したわけである。

政府は関東大震災後、防火建築を奨励するため補助金を出しており、本社建築に際しては一坪当たり五十円、合計一万五千円の補助金を支給された。そこで五万四千八百円で大林組に発注したわけである。この時、丁度斜向いの高島屋デパートが現在の建物を建て始めた時であった。この時の本社はその当時、最もモダンな建物と言われ、特に材料は父が厳格に吟味したものであったので、あの昭和二十年の大空襲においても、日本橋の市街がほとんど焼け野原になった時も、シャッターをおろすことによつて完全に守ることができたわけである。社長室はすべてチーク材を使用し、朝、父は出社すると必ず社長室の柱と机を手で吾が子のようになでていたことを覚えている。その社長室に置かれていた父自慢のチーク材の机が、今日現在社長室の私の机である。この机には父の魂がにじみ込んでいるようで、父と一緒に働いているような気がする。

終戦時はまわりが全部焼け野原であつたためか、真っ先に



大正14年5月8日朝日新聞

進駐軍に接收され、外国郵便局として使用されることになった。その後、ようやく接收も解除され、会社の手に戻ってきたわけであるが、その時、地主の藤田金之助氏からこの借地を買い上げてほしいという申し入れがあった。丁度封鎖預金が行なわれた直後であったので、約二百坪の土地を十九万五千円で買い受けることに成功したのである。その後、日本橋の本社を、父を説得して強引に芝浦に移し、五十周年記念に本社ビルを建築するようになるわけであるが、日本橋の本社時代は長いヤナセの一ページであり、また、父の最も幸福な時でもあったと思う。私は残念ながら一日も本社勤務をする機会を得られなかった。

### 弓をひくヘラクレス

今日、ヤナセの本社の玄関に世界的に有名な彫刻『弓をひくヘラクレス』があるのを社内の人々はあまり強い関心をもって見ていないようである。このヘラクレスは大正十二年、父が大量のビュイックとシボレーを積んだ船で日本へ帰ってきたあの欧米への旅行のときに、パリで買って来たものである。すなわち、大正時代のヤナセの想い出であり、またこれがヤナセの前進への道のスピリットの表現でもあろうかと思う。

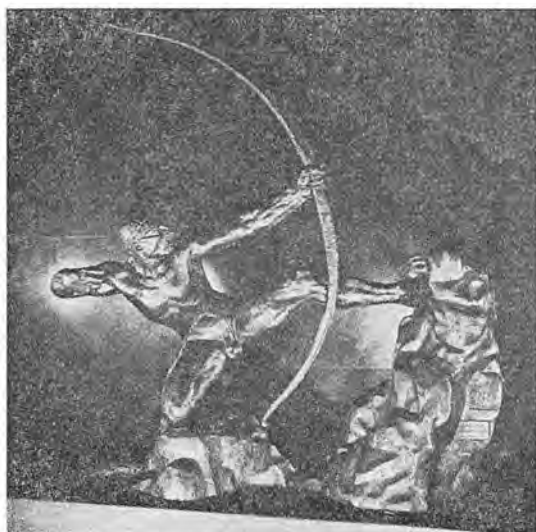
作者は有名なブルデルである。一八六一年、モントーバンに生まれたブルデルは一八七六年、トゥールズ美術学校の給費生となり、その後一八八四年にパリに出て、エコールデボザールの入学試験に合格して、初めてサロンに出品をした。一八九三年、三十三才のときに有名なロダンの弟子となり、ロダンの持っていた良い所を身につけると同時に、ロダンにはない一つの新しい道を開いた。このブルデルが一九〇九年に作ったのが『弓をひくヘラクレス』であり、これが彼の作品の方向を定めると共に、世間から認められた記念すべき作品でもあった。まさに矢を射ようとしているヘラクレスの力感あふれた緊張感に単に動作だけではなく、筋肉に至るまで心が配られ、弓と岩との構成が、積極的な空間の導入と共にいかされている、ブルデルの代表的作品の一

つである。これをどうして父がパリで買う気になったのか。その理由は残念ながら一度も聞いたことがなかったが関東大震災後一年ほど遅れてこれが日本に着いて、芝浦工場の隅に雨ざらしになって置かれていたことを、子供心に覚えている。

昭和五十二年四月二十八日から、奈良県立美術館でサンケイ新聞主宰により行なわれたブルデル展の際も、サンケイ新聞の依頼によって本社の『弓をひくヘラクレス』が出品された。ダイナミックな生命感が率直に表現され、鋭く彫り込まれた表面の起伏や緊張に満ちた、いかにも男性的な剛健な力に満ちている。私は毎朝会社に出勤するたびに、このヘラクレスに負けまいと自分自身に言いきかせているのである。

昭和五年、日本橋に本社が新築され、一階のショールームから二階の事務所に入る階段の踊り場にこのヘラクレスを飾り、父は非常に大切にし、誇りにもしていた。自動車のショールームに来るお客様よりも、ヘラクレスを見にくるお客様とこれを写生にくる美術学校の学生の方が毎日引きも切らず、ヤナセのヘラクレスは当時、非常に有名なものであった。

しかし、今日、玄関に置いてあり、今後のヤナセの一つのスピリットの表現とも思われる『弓をひくヘラクレス』



弓をひくヘラクレス

ス』を案外社員が尊重しないことから、私は昭和五十三年十月一日から正面玄関の入口の真正面の会長の胸像の横に移動させることを命じた。これこそこの難しい時代、すなわち昭和五十三年十月一日から新しい期を迎えた我々の、突進しなければならぬ姿勢であり、我々の精神ではないかと思うのである。

また日本橋時代には、昭和電工の鈴木治雄社長がこのブルデルのヘラクレスを見ながらシヨウルームの階段を上られ、その先の木の障子格子から、真下のセールスマンのたまり場へまっさかさまに落ちられるという出来事もあった。これは、一つの事に集中されるとすべてを忘れられるような学者肌の鈴木氏が、ヘラクレスを見つめながら真つすぐ歩かれたためで、足を捻挫され、入院をされるというお気の毒な出来事であった。

終戦後、日本橋の本社が進駐軍の郵便局に接収され、その時の郵便局長がアメリカの片田舎の三等郵便局長であったために、アメリカの婦人のお客様に裸の男の像があるというのは誠に失礼である、というようなことで、腰のまわりに布を巻きつけたということも一つの想い出である。その当時父は、何とも芸術を解さない人間がアメリカにはいるものか、こんな考えでは、フランスに行ったら道も歩けないのではないか、と言って笑っていたが、そのヘラクレスが今なお、本社の玄関に厳然として我々の行く道を力強く指さしてくれている。我々はもう一度、全員でこのヘラクレスを見直してみるべきではないかと思う。あの姿こそ、我が社の永久のスピリットとしたいものである。

## 世界大恐慌と軍縮

## 外車業界の萌芽

関東大震災により自動車に対する価値観が一変し、経済・文化両面に必要品であるとの考え方が次第に強化されて来たが、昭和二年、米国フォード、GM社の日本進出により益々自動車に対する関心が強大になって来た。

日米スター自動車株式会社（社長・相羽有氏）が設立され、スター及びデュラント乗用車の販売を開始した。そして、昭和三年、三昭自動車株式会社が設立され、グラハム号の乗用車とスチュワート貨物車の市販を開始した。三昭自動車の開業について、父は『日本自動車史と梁瀬長太郎』の小冊子の中で、次の如く語っている。

「三井物産機械部で自動車を取り扱い、損ばかりしていたのに、梁瀬商会―後の梁瀬自動車―が営業するようになってから赤字が黒字になった。そのために三井物産の機械部の一部の人々が食指を動かし始めた。その結果三昭自動車株式会社が昭和三年四月に設立された」

その時の機械部長鳥羽惣治氏が父を訪ねられ、当社の相良亮吉氏を三昭に欲しいと囑望され、父もこれを許したので、三昭自動車は相良氏が経営の中心となって発足したのである。当初の取り扱い車種は、アメリカでも相古い歴史を持つグラハム・ペーチと、英国のモリスとスチュワート・トラックであったが、昭和七年頃からは、当社が取り扱いを中止したスチュードベーカーと小型車ロッキニーの販売も開始した。

初代の専務取締役として、三井物産から野牛道弘氏が赴任され、ヤナセだけがもうかるわけがないと、虎ノ門にショールームを設置して開業したが、販売は意の如くならず、期待は裏切られてしまった。野牛氏はその当時の三井物産常務の南条金雄氏に呼び付けられ、強いお叱りを受けた。間もなく、新しく立神哲太郎氏が専務として就任されたが、挽回策もないままに昭和九年五月に三昭自動車は経営を中止した。そのショールームが、後にはいずゞ自動車のショールームになったわけである。

昭和五十二年、貿易収支のアンバランスが日本にとって大きな問題となって来た時、三井物産が英国レイランド社との半々出資で日本レイランド社を設立し、ジャガーをはじめとするレイランド車種のすべてを販売することになった。

開業が決定し、いよいよ実行に入られる時、日本レイランド社の社長が来社され「今回大三井物産が初めて自動車輸入販売の仕事を取扱います。業界に一大新風を注ぎたい」と、挨拶されたので「三井物産が自動車の仕事に携わられるのは初めてですか」と質問すると「全くの初めてである」とのご返事なので大いに驚き、三井物産で最初に自動車を取扱ったのがヤナセ、次が戦前のグラハム・ペーデの三昭、戦後はフランスのルノドの販売をされ、間もなくやめられたお話をしたが、三井物産の今日の幹部が自動車業の過去の歴史を全く知らなかったのであった。

昭和六年、三菱、福岡、川崎の三大財閥が力を合わせて三柏自動車株式会社を設立し、アメリカのパックカードの販売に着手された。同年、日本自動車系（大倉系）で昭和自動車株式会社が設立されて、乗用車デソート・ホワイト、トラック、バスの取り扱いを開始した。三柏自動車（後の三和自動車）は、藤原俊雄氏が社長で、パックカードは当社のキャデラック、ビュイック、日本自動車のハドソン、安全自動車のクライスラー、ドッジブラザー（今日のダッジ）と競争してかなりの好成績をあげていた。日本陸軍が主にハドソン、海軍がビュイック、そして財界人がパックカードと言われていたのが、昭和の初期の自動車販売業界の縮図であった。大衆車では、エムパイヤ自動車、松永自動車を中心とするフォードと、大沢善夫氏を中心とするシボレーが日本を二分していたのもその頃であった。葵自動車も溜池にあり、ナッシュとラファイエットを取り扱っていた。

当時の自動車販売業界は、その本社が日本橋地域と赤坂溜池地域とに分かれていた。日本橋地域は、ヤナセと

エムパイヤであり、赤坂地域は、六本木より坂を下り溜池の交叉点を左折した左側に三和（現在の小松製作所ビル）、その前面に日本自動車、その山王寄りに八州自動車（佐藤喜美治氏が安全自動車から分かれ独立した会社）菱自動車、そして安全自動車が並んでいたのである。

三和自動車は、戦時中全株を三菱重工に売却し、戦後三菱自動車製品を販売していたが、藤原俊雄氏の長男藤原俊文社長の依頼により、全株をヤナセが三菱より買い取り、その経営を藤原社長に一任していた時代があった。藤原社長は、是非再び外車（バックカード）販売に戻りたいと考え、株式を買い戻したがったのだが、当時は資金力不足のため一時期ヤナセに買い取っておいて欲しいと熱望された。そして、資金力ができた時には、藤原氏に再譲渡して欲しいという希望であった。

父は先代の藤原社長と個人的にも大変親密であり、その子息の俊文氏を大変可愛がっていたので、これを受諾したわけである。再びバックカードの販売権が三和に戻り、新たにショールームも溜池にでき上がり、再出発はしたものの、アメリカ本国にてバックカード社自身がなかなか発展繁栄ができず、ポツポツの商売であった。

ヤナセはGM日本駐在員ステイブンソン氏の考えから、東日本、西日本に販売権を分割されたので、関西地区のGM車の販売ができなくなったことがある。そのため名古屋、大阪、福岡の三支店の取り扱い商品が全くなくなってしまった時、バックカードの関西地区の販売権を三和より分けて



昭和6年千代田館におけるオートショー

もらつて、大阪にウエスタン自動車を設立したのであるが、数台輸入しているうちに、アメリカ本国でパッカーは生産を中止してしまつた。取り扱ひ商品が無くなつてしまつた三和は、その株式を名古屋の新興財閥の奥村昌美氏に売却して、ポルシェの販売を開始したのである。この他、モリス号は東京オートパレス社、シトロエン号は日仏シトロエン自動車を取り扱つていた。今日現在の外車業界は、姿こそ変わつてはいるが、その元の形は全て昭和三年頃にできたものである。

#### 暗黒の木曜日

一九二四年後半になつて、ドイツのインフレと賠償問題が一応の決着をみた頃から、世界の政治、経済はようやく安定期に入つた。翌一九二五年（大正十四年）五月にはイギリスも金本位制度に復帰し、それに続いて大部分の国が金本位制を復活した。この時すなわち一九二五年頃から一九二九年の秋、アメリカで大恐慌がおきるまでの四〇五年間が、世界的な相対的安定期と言われるわけである。

この四〇五年間で特にアメリカは輸出の増大、自動車、電気機械といった新産業の発展、住宅建設の伸長などによつて経済の繁栄を謳歌した。共和党のフーバー大統領は一九二八年（昭和三年）の大統領選挙戦の時「台所にはいつもニワトリが二羽用意されており、ガレージには自動車が二台ある。これがどこの家庭でもあたりまえの生活水準と考えられるようになるであらう」とアメリカ国民に約束をした。アメリカ以外の多くの国の政治情勢も安定を取り戻し、ソ連では国内建設に集中し、またイタリアでは一九二一年（大正十年）ムッソリーニが政権をとつたが、まだファシズムの本性を表わすには至らなかつた。この四〇五年間の相対的安定期の国際経済の均衡は、アメリカの対外投資とドイツの賠償支払いという条件の上になつて辛くも維持されているという誠に危なっかしいものであつた。もしアメリカの対外投資が一度とまれば、ドイツの賠償支払いもできなくなり、世界経済の見せかけの均衡と繁栄はたちまち崩れてしまう運命にあつた。

この破局は案外早く一九二九年（昭和四年）秋に訪れた。世界大恐慌の幕が切つて落とされたのである。暗黒の木曜日と言われる一九二九年十月二十四日、ニューヨーク株式市場で大崩壊がおこつた。二六一ドルの高値にあったUSスチールの株は一九三ドルに暴落し、数週間前には四百ドルの高値にあったGEは二八三ドルに下がった。この一日で全米の投資家が受けた損害は数十億ドルに上つたと言われている。その後一時持ち直した株式市場に運命の悲劇の火曜日すなわち十月二十九日がやつて来た。再度の大暴落でニューヨークだけで八十億ドルの損害を生じた。その日以来十一月十三日の底値まで、株価は下がる一方で、実に半値に落ちてしまった。これがきっかけとなり物価が急騰し、やがて生産の縮小、失業者の増大へと展開していった。不況が底に達するのはほぼ一九三二年、三三年（昭和七、八年）のことであるが、一九二九年に百五十五万人であつた失業者は、一九三二年には千二百万人に達したと言われ、商工業の破産も一九二九年の二万余りが一九三二年には三万余りにはね上がっている。

この大恐慌は未曾有の深さを持つていたので、その回復ははかばかしくなかつた。恐慌に襲われたのは一人アメリカだけではなく、日本にもたちまち伝わり、昭和の大恐慌となり、またヨーロッパの資本主義国もすべてこの波に襲われたのである。まさに世界恐慌の名にふさわしい最大のものであつた。

大恐慌の原因として考えられることは、アメリカの景気が一九二七年（昭和二年）秋にはすでに下り坂に入つており、自動車、電気、住宅、耐久消費財を中心に生産を伸ばしてきた経済も、この頃になると消費の限界につき当たるようになったことである。アメリカ政府はそのとき金利を下げ、金融をゆるめて景気を刺激する政策を取つた。これは確かに景気がある程度盛り上げる役割を果たしたが、それと共にアメリカ経済の中に大きな不安定要因が入りこむことになつた。金利の引き下げから株価の上昇を招き、一九二八年半ば以降熱狂的な株式騰貴

が始まったのである。こうした株式ブームにつれて、それまでヨーロッパに向けられていたアメリカの資金が引き上げられて国内投資に向うようになっただけでなく、さらにヨーロッパ自体の資金までがアメリカの証券市場に吸収され始めた。そうなれば、それまでアメリカの海外投資によって支えられていた世界の相対的安定が崩れるのは当然のことであり、まずイタリア、オーストリア、ベルギーなどから南米の一部に深刻な金詰りが生じてきた。この金詰りがアメリカの輸出にまで影響し、こういう条件の中で投機熱に急に不安が集まり、それが激しい株式市場の崩壊となって爆発したのである。世界経済の中心的な地位を占めていたアメリカの好況が崩れ去れば、それが世界的に広がるのは当然のことであり、アメリカの輸入の縮小はヨーロッパに不況をもたらし、ヨーロッパの経済不況が強まれば、アメリカの資金はいよいよ引き上げられ、これによりヨーロッパの金詰りが益々ひどくなり、不況が深刻化する、そういう悪循環の拡大はもう防ぎようもなかった。この中で、一九三〇年（昭和五年）五月のドイツの選挙でナチスと共産党が並んで進出したことや、一九三一年五月オーストリアの大銀行クレジット・アンシュタルトが破産したことなどがさらに混乱を大きくした。この資本主義経済を根底からゆきぶった世界恐慌が歴史に残した影響は極めて大きく、これより世界の資本主義は新しい時代に入ったと言えるであろう。

### 一変した世界経済

大恐慌の結果として大きな変化をとげたのは、単に国内の経済体制ばかりでなく、むしろ一九二〇年代には曲がりなりにも維持されていた世界経済の統一的体制が一挙に崩れ去り、国際協力ではなく、あからさまに経済的孤立政策と国際対立とが表面に表われるようになってきた。これが最も重大な変化であろう。

世界経済の崩壊はまず国際金本位制の崩壊から始まった。イギリスは一九三一年（昭和六年）九月金の輸出を

禁止すると同時にポンドの切り下げを行ない、これはたちまちコロンビア、エジプト、ニュージーランド、デンマーク、アイルランド、ノルウェー、スウェーデン、サルバドル、フィンランド、カナダ、ポルトガルというように連鎖反応をおこし、十二月には日本も金本位制から離脱した。一九三三年四月までには二十四ヶ国が金本位制を停止してしまい、その中にはアメリカも含まれていた。最後まで金本位制にしがみついていたのがフランスイタリヤ、スイスなどのわずかな国で、これも一九三六年の秋に離脱した。この結果、世界経済が様相を一変し有力な一國が広域を自國の勢力下に置き、自國の生産物をそこで売りさばくと共に必要な物資をその広域圏内で自給自足するという広域經濟圏という考え方が次第に広がっていった。イギリスのように世界中に勢力圏を持っていた國はともかくとして、多くの國はもともと自給自足のできない性質を持っていた。従って、広域圏は次々とより広い範圍に広がっていく要求を持たざるを得ないが、これが次第に國際的緊張を高め、続いて世界戦争へと發展する危険性をはらんでいたのである。

一九三二年（昭和七年）にオッタワ協定で成立したスターリングブロックが広域經濟圏として最初のものであったが、これはイギリス帝国内の自治領や植民地をブロックにし、その圏内でできるだけ貿易を片づけようとする試みであった。

これに対抗する意味でドイツは東歐諸國に勢力をのぼし、ここに自己のブロックを作る努力を始めた。第三には米州ブロックができ、これは中南米諸國をアメリカに結びつけようという試みであった。第四には日本を中心とする日滿支のアジアブロック、すなわちこれが大東亞共榮圏へと發展していく構想であった。こうして世界は四大ブロックに分割される傾向を強めたが、このうちで特に日本とドイツのブロックは他の國々との利害衝突の危険性が極めて大きかった。

## ファシズムの台頭

大恐慌はこのようにして世界中の経済体制を大きく転換させ、また世界経済を崩壊に導いたのであるが、こういう背景の中で政治的には日本、ドイツ、イタリアの三国を中心としたファシズムの進出がめだつようになってきた。ファシズムの元祖はイタリアのファシスト党である。ファシズムという言葉は古代ローマでの支配の象徴とされていた樺東 F A S C I O に由来すると言われているが、

これとファシズムの運動とが結びついたのは一九一九年（大正八年）三月、ムッソリーニがファシスト党を結成してからである。ムッソリーニは初め社会党の党员であったが、第一次大戦中にイタリアの参戦を主張して社会党と分かれ、大戦後、急激に拡大した社会主義運動に対抗するために国粹主義者、軍国主義者を結集してファシスト党を組織した。このファシズムの運動は一九二〇年頃から次第にテロリズムを武器とするようになり、労働組合や農民団体を襲撃することもあった。他方資本家や地主の援助によって急激に力を増し、一九二二年ムッソリーニはついに政権を獲得した。ファシスト党の独裁が完成されたのは一九二六年十一月のことで、それからのイタリアは第二次大戦の末期までムッソリーニの独裁が続いたのである。

ファシズムが力をふるい始めたのは一九三三年（昭和八年）一月にナチスがドイツで政権を握り、ヒトラーの独裁が確立してからである。こうして日本、ドイツ、イタリアという三国のファシズム化が世界史の上に大きな反乱をひき起こすようになり、このファシスト政権が国内では社会主義に対する弾圧に始まり、次第に国民のあらゆる自由と権利とを抑圧し、民主主義を圧殺し、専政体制を強化する道をたどったこと、また対外的には軍事的侵略を拡大し、勢力圏を絶えず外に向かって広げていくこうとしたことが共通に見られる性格であった。このような脅威にまず火をつけたのは、日本の満州侵略であった。それにつづいてイタリアのエチオピア侵略（一九三五年Ⅱ昭和十年）、スペインの内乱に対するドイツ、イタリアの干渉（一九三六年）、日本の中国侵略（一九三七

年)、ドイツのオーストリア併合(一九三八年)、イタリアのアルバニア併合(一九三九年四月)、ドイツのチェコ侵略(一九三九年八月)と発展していく。そして一九三九年九月のドイツのポーランド侵入がついに第二次世界大戦への発展となったことは周知の事実である。

### 昭和の開幕

一九二六年(大正十五年)十二月二十五日大正天皇が葉山の御用邸で崩御され、即日摂政官裕仁親王が踐祚された。翌二十六日には元号を昭和と改め、大正十五年十二月二十五日を昭和元年十二月二十五日とすることが発表された。これにより十五年間続いた大正時代は幕を閉じ、躍動の時代「昭和」(この元号は、書経の「百姓昭明、万邦協和」からとった)の幕が切つて落とされたわけである。大正時代はその後半は決して明るい時代とは言えなかったが、昭和時代は特に初めの二十年間、動乱の時代であった。それは恐慌に始まり、内に外に社会不安が日増しに強くなり、血なまぐさい事件がくり返され、その中でファシズムの暗雲が次第にたちこめてきた時代であった。

この誕生間もない「昭和」が最初に受けた試練が金融恐慌であった。当時第一次世界大戦後の不景気に加え関東大震災による混乱で、金融界は不安動揺し、銀行預金引出しが漸増していたが、昭和二年三月十四日の衆議院予算総会において、時の大蔵大臣片岡直温は、東京渡辺銀行が破綻した、と失言した。このため翌十五日から全国に銀行取りつけ騒ぎの波が広がったのである。

またこの年四月四日には、三井、三菱が大商敵と見ていた神戸の鈴木商店が、主取引銀行である台湾銀行の経営不振から倒産し、このため株式相場は暴落し、混乱状態となった。そして、こうした経済不安を背景に同年四月、田中義一内閣が成立したのである。

しかし、この年はこうした暗い話題ばかりではなかった。大阪毎日・東京日日新聞主催で第一回全国都市対抗

野球大会が開催され、また、甲子園の中等野球が初めてラジオ放送されて、野球熱が高まったのも昭和二年であった。

翌昭和三年には、日本の対外信用を失墜させ、田中義一政友会内閣を倒壊に至らしめた大事件、張作霖爆殺事件が勃発した。

「親の心子知らずとはこのことだ」ということばが張作霖爆殺の報に接した田中義一首相の口から思わずもれたという。軍部を掌握しきっていると強いつ自信を持っていた田中首相からすれば、手痛い事件であったものと思われる。

以後、政府の力をもつても軍部の動きを抑えることはできず、昭和六年の満州事変、翌七年の五・一五事件等を契機に、軍部の力はますます巨大化していったのである。

### 日本の金融恐慌

世界がそういう歩みになっていくとき、日本では昭和二年（一九二七年）三月十五日大規模な金融恐慌が勃発した。この結果、渡辺銀行が倒産をし、これが口火となり、四月の初め神戸の鈴木商店が破産し、それに関連して台湾銀行の危機が暴露されるに及んで、金融恐慌は急にその勢いを強めるようになった。四月十八日台湾銀行の休業から動揺を始めた銀行界は四月二十日若槻内閣が倒れた後、二十一日には全国的大規模なパニックに襲われた。その日には当時五大銀行の一つに数えられていた十五銀行までが倒産し、政府はついに二十二、三週間のモラトリアム（支払猶予命令）を公布するに至った。一九二七年（昭和二年）一月から五月までに休業した銀行は三十七行に及び、そのうち九行はその後何とか立ち直り開業したが他は破産して姿を消してしまった。

金融恐慌の中で最も注目しなければならないのは神戸の鈴木商店、それと緊密に結びついていた台湾銀行の破

産であろう。鈴木商店は明治元年に鈴木岩二郎によって作られ、砂糖、樟腦などを主として取り扱っていた。この采配を振ったのが金子直吉という番頭さんであった。土佐出身の金子氏は鈴木商店で育った人物であったが、仕事師と言われたやり手で、彼の指揮下で鈴木商店はめきめきと事業を拡張していった。明治三十五年（一九〇二年）には資本金五十万円の合資会社とし、台湾を中心に取引を拡大したが、次第に砂糖、樟腦の取引だけでなく生産にも手をのばし、さらに銅、塩、小麦粉、ビール、たばこ、ゴム、金属、船舶、セルロイド、肥料、人絹等へも分野を拡大していった。特に第一次世界大戦に際して金子氏の積極策がうまく当たり、大正六年（一九一七年）には取引高十五億円という世界的な商社に発展し、大正九年には資本金を五千万円にした。その頃の鈴木商店系事業会社は神戸製鋼、帝国人絹（現在のテイジン）、播磨造船、日本製粉、大日本セルロイドなど六十社に及び、その支配する資本は五億円を超えており、一時は三井、三菱につぐと言われるほどの財閥であった。

鈴木商店は砂糖、樟腦の取り扱いから発展したことでも分かるように、台湾及び台湾銀行と縁が深かった。後藤新平が台湾の民政長官をしていたころから同氏と深く結びつき、その関係から貴族院の同志会、憲政会ともつながりがあった。こうして鈴木商店は大戦中に大膨脹をとげたが、多分に投機的な活動にたよっており、それだけに経営は放漫で不健全であったと言われている。鈴木商店では北村徳太郎、住田正一、浅田長平、大屋晋三など後に日本の政界、財界の指導的人物となった人々を養成したが、この放漫経営によりだんだんと傾き、大正十五年には台湾銀行でさえ貸付を引き締め始め、ついに倒産という運命におちいった。

#### 田中義一内閣

こうした金融恐慌によって一般預金者は中小銀行から大銀行へ預金を移すようになった。その結果、三井、三菱、住友、第一、安田の五大銀行が預金、貸出共著しい伸びを見せ、昭和四年（一九二九年）には八八一行のうち、五大銀行で預金の三五％、貸出の二七％を占めるようになった。時の

総理大臣若槻礼次郎氏は台湾銀行を救済せんが為、特別の緊急直令を枢密院に計ったが、枢密院は十七日にこの案を否決してしまい、その夕刻若槻内閣は総辭職をし、そして十九日には田中義一に組閣の命が下り、政友会は待望の政権についた。大蔵大臣には長老の高橋是清がかつぎ出された。枢密院で否決された結果、台湾銀行もついに十八日には休業に入った。十五銀行は皇族の銀行で、宮内省が大株主である名門であったが、これが一挙につぶれたのであるから、世間に与えたショックは大変なものであった。

若槻内閣に代わって登場したのが政友会の田中内閣で、昭和四年（一九二九年）七月二日浜口内閣にバトンを渡すまで日本を率いていくことになる。田中内閣は内政面からみると、金融恐慌の後始末を終えた後、積極的に財政の膨張を図って、景気を刺激する政策をとり始めた。その中心をなしたのが中国出兵を「てこ」とした陸軍経費の増大であり、その他震災復興事業の促進、農村救済費の放出、植民地経営の積極化など重要な施策が行なわれた。しかし、政府はこういう膨張する経費を租税によって賄うより、主として公債発行と国庫剰余金の取り崩しによって賄った。それだけにインフレ気配は一層強まることになった。こうした積極政策は景気の立て直しに多少の役割を果たしたことは事実であるが、当時日本の物価の上昇は益々貿易の格差を大きくし、輸出が二千万円減少した反面輸入が千七百万円も増え、輸入超過は前年の一億八千七百万円が二億二千四百万円と一挙に四千万円近くも増加した。それにつれて為替の相場の下落も著しくなり、昭和二年三月対アメリカ四九ドル、すなわち日本円百円に対して四九ドル、つまり一ドル二円二角になったが、十一月には四六ドルに落ち、昭和四年四月にはついに四四ドル台に下落した。そして昭和四年には再び景気は沈滞に向かい、日本経済の国際的な立ち遅れはますますはつきりしてきた。

内政においてインフレ政策をとった田中内閣は外交においても決して成功したとは言えなかった。この頃中国

では南京政府による全国統一の事業が急展開を示していたが、それと共に多年侵略を続けてきたイギリスや日本に対する反発が激しくなり、商品のボイコット、居留民に対する圧迫などが次第に強まった。特に満州に大きな支配力を持っていた日本に対し、民族運動の先鋒が最も強く向けられてきた。こうした情勢に対して若槻内閣の幣原外務大臣は不干渉、協調主義の外交路線をとり、むしろ中国の民族的要求を受け入れ、新政権と協調しながら、日本に有利な条件を作り出そうという方針をとった。それに対して関東軍を初めとする軍部、右翼、そして貴族院や枢密院の反動勢力もこれを軟弱外交と大いに攻撃した。若槻内閣を瓦解に導いた枢密院の台湾銀行救済否決も、実は対中国に積極策を主張する伊東巳代治らが幣原外交をひきずりおろすために打った芝居であるとも言われている。

従って若槻内閣の次の田中内閣は、中国問題に対しては非常な積極策をとった。昭和二年五月二十八日には南京政府の北伐に備えて居留民を保護するという名のもとに旅順から二千の兵を青島に出兵させ、さらに昭和三年（一九二八年）四月十九日には再び山東出兵を行なった。これが済南事件に発展すると、五月九日にはさらに第三次出兵を行ない、次第に中国への武力進出を進めていった。満州、蒙古を中国から日本の支配下に置くばかりでなく、あわよくば中国本土にまでその支配を広げていこうとする露骨な侵略主義にたったやり方であった。この暴走の結果が、昭和三年六月の張作霖爆殺事件に発展し、田中内閣の命取りになるのである。この事件そのものは出先の軍部の独走であったにしろ、そのような事態を招く素地は田中内閣の外交政策の中に存在していたといつてよい。このような無鉄砲な外交は、その後の日本に重大な問題を残すことになったのである。

それは第一に中国の排日、抗日を決定的なものにしてしまったことである。第二には日本の国際的地位を悪化させてしまった。もちろん先進諸国は日本の侵略主義に対してかねてから警戒の眼を向けていたが、田中外交以

来日本に対する不信感は決定的となったと言つていいだろう。第三には軍部特に陸軍の独走を許す道を開いたことである。軍部は田中内閣の頃から急に勢いを盛り返し、特にこの過程で陸軍の上層部が次第に統帥力を失ひ、右翼の政治家や満州ゴロと結託した中堅将校が独断的に事を進める傾向が強くなつた。軍部ファシストの中核ができ上つてくるのは少し後のことであるが、その素地はこのとき充分こしらえられていた。この三点を考えただけでも田中外交がその後の日本の歩みにいかに大きな役割を果たしたか、充分うかがうことができる。当時、政治評論家であつた馬場常吾は「現内閣を組織する田中首相及びその閣僚は彼ら自身ではそのやつてゐることが何であるかを知らぬであらう。しかし我々は恐れる、彼らの行為は過去五十年に渡つて日本人が努力して築き上げてきた立憲政治に一つのくぎりをつけ、日本の政治的發展に方向転機なさしめるものではないかと。我々は自由な明るい政治をもつ方法として議会の発達に希望をつないできた。しかるに普通選挙の実施を一段階とし、現在の政府は反動政府の幕を切つておとした。明るい政治は暗い政治に方向転換をした。我々はこれより最も陰うつによる危険なる絶望的にして不愉快なる時代を經過せねばならぬかの予感を恐れている」と政界人物風景で語つている。馬場氏の予言は不幸にしてピタリと当たり、日本はまさに絶望的にして不愉快なる時代に突っ込んでいったのである。

### 悪しき人脈

田中内閣は、残念ながら日本の歴史に大きなマイナスを負わせた存在であつたが、それがすべて田中義一個人の責任であつた、ということはいふ言えない。むしろ彼は決断力のない小さい人物で、先の見通しの上になつて日本を率いていくだけの力量がなかつたために、取りまきに勝手なことをされてしまつたということであろう。田中義一は長州出身の軍人であつたが、彼が頭角を表わしたのは明治四十四年（一九一一年）軍務局長となり、二個師団問題で山県有朋と組んで西園寺内閣を倒し、これを實現させた頃からであ

った。これより先、田中義一は帝國在郷軍人会を作ったり、青年団の組織に乗り出したりしているから、この頃からすでに、一方では山県有朋、桂太郎、寺内正毅という長州の大物にとり入り、他方陸軍の周辺組織を固めていたのである。

当時、政友会は原敬の後をついだ高橋是清が総裁であったが、金づるのない高橋には政友会を充分にまとめることができなかつた。高橋内閣がわずか七ヶ月で崩れてしまったのも、党内に改革派と非改革派の対立が生じ、収拾がつかなくなつたからであつた。その頃から高橋是清は政友会総裁引退の機会をねらつており、他方政友会の策士たちも早く首のすげ替えをして政権にありつこうとしていた。大正十四年（一九二五年）高橋是清は引退をし、政友会総裁は田中義一に変わった。その時、田中は陸軍の機密費の公債を持ち出し、それを担保に大阪の金貸し乾新兵衛から三百万円を借りうけて持参金とした。今の金にすれば十億円にも相当する大金である。この田中の機密費問題のもみ消しに大きな力を振つたのが陸軍大臣の宇垣一成であつた。宇垣は田中の推薦によつて陸軍大臣となり、田中が政友会総裁になつたとき、これを貴族院の勅撰議員に推薦したのも宇垣であつた。若槻内閣の末、幣原外交を強く批判し、内閣の崩壊を促進したのも彼であつたと言われている。

对中国問題に大きな影響力を持ったのが外交政務官を勤めた森恪であつた。森は三井物産から政界入りした人物で、長く三井物産の中国支店におり、支那通をもつて任じていたが、当時から現在の軍人、右翼などと深いつながりを持っていた。若槻内閣が崩壊する際、樞密院に手をまわした点でも森の働きは大きかつたと言われ、田中の信望も厚かつた。昭和二年（一九二七年）二月森は政友会の山本条太郎、松岡洋右と組んで中国視察旅行に出かけた。この時、陸軍省にいた鈴木貞一と親しくなり、さらに鈴木を通じて、石原莞爾、河本大作とも親しくなつた。鈴木、石原、河本は当時中堅将校であつたが、既に陸軍の首脳部の優柔不断を批判し、急進的な派閥の

中心人物になりつつあった。河本は張作霖暗殺の立役者で、また石原が滿州事変の演出者であることは明らかであった。森は早くから軍部の右翼革新派と気脈を通じており、この線にそって田中をひきずったわけである。田中外交が侵略的ファッシヨ的性格をもっていた背景にこういう事情があったことがうなずける。

対外政策における森と並んで、対国内政策に大きな役割を果たしたのが鈴木喜三郎であった。鈴木は検事総長までつとめた司法官で、その関係で平沼騏一郎とも親しかった。鈴木が大いに悪名をあげたのが、田中内閣の内務大臣となった昭和三年二月の総選挙における辣腕ぶりであった。これが最初の普通選挙であったが、政友会は当時少数党であったから、この選挙にどうしても勝たなければならない立場にあった。特に相手の憲政会は昭和二年六月政友本部を脱退して民政党となっており、勢力を増していただけに、鈴木が未曾有の選挙干渉に乗り出したのも、無産政党に対する警戒心ばかりではなく、こういう切羽詰まった与党の状況にも原因があった。

鈴木はまず選挙に先立って府県知事の入れかえを行ない、政友会系の知事を送り込んで体制を固め、選挙運動が始まると、野党や無産党の候補者や運動員に刑事の尾行をつけ、また選挙事務所には常時刑事を張り込ませ、あらゆる選挙運動を妨害した。この違反件数をみると、投票日までには民政党が四六九件、千七百一人の検挙者、無産階級は一四八件、三千一人の検挙者を出したが、政友会わずか六三件、一六四人にすぎなかった。立候補者が民政党三四七人、無産党が八六六人に対し政友会が三四二人であったことから、いかに片手落ちの取り締まりであったかがうかがえる。しかし、選挙の結果、政友会は民政党をわずか一名しかぬきえなかつたし、八名の無産議員の進出をゆるした。こういう森・鈴木といった反动政治家が田中をとりまいており、政策の推進者となつたことが、田中内閣にとつても、日本の国民にとつても、まことに不幸な結果を生んだことは、明らかであった。

## 動乱の中国大陸

長い間、鎖国主義的で、そして、自国の防衛と経済の発展をカーテンの中で行なっていた社会主義中国は、昭和五十三年八月十二日、日中平和条約を結ぶと同時に、国際的な協力姿勢に方針を変更し、続いて、昭和五十四年一月一日に中国はアメリカとも友好関係を結び、中国の姿は一変してきたわけである。その後中国から数多くの使節団が日本を訪れ、日本からも政府関係、または財界関係の人々も訪問し、長い歴史を通じて、日本と中国が手を取り合って協力しようという体制ができたことは、歴史上から考えても、非常に長い断絶期間にピリオドを打つことができたとも言える。中国の歴史ほど、長く、そして、むずかしいものはない。

曲りなりにも中国の統一を維持していた袁世凱が、大正五年（一九一六年）六月に死亡した後、中国は、軍閥の抗争が激しくなり、天下は、文字通り麻の如く乱れた状態になった。

大正十一年頃には、北京の徐世昌が大總統になったが、この実権は、呉佩孚、馮玉祥に握られ、満州では張作霖が実権を握り、南の広東には国民政府があり、孫文が大元帥になっていた。その他に、小さい地方の軍閥はたくさんあったが、北京、満州、広東の主要勢力の対抗と結合によって、中国の情勢はめまぐるしく変化をとげつつあった。

満州から華北にかけては、主として日本が、大きな権益と勢力を持っており、関東軍が駐留をしていた。その上、日本の陸軍軍人や右翼の支那浪人は、こういう軍閥の顧問などに入り込んでおり、裏からこれをあやつろうとしていた。華中、華南は、伝統的にイギリスの勢力が強く、また蒙古からはソ連の影響が及びつつあり、大正十年（一九二一年）には、蒙古にソ連赤軍が入り、人民共和国を設立していた。

こういう混乱の中に、既に新しい中国の胎動があったことを忘れることはできない。その一つが大正八年（一

九一九年)の五・四事件に始まる民族運動の高まりである。この民族運動はベルサイユ条約の反対から発展し、ついに排日、日貨排斥運動となって全国へ広がっていった。これは次第に一般的に反帝国主義運動に発展していき、中国の民族的統一への力強い要求が結実しつつあった。

第二に、次第に革命的性格が強まったことである。孫文は、大衆的基盤の上に民族革命を推し進めていく方針をとり始めた。そして、国共合作を進めると共に、革命軍としての国民党軍の育成に力を注ぐようになった。この軍官学校の校長が蔣介石であった。

第三に、こういう民族運動の高まりを背景とした中国共産党の結成である。大正十年(一九二一年)七月に上海で創立大会が開かれ、この時の党員は毛沢東以下わずか五十七名にすぎなかった。その後、民族運動や労働運動の中に急速に勢力を広げていき、大正十二年(一九二三年)には党員が四百三十名、同十四年(一九二五年)には九百五十名となり、昭和二年(一九二七年)の第五回の大会には六万人近くにまで成長したのである。

こういう情勢の中で、中国には多種多様な動きがうず巻いており、大正十一年(一九二二年)四月には第一次奉直戦争が起こり、これによって張作霖は北京における勢力を失い、北京では呉佩孚が完全に政権を握った。

次から次へと大きな国内戦争が起き、全く予断を許さない中国情勢下、当時の日本の高橋是清内閣は、不干渉主義を取り、日本陸軍の策動を強く非難し、ともかくこれを押えることに成功した。その後、次から次へ起こる中国国内の動乱により、日本陸軍、関東軍及び右翼の支那浪人達が、次第に介入することによって、満州北支における日本の権益を守り、または、発展させることに力を入れはじめ、種々な陰謀をめぐらした。そして、関東軍が次々と手を打ち始めたことが、遂に日本を戦争の泥沼へ引きずり込んでいく始まりであった。

日本の陸軍、関東軍は、進んで張作霖を授護し、張作霖を通じて満州、北支の権益を維持することに力を入れ

ていたが、次第に張作霖が華北に覇を唱えた頃から、日本の傀儡を務めることをいさぎよしとしなくなり、満州の排日運動を足掛りに、日本に対して抵抗するようになってきた。

そこで、陸軍、関東軍は、張作霖に見切りをつけ、昭和三年（一九二八年）四月に山海関に出兵して、張作霖の軍隊が満州に逃げ込んだ時、張作霖をその座から降ろし、日本に忠実な傀儡政権を作り、日本が直接満州を支配しようと考えた。

この動きに対し、アメリカから強い横やりが入り、外務省も強硬に反対したので、田中義一首相は関東軍を押えにかかった。そして、山海関に向かつての出兵も許可は与えなかった。そこで、関東軍は、自分らの計画が内地の中央で認められないために、関東軍高級参謀の河本大作大佐を用い、張作霖の暗殺を計画した。

#### 内閣の崩壊

昭和三年（一九二八年）六月三日、張作霖が特別列車を仕立てて北京を後にし、満州に向かう途中、四日の午前五時過ぎ、奉天のすぐ近くで、河本大佐は、工兵の東宮鉄男大尉に命じ、仕掛けた爆弾により張作霖を暗殺した。張作霖の息子張学良が、父の暗殺されたことを聞き激怒し、直ちに関東軍に向かい戦争を仕掛けてくると期待した河本大佐の計画は、大きな狂いを生じ、一枚役者が上であつた張学良は本心を隠して日本側との友好をさしあたり維持した。このために関東軍は、出撃のチャンスをつかむことができなかった。

しかし、張学良は事態が一応静まるのを待って、昭和三年（一九二八年）十二月には奉天、吉林、黒龍江に青天白日旗を掲げ、南京政府から東北边防総指令の辞令を受け、むしろこれにより、かえって南京政府の中国統一はほぼ完了したのである。そしてこの後満州事変ばっ発まで、張学良の根強い反日政策が実施されることになり、河本大佐の陰謀はむしろ中国側の結束を強め、日本の立場を一層困難にする結果にしかならなかった。しかも、

張作霖の爆死が、日本側の工作であったことが明白にされ、隠しようがなくなってきた。そこで政府はこの責任者として河本大佐を軍法会議にかけ、厳重に処分することを決め、これを天皇にも奏上した。天皇は、特に軍規の嚴肅を田中首相に強く申し渡された。

ところが、田中首相の厳重処分案に対して陸軍が、陸軍の威信にかかわるということから猛烈に反対をし、陸軍の結束した強い突き上げによって嚴罰主義は行なわれず、これにより陸軍の長老連は現役連を押える力がなくなった。こうした中で田中義一首相は、臭いものにはふたの方向に突っ走り、新聞の報道を押え、張作霖暗殺事件とは言わせないで、「満州某重大事件」としか報道させないようにした。

天皇は、この田中首相が陸軍を押えきれなかったこと、並びに軍法会議に付する件を上奏していたことから、田中首相の約束違反を強く迫られ、田中首相はこれを天皇の不信任と受け取り、ついに内閣を投げ出し、七月二日には、浜口雄幸民政党内閣が成立したのである。

田中義一内閣が天皇の不信任によって崩壊したのは昭和四年（一九二九年）七月二日であった。田中義一内閣のインフレ的な景氣刺激政策は昭和四年（一九二九年）に入ると完全に行き詰まり、この行き詰りが財政面から破綻を示しつつあったが、何よりも日本の物価高が貿易の逆調を強め、そのために日本の為替相場が低落と動揺をくり返したことが大きな問題であった。

また、この為替相場の動揺は、田中内閣が金解禁に対して定まった意見を持たなかったことによつて、より拍車がかげられた。このように為替が低落すれば輸入品が割り高になるから、輸入原材料に依存する紡績業や鉄鋼業などが当然不利にならざるを得なかった。さらにこの為替の動揺は、輸出産業にも大きな障害をもたらしたため、製紙業のような国内原料に依存する産業も次第に、円安・ドル高から受ける輸出の有利さを失っていった。

こうして多くの産業は、金解禁によって日本の為替相場を安定させなければ、日本の産業の立ち直りは望めない、という見解を次第に強くしていった。反面、金融界は、金解禁が日本の産業に強いショックを与え、倒産などの増大することを恐れていたが、次第に銀行も金融界も金解禁の即刻実行に意見が傾いていったのである。

この当時、昭和二年（一九二七年）一月には一ドルが約二円十五銭であり、これが年末の十二月になると一ドル二円二十二銭位となり、これが昭和三年（一九二八年）の七月には、二円三十銭と下落し、昭和四年（一九二九年）の七月には、二円四十銭と円が下落したのである。これは為替の不安定と為替の変動の激しさを物語っていると言われている。今日でも六ヶ月で一ドル四十円もの大きな差がある大きな変動をきたしているが、今の物価に考えると、昭和四年（一九二九年）頃の二十銭は今日の二百円に当たり、その上下差は実に大きな金額であったことがわかる。

### ドル買いを促した金解禁

国内の世論も、金解禁を迫り即時実施に傾いてきて、浜口内閣で大蔵大臣になった井上準之助氏は、政府が諸般の準備を整え、近き将来において金解禁を断行することを期す、と宣言をした。井上準之助氏は、日本銀行の出身であり、大正二年（一九一三年）には正金銀行の総裁、同八年（一九一九年）には日銀総裁、同十二年（一九二三年）の関東震災後の内閣で大蔵大臣をつとめた金融界の重鎮であった。

井上準之助大蔵大臣は、田中内閣から受け継いだ昭和四年度予算を組み換え、九千六百六十五万円の節約を行ない、更に昭和五年度には一億六千四百七十九万円を圧縮した大緊縮予算を組んだ。更に井上蔵相は、八千三百万円に減じていた在外の正貨を補充するために、横浜正金銀行の在外資産を買い上げた他、モルガン商会、ナショナルシティ銀行、ロスチャイルドなどに一億円のクレジットを設定した。こうした政府の動きによって日本の為

替は急速に回復し、昭和四年（一九二九年）の年末には平価に近づき、一ドル二円になったわけである。

政府はこれを見て、内外の準備全く成ったとして、十一月二十二日には「昭和五年（一九三〇年）一月十一日をもって金解禁を行なう」と発表した。

昭和五年（一九三〇年）一月十一日、予定通り金解禁が行なわれた。一般の市民がお札を持って銀行に行けばピカピカ光る金貨と交換してもらえることになったわけである。交換が停止されたのが大正六年（一九一七年）九月であったから、十三年ぶりに金本位制度に戻ったわけである。

この金解禁をもって世直しの政策とし、浜口雄幸首相並びに井上準之助大蔵大臣の手腕が大いに期待されたのであるが、結果は思っていたほどでなく、金解禁後まず起こったのは、金の激しい流出であった。解禁直後の一月二十八日にアメリカのナショナルシティ銀行が千二百万円の現送をしたのを初めに、内外の諸銀行が相次いで正貨現送を行なったため、解禁後わずか二ヶ月で一億二千万円の正貨流出が行なわれた。

昭和五年（一九三〇年）の下半期に入ると、ロンドン軍縮会議からんで、政局が不安となり、金流出に一層の拍車がかけられ、結局、昭和五年を通じて二億八千八百万円という巨額の金が流出してしまった。昭和六年（一九三一年）七月に、欧州に激しい金融恐慌が起こり、その後はアメリカの金融も切迫してきて、その結果、日本銀行の準備金は著しく減少し、九月には八億円にまで下ってしまった。これは、大正八年（一九一九年）以来の最低の記録であった。

やがて九月十八日には満州事変が起こり、次に、イギリスが金本位制から離脱し、日本の金再禁止も時間の問題となってきた。

こうしたことから、今度は猛烈なドル買いが起こり、金の輸出が禁止されれば、どうせ円の価値が下がるから

その前にドルを買って資産の安全を図ろう、という気持ちがある人々の間に強くなってきた。イギリスが金本位を停止した昭和六年（一九三一年）九月二十一日からわずか一週間で、二億円ものドル買いが行なわれたと言われていることから、いかにそれが激しいものであったかをうかがうことができる。

国内でも、ドル買いは国賊である、非国民だ、と言われるようになり、ドル買いの絵本山のように言われたのが三井財閥であった。昭和五年（一九三〇年）八月から昭和六年（一九三一年）十二月までの正金銀行のドル売却高七億六千万円のうち、三井銀行五千八百万円、三井物産四千万円、三井信託千三百万円のドル買いとなつてゐるが、一方、金を解禁しておきながら、ドル買いがいけないということは、誠におかしな話でもあったわけである。

このように金解禁は、はなはだ期待はずれの結果を生み、日本経済の国際的地位を強めるどころか、かえつて危機を大きくしてしまつたのである。国内では、かつて無い深刻な不況を呼び起こし、失業者も大幅に増大してしまつた。政府が金解禁に備えて、財政・金融両面から強いデフレ政策をとつたことも、物価の下落に拍車をかけたと言えよう。

そうしたことから、まず昭和五年（一九三〇年）三月には商品市場に大暴落が起こり、いよいよ物価下落がはつきりして、企業の先行きは暗澹たるものになつてくる。次に株式市場の崩壊が起こるに至つた。この三月から六月の暴落で、不況は第二期に入った。

こうした不況の中で国民生活は窮乏のどん底に突き落とされ、中小企業や商店は、不況に徹底的にたたきめられ、借金に追いまくられた。この不況の結果、労働争議が激化し、これに加え農民運動も激化し、世の中は騒然としてきたわけである。

## 軍縮會議

浜口内閣が經濟の面で大恐慌と取り組んでいる時、政治の面で直面した最大の問題は、ロンドン海軍條約問題であった。ロンドン會議は昭和五年（一九三〇年）一月二十一日から、英、米、日、仏、伊の五ヶ国を集めて、ロンドンのロイヤルギャラリーで開かれたが、この會議の主要議題は、巡洋艦、駆逐艦、潜水艦といった補助艦艇の制限と、一九二一年から三一年までのワシントン條約に基づく主力艦の建造休止期間の延長であった。つまり、これは第一次大戰後の軍縮の試みの一環をなすものであり、主力艦については、既にワシントン條約で一〇・一〇・六という英・米・日の比率が決っていたから、今度は補助艦艇についても制限しようという主旨のものであった。

この問題は既に昭和二年（一九二七年）六月ジュネーブで開かれた英米日の三国軍縮會議で取り上げられていたが、この會議は、八月に決裂に終わってしまった。すなわち、ロンドン會議は、その第二ラウンドであったわけである。日本の主席全權には、若槻札次郎が任命され、財部海軍大臣、松平恒雄駐在大使らがこれに加わった。この松平大使の令嬢が秩父宮妃殿下である。

ジュネーブ會議の時は、齋藤実大將が全權であったが、軍人の全權だと話がまとまりにくいというので、イギリスはマクドナルド首相、アメリカはスティームソン國務長官というように文官の全權が選ばれ、日本もこれにならったわけである。

この軍縮會議については、日本は初めからやっかいな国内事情を持っていた。もともと海軍はワシントン條約の対米六割という比率には大変な不満があり、七割の軍備がなければ太平洋の安全は保てないという主張を持っていた。そこで、今度こそ巡洋艦などについて、対米七割を維持し、別に潜水艦は日本独自で七万八千トンを持たなければならぬと強く主張して、あらかじめPRに馬力をかけていた。

しかし、日本政府は多少の譲歩をしてもこの会議は是非成功させようとしていた。それは、外務大臣幣原喜重郎の親英米外交からいっても当然のことであったが、さらにこれによって軍備の縮小を図り、緊縮財政の実を上げなければならなかったからである。

ロンドン会議は散々もめたが、三月半ばようやくぎりぎりの妥協案ができた。それは日本の補助艦隊全体を対米六・九七とし、大型巡洋艦を六割とする。但し、アメリカが一九三六年（昭和十一年）までに建造を控えることになり、それまでは七割を維持する。そして、潜水艦は五万二千トンで日米均等とする、というものであった。

これに対し財部海軍大臣は、もっとアメリカに譲歩させるべきだと主張したが、その見込みのないことを見た若槻主席全権はこれを政府に送り請訓の措置を取り、日本では海軍の加藤寛治軍令部長と末次信正軍令部次長はこれに強硬に反対し、これでは、対米国防の責任を負うことはできないと、強く主張した。もしもこれができなければ、会議を決裂すべきであるとも主張した。しかし、日本政府は軍縮を歓迎する世論を背景に強気に出て、結局、海軍軍令部の不満を抑えつけ、この案を受諾することに決定し、四月二十二日ロンドン海軍条約は正式な調印になったのである。

この条約の批准までには多くの紛糾した事態が起こり、ひいては軍部及び右翼の政府不信感を強めることになった。後で述べる、浜口雄幸総理に対する右翼のテロも、直接にはこういう不信感から出発したものであろう。

この調印の翌日から開かれた第五十八議會では、政友会はこの問題をさっそくとり上げ、政府を攻撃することによって、あわよくば倒閣に持ち込もうとした。その時政府攻撃に当たったのは鳩山一郎氏であり、彼は、国防計画は統帥権に属するものなのに、政府が軍令部の反対を押し切って調印したのは不当だという論法で政府に迫っ

た。鳩山一郎氏はこれを持ち出して政府を苦しめようとしたが、これはよく考えてみると議會人としての鳩山一郎氏にとつては自殺的行爲であつた。もともと統帥権の独立というものは、天皇の権限を強めるために設けられた制度だつたかもしれないが、それは軍部の独立性を強め、これを政府や議會のコントロールの外に置くことが大きな目的であつたらしい。従つて民主主義のたてまえから言えば、できる限り統帥権の範圍を小さく解釈し、そして政府や議會の権限を強くしなければならなかつたことになる。

この議會の攻撃については、与党が絶対多数であつたから、政府はともかく切り抜けることができたが、財部海軍大臣が帰国した五月十九日にはロンドン条約反対派の中心人物と見られた末次信正次長が辞めさせられ、加藤軍令部長は重責を負うことができないと辞表を奏呈した。

政府と海軍との間のいざこざは更に尾を引き、七月には海軍の軍事參議官會議で東郷元帥や伏見宮が財部海軍大臣を攻撃するなど、色々と波紋が広がつていつたわけである。さらに七月には樞密院に批准案がかけられたがこの時の調査委員長になつたのは伊東巳代治氏であり、樞密院と民政党とは台湾銀行事件以来仇敵の間柄だつたから、加藤寛治前軍令部長や政友会の面々は、ここで政府に一泡吹かせようと盛んに樞密院に働きかけ、伊東巳代治、並びに副議長である平沼騏一郎氏は大いに意気込んで浜口をいじめにかかつたわけである。

しかし、浜口首相は、樞密院の反対に対して非常に強い態度をとり、もしも樞密院が勝手なことを言うならば一戦をも辞さないという強硬な態度を一貫してつたが、この時の世論は、まず樞密院の横暴を憎み、その改革を考えていた西園寺公が強く政府を激励してゐたこともその一因であり、また、世論も概して政府に有利だつた。中でも、新聞がロンドン条約賛成に傾いてゐたし、樞密院に対する大新聞の攻撃は相当猛烈であり、特に東京日日新聞（現在の毎日新聞）では、丸山幹治氏が、もし樞密院が批准案を否決したら、政府は天皇に上奏して

聖断を仰ぐべしと、強硬に枢密院の反対に対抗したのもこの当時の特徴の一つであった。

伊東巳代治氏は、最後まで粘ったが、結局多数の枢密院議員が可決に傾いたので、十月一日、枢密院の本会議もこれを可決し、政府は十月二日、批准の手續をとったわけである。

## 昭和動乱の時代

### 軍部の隆盛と国民の窮乏

こうした軍部の隆盛とは裏腹に、国民は長引く不況にいためつけられていたのである。昭和二年には、不況のため知識人の失業者も多いことから、これを解決するために東京・本郷に知識階級職業紹介所が開設された。ちなみに、二年後の昭和四年の東大出の就職率はたったの三〇%であり、就職難で夢も希望もない世の中に対する大学生の気持ちから出たことばとして「大学は出たけれど」が流行したのもこの頃である。

また、不況の上にさらに冷害というダブルパンチを受けた昭和五年には、東北地方を中心に娘の身売りがあいつぎ、東京に市営の身売り相談所が設けられるほどであった。この年、第二回国勢調査とともに実施された失業者調査によれば、失業者の数は全国で三十二万二千五百二十七人と発表された。国民の窮乏は単に物質的なものにとどまらず、昭和三年の悪名高い治安維持法の成立や、昭和七年に特別高等警察部、いわゆる「特高」の設置を通じて、精神的な自由をも拘束されるに至ったのである。

一例として、昭和八年に、当時の文相鳩山一郎が京都帝国大学教授滝川幸辰の辞職を総長小西重直に要求した「滝川事件」を上げることができる。鳩山文相は、その根拠として、滝川教授の著書が共産主義的な内容を持つ

ているということを主張したが、これに対し、法学部長以下の教官全員が辞表を提出して抗議し、京大の学生はもちろん、全国の大学生もこれを支援したのである。しかし、文部省はこれを巧みに切り崩したのである。

昭和八年頃の世相を反映した出来事として、ヨーヨーの流行は今でも楽しい思い出である。大人も子供もヨーヨーを持って遊んでいる姿が、あちこちで見掛けられ、国会警備中の警官がこれをやり、退職させられるという事件も起きたほどである。

この年は『島の娘』や『東京音頭』といった流行歌がちまたに流れ、邦画では、『伊豆の踊子』（主演・大日方伝、田中絹代）や『丹下左膳』（主演・大河内伝次郎、山田五十鈴）が、洋画では『制服の処女』『巴里祭』『キング・コング』などがヒットしていたように思う。

また昭和八年（一九三三年）は、世界で大きな変化の起こった年でもあった。ドイツではヒトラーが首相となり、共産党弾圧を行ない、五月選挙で二八八議席を獲得し、ナチス独裁によるファシズム体制を確立し、国際連盟を脱退し、アメリカでは、大統領にルーズベルトが就任し、ニューディール政策を打ち出したのである。換言すれば、日本に丹下左膳、アメリカにキング・コング、ドイツにヒトラーが出現したのが昭和八年であった。

翌昭和九年（一九三四年）三月一日、満州国執政溥儀が皇帝に即位し、元号を康德と改めて、わが国の後見の下に独立し、帝政が実施され、翌昭和十年一月二十一日には北満州鉄道をソ連から満州国へ譲渡する協定が成立した。

この時、ソ連へ一億七千万円を満州国が支払い、その保証を日本がすることによって妥結をみたわけである。そして、三月二十三日には日満ソの三国間で協定が正式調印され、以後、第二次世界大戦が終わるまで、満鉄が満州国の委託の下に経営を続けることになったわけである。

## ファシズムの浸透

政府は、軍部や枢密院を押し切って、そしてロンドン条約の批准を達成したわけであるが、これは日本のデモクラシーにとって一つの大きなでき事であった。しかし反面、昭和五年（一九三〇年）十一月十四日、浜口首相は、岡山県下で行なわれていた陸軍の大演習を視察するため、午前九時発の、つばめに乗車直前の東京駅のプラットホームで、凶漢に襲われ、直ちに駅長室にかつき込まれ、東大病院に送られ、塩田広重博士の手で手術を受けたが、「男子の本懐である」という一言を残してこの世を去られたわけである。

浜口首相を撃った犯人は長崎県出身の愛国社社員佐郷屋留雄という二十三歳の青年であり、この愛国社というのは、陸軍と密接な関係のあった岩田愛之助を首領とする右翼団体で、右翼の巨頭頭山満の玄洋社の系統を引いていた。佐郷屋は逮捕された後、浜口が緊縮政策によって不景気を招き、社会を不安におとし入れたので暗殺を企てたのだと自供した。もしこの佐郷屋の事件に対し徹底的に背後関係が追求されていたならば、それからの右翼や青年将校の無謀な動きを未然にいくとめることができたかもしれないが、裁判所の追及は極めて甘く、故意にかばう傾向にあり、昭和十五年（一九四〇年）には仮出獄をし、第二次大戦の時には、井上日召らと愛国団を結成し、大手をふって活躍していたことは周知のところである。

ロンドン軍縮会議の後、議会では色々と泥試合が行なわれていたが、次第次第に軍部のファシストの動きが積極的になってきた。日本の右翼の運動は、明治十四年（一八八一年）の玄洋社や明治三十四年（一九〇一年）の黒竜会という古い歴史を持っているが、国内の改革を目指した右翼の運動が成長してきたのは、社会主義運動が活発になった時とほぼ時を同じくしている第一次大戦後のことであった。

即ち大正八年（一九一九年）八月に猶存社ができた。これは大川周明、満川亀太郎が計画し、それに北一輝が

仲間に加わり組織されたものである。北はその後二・二六事件に至るまで軍部のファシストの理論的指導者となり、日本の軍部のファシスト将校達の指導者であった。この北一輝の思想を青年将校に吹き込んだのが大川周明であり、小磯国昭、板垣征四郎、土肥原賢二、河本大作など、後の革新派軍人達も若い時から大川の友人であった。

こうした右翼思想が軍部に浸透しつつあった時に陸軍の内部では複雑な勢力分裂が行なわれていた。陸軍を長い間牛耳っていた長州は山県元帥が死んだ後、寺内正毅、田中義一が長州閥の代表として陸軍主流を治めていたが、その頃から反長州閥の上原元帥との間に大きな間隙が生じてきて、反長州閥が次第に力を得てきたわけである。この反長州閥運動は、真崎甚三郎、荒木貞夫などの反長州閥に加えて、中堅将校にもおよんできたわけである。代表的には永田鉄山、小畑敏四郎少佐などに東条英機も加えて、反長州派閥が次第に強くなってきたわけである。この中堅将校の長州閥排斥運動は陸軍内部の改革から、ひいては日本の改造へとつながる革新の要求を次第に強く含むようになってきたのである。

軍部の若手将校を中心とした革新熱が、次第次第に高まってきたわけであるが、この根底をなしたものは、日本および世界の情勢に対する危機意識と不満とが中心であったようである。政治的なものとしては、デモクラシーの勃興と社会主義勢力の発展と中国問題の激化と満蒙の危機がその主要なものであった。経済的なものとしては、一般的な不況の深刻化、特に農村不況の拡大が挙げられていたのである。

### 頻発するクーデター

昭和六年（一九三一年）の三月事件は大川周明らが参加したクーデターの計画である。

三月二十日に民間の右翼と無産政党を動員して一万人の大デモを議会にかけ、軍はそれに乗じて非常呼集をかけ、議事堂を包囲し、交通を遮断し、その後陸軍の代表として宇垣一成に大命を降下さ

せるという筋書であり、陸軍の内部ではこの計画は建川美次少将、二宮治秀中将、杉山元中将、小磯国昭少将によつて支持をされていたが、三月の中旬に突如宇垣氏の反対により中止を余儀なくされ、これによつて宇垣は、一度に全陸軍の信望を失つてしまった。

その後、昭和十二年（一九三七年）に宇垣一成に大命が降下した時、陸軍が強硬に反対して、ついに内閣を流産させてしまったことがあるが、この三月事件が糸を引いたのである。この三月事件の後で、満州事変が起きるわけであり、現地の板垣征四郎（関東軍高級参謀）や石原莞爾と東京の永田鉄山（陸軍省軍事課長、建川美次（参謀本部第一本部）などの陰謀によつて起こつたものだが、政府は、幣原喜重郎を中心として、極力その抑圧に向かった。

この幣原氏の不拡大、極地解決の方針に陸軍の急進派は不満を表わし、そこでまたもや三月事件同様、大川周明らと組んでクーデターを起こさせ、一挙に強力な内閣を實現しようとしたのが十月事件であつた。十月事件は三月事件よりずっと大がかりであり、決行の日を十月二十四日とし、陸軍の青年将校百四名が近衛、歩兵三連隊から十数中隊の兵を出動させ、そして首相官邸、警視庁、陸軍省参謀本部などを襲撃し、首相以下を惨殺しその他反対者を捕縛する。そして荒木貞夫中将に大命降下を要請するという計画であつた。

このように、直接に軍隊を動かして、要所を襲撃し、首相以下を暗殺するというクーデターは、実に、二・二六事件によく似た構想であつた。この十月事件は、三月事件の失敗に懲りて、主に佐官級中心の若手の連中で計画され、実行案が練られたものである。

## 五・一五事件

三月事件、十月事件といずれも不発に終わったので、軍部に任せることが困難であると考えた民間の右翼団体が、血盟団を結成し、血盟団事件へ発展していくのである。

血盟団事件の中心は、日蓮宗の僧侶である井上日召が中心であり、重臣、政界、財界の大物十三名を選んで一人一殺の暗殺係が付けられ、一挙に軍と協力して革命的手段をえらんだのが血盟団であり、その最初の犠牲者が井上準之助氏である。昭和七年二月九日に小沼正にピストルでそ撃され、その一ヶ月後の三月五日、三井の総帥である團琢磨氏がピストルで撃たれ、三月十五日、井上日召が自首し、他の一味も次々と逮捕され、事件は落着いた。一応主な者が逮捕され、終わったように見受けられたが、血盟団事件のような一人一殺方式に対し警視庁の警戒が嚴重になったので、再び集団によるテロが計画された。これが五・一五事件である。海軍士官、陸軍士官候補生、民間右翼から三十名ばかりが一団となり、四組に分け、首相官邸をはじめ主だった所を襲撃し、そして革命に移そうというのがねらいであった。

昭和七年（一九三二年）五月十五日、日曜日の夕方をねらって計画は実行に移され、首相官邸で大養首相が暗殺され、その他の目的はほぼ失敗に終わり、大養首相ただ一人が犠牲になられたのである。この後、二・二六事件が起きるまで、大きなクーデター計画やテロは起こらなかった。世の中が満州事変後戦時体制に入るにつれて、むしろ日本全体のファッショ化の勢いが強くなり、陸軍を中心に合法的な線に沿ってこれを推し進めていく動きの方が主流になってきたのである。

昭和九年、斎藤実内閣の後を受けて、海軍大将岡田啓介を首班とする岡田内閣が組閣されたが、この岡田内閣は、一方では議会の多数を占める政友会の協力を得られなかったということもあり、同内閣の下で軍部はますますその力を強大なものにしていった。しかし、陸軍内部は一つにまとまっていたというわけではなく、昭和初期以来皇道派と統制派の二大派閥の対立が続いていたのである。

両派の対立は昭和十年七月十六日の皇道派の総帥真崎教育総監の更迭で極に達し、一ヶ月後の八月十二日には

統制派の指導者永田軍務局長が皇道派の相沢三郎中佐に斬殺されるという事件にまで発展した。結局この派閥争いの結着は、翌昭和十一年二月二十六日のクーデター、いわゆる二・二六事件、まで待つはかなかつたのである。

前年十二月に、統制派の画策により、皇道派青年将校の拠点となっていた第一師団の満州派遣が発表されると皇道派青年将校は急ぎよ武裝蜂起を計画、二月二十六日早朝、国家改造を要求してクーデターを決行した。内大臣齋藤実、蔵相高橋是清らを殺害した彼らは、永田町一帯を占拠し、これに対し政府は、翌二十七日東京市に戒厳令を布告すると同時に、反乱軍に対して原隊への復帰を呼びかけた。「下士官兵に告ぐ」というビラがまかれ、西村茂アナウンサーが「兵に告ぐ、今からでも遅くはない」と名放送を行なったのはこのときである。この「今からでも遅くはない」ということは、当時かなり流行したものである。

昭和十二年、ファシズム化から第二次世界大戦までの過程を考える上で、二つの大事件が起きた。一つは七月七日の蘆溝橋事件の勃発であり、もう一つが日独伊防共協定の調印である。七月七日北京郊外の蘆溝橋での日中両軍の衝突は以後八年間にわたった日中戦争のはじまりであり、一方十一月六日に調印された日独伊防共協定はファシズム対反ファシズムの対決という陣形を明確にし、このまま第二次世界大戦へと展開していくのである。そして昭和十四年、国内では阿部信行内閣が成立した翌々日の九月一日、ヨーロッパでは、ドイツがポーランド進撃を開始し、遂に第二次世界大戦がはじまったのである。

### 日本のファシズム

このクーデターとテロの時代を通じて、日本で顕著に見られたファシズムの台頭は、ドイツやイタリアのそれに比べるとずいぶん異なった姿をとっている。ドイツのナチス党やイタリアのファシスト党といった強力な組織と国民的な政治運動があつたわけではなく、一部の中堅青年将校

とごく少数の民間右翼の運動があったにすぎない。国民の大多数はつんぼさじきに置かれており、そういう計画があったことさえ、長く知らされない場合が多かった。また、ここでは、クーデターはほとんど一つも成功をせず、その大部分は不発に終わっており、いくつかの個人的なテロが行なわれたにすぎなかった。

それにもかかわらず、こういうクーデター計画のおよぼした影響は極めて大きく、特に軍はこれを一つの有力な材料として政府に転換を迫り、次々とその発言力を強めていった。政界から社会主義陣営の一部までもが、これを契機に右翼化し、大勢に便乗していったからである。

しかし、軍にしたところで、統一した計画や見通しがあったわけではなく、自分が中心になって日本を率いていこうというほどの人物がいたわけではない。空想的な改革案をもって騒いで、上層部がそれに便乗して勢力の拡大をねらっているうちに、それが一つの方向として動き出したに過ぎない。はなはだ無責任な体制の中で、日本全体がその状況に流されていたのではなからうか。

次第に成長をとげ、やがて日本の歴史をおおう大暗雲となるファシズムは、どんな特徴を持っていたかを考えてみると、ファシズムの正体は何なのであろうか。なかなか一致した結論が出ていない。しかし、ファシズムと云うと、誰でも独裁的、反動的政治を思い浮かべるであろう。確かにファシズムの下においては、国民の民主主義的な権利や自由は極度に制限されるか、完全に奪われてしまう。議会などは有っても無いのと同然になり、ただ独裁者の演説に対して拍手を送るだけの機能しかはたせなくなる。法律もしばしば政府によってかかってに蹂躪されてしまうし、法律に変わって政府の出す命令の方が重要な役割りを果たすようになってくる。学問、思想、信仰、言論、集会などの自由は次々に否定され、人権さえしばしば全く軽視されるようになる。こういうのが、ファシズムの下においてわれわれが経験した事実ではなからうか。

イタリアのファシズムは一次大戦後すぐに現われて、日本やドイツのファシズムは世界恐慌後に顕著に現われてくる。日本のファシズムは、イデオロギーとして農本主義の色彩を強く持ち、右翼にしろ、社会ファシストにしろ、青年将校にしろ、農民層と深い結びつきを持っているが、ドイツやイタリアのファシズムは、厚い中産階級を背景に大きく勢力を伸ばしている。日本のファシズムは、ドイツ、イタリアのそれとは著しく異なる性質を持っており、日本のファシズムは本当の意味のファシズムではなかったとも言われている。日本の場合は、ドイツ、イタリアのように、ファシズムが一つの大衆的な政党運動として、従来の政治体制の外側から進出し、クーデターによってファシストが政権を奪取した後に強力な独裁制が敷かれるという形は見られない。日本では右翼の運動は少なく、微弱であり、とても選挙によって多数を取れるというようなものではなかったが、青年将校の運動とクーデターとによって、陸軍の首脳部を中心に重臣、内閣、議会といった天皇制の政治体制が、そのままファシショ化していく形で、ファシストの支配体制ができあがっていったのではなからうか。

#### 無責任体制

日本では、なぜこういう奇形な形でのファシズムが成功したのか。この間に正しく答えることは、不可能である。しかし、この時期の日本の歴史の中から、次の二つの事実を指摘することができるであろう。まず第一は、言うまでもなく、日本の民主主義の未発達ということであり、第二には日本の政治に特有な無責任体制の存在であろう。

第一の民主主義の未発達は、大正デモクラシー以降政党政治が発達し、明治憲法という枠があったが、その中である程度の民主主義の進展があったことは確かである。しかし、政党政治のしくみはあっても、国民が本当に政治を我がものと考え、議会や政府が本当に国民に対して責任を負う体制になっていたかどうかは疑問である。国民にとっては政治は依然としてお上のすることで、自分達とは関係のないものである。議会や政府は、重臣や

枢密院や軍部には気がねしたが、国民とは無関係なところで、少数の政治ボスのところでもて遊んでいたのだ。こういう中では、ファッションと言えども、大衆の基盤を持った運動として成立しようがない。むしろそれは日本の社会主義運動と同じように、少数の先覚者、エリートの特権的な運動にならざるを得なかったのである。

第二の無責任体制の背後には色々な問題があるが、日本では政治家だけでなく、役人でも実業家でも労働運動の指導者でも、自分は反対であつたけれども、みんながそう言うからやむを得ず賛成した、というような無責任な考え方が案外多いのではなからうか。こういう無責任を追求しないことが武士の情とも言われ、この無責任体制が次から次へと問題を起し、満州事変から日支事変、そして大東亜戦争にまで日本を導き、その戦争が終わり、ようやく民主主義が導入、成長、繁栄の道を歩んでいる今日でさえも、未だに政府、政治家、役人、実業家などの間で、この無責任な態度がなおも続いているということは、実に恐しいことではなからうか。

われわれが迎える一九八〇年代はいかなる年であるか、これを予測することは非常にむずかしい。しかし、この一九八〇年代の世界経済、日本経済などを予見するためには、現実を把握すると同時に、われわれが過ごしてきた過去すなわち歴史を忘れてはならない。歴史はくり返されるものであり、歴史を軽視する者は明日を見極めることはできないと思う。

例えば日本の自動車産業を考える場合も、自動車産業の過去の歴史を知らない者には、その明日を予見することは大変困難なことであると思う。日本の自動車産業の現況は偶然に、また偶発的にできたものではなく、長い歴史と先輩諸氏の汗と涙と努力によってできたものであることを忘れてはならない。同時に日本の自動車産業は日本経済の一部であり、日本経済は世界経済の一環であり、世界経済は国際情勢によって作られるものであるという私の基本的な考え方から、やはりその時代の基礎を作る日本経済、または国際経済というものを探究しなく

ては、将来の日本の自動車産業などは語れぬものであろう。

### 第一期自動車黄金時代

#### 米國車の日本進出

私は大正十三年に慶応義塾大学の幼稚舎（小学校）に入り、昭和四年に普通部（中学校）へ進み、同八年に大学予科へ進学し、同十四年に卒業したが、ちょうどこの大正末期から昭和初期にかけての時代は、自動車業界、特に國産自動車業界が発展の第一歩を踏み出した時代でもあった。

昭和初期の自動車業界を見ると、私が子供から大学生に成長した以上に大きく成長したのである。大正末期から昭和十年頃までは、何と言つてもわが國の第一期の自動車黄金時代である。この第一期の黄金時代が今日まで色々と変遷をしながら続いてきて、今日の基礎を作ったのである。

まず、フォード自動車が横浜・新子安に組み立て工場を設置し、その操業を開始すると、アメリカ・ゼネラルモーターズ社も、フォード社から遅れること約二年にして、日本ゼネラルモーターズ株式会社を昭和二年大阪に設立した。ここに凶らずも日本市場においてアメリカの二大メーカーが熾烈な販売競争を開始したわけである。

各県ごとにディーラーが設置され、いかなる土地に行つても、これらの輸入自動車の販売が盛んに行なわれており、逐年、その車輛は増加する傾向となったのである。すなわち、バスとトラックの営業車は、これら日本フォード社並びに日本ゼネラルモーターズ社の活発なセールス合戦の巻き添えを喰つて、互いに新車を購入し、しごきを削った戦いが始められ、タクシーなどは、各々新車を使って顧客の争奪を演じた。この新車のタクシーを五十銭銀貨一枚で一般大衆が使用することができるまで自動車は発展をしてきた。ちなみに、この頃のタクシー

は、ほとんど全車助手を使用し、客引きが助手の仕事であった。

### 国産車の誕生

大正期は、日本国内においても、国産自動車の製造を研究する会社が出はじめた時代であった。父が個人経営の輸入車販売会社梁瀬商会を創立したのが大正四年であるが、その後の大正五年から八年にかけては輸入車が順調な売れ行きを見せたので、梁瀬商会の業績も上昇を続け、国産車を製作してみたいという気運となったのである。

会社は呉服橋の本社（日本橋銭瓶町二番地）の隣りにあった空地約五百坪（現在の中央電話局のあるところ）を借用し、ここに仮工場を建設し、*「ヤナセ号」*という純国産車を作り始めたのが大正七年であった。この*「ヤナセ号」*の製作を通して、われわれは、非常に得がたい苦しい経験をするようになったのである。*「ヤナセ号」*は、米国製スクリスプース車をモデルにしたもので、フォードより少し小さく、今日のダットサンより少し大きい位の純国産自動車であった。*「ヤナセ号」*の製作を担当したのは尾花信氏と堀久氏と折橋勇治氏の三氏と聞いている。尾花信氏は、会社の尾花信和社友の殿父であり、浅草蔵前の東京高等工業学校（今の東京工業大学の前身）を金時計で卒業された秀才であり、当時、北海道室蘭の日本製鋼所の工場長をしておられたが、*「ヤナセ号」*製作にあたり、当社に常務取締役工務部長として招聘されたものである。

また、このときに同じ目的で入社したのが、仙台の東北帝国大学工学部の卒業生の堀久氏と折橋勇治氏であっ



昭和7年大阪乗合自動車に納入したレオ

た。堀氏は、この目的のためヨーロッパへ見学に行かされ、メルセデス・ベンツ、イスパノシーザーの工場をつぶさに見て歩き、特にヨーロッパの小型自動車の研究を終えて帰ってきたのである。その後、堀氏はヤナセを辞めてから名古屋の日本車輛製造株式会社、協同国産自動車株式会社と移られ、終戦後は独立して自動車精工株式会社を設立し、今なお会長として活躍されている。そして、この「ヤナセ号」の車体製作にあたったのが、田中常三郎氏（現日産自動車技術顧問）をはじめとする築地の東京市立工芸学校卒業生四名であった。

「ヤナセ号」は、国内の各専門メーカーによって製造された部品を当社が組み立てたものであった。まず、エンジン部門は、当時ディーゼルエンジンを研究中であった芝区（今の港区）三田の池貝鉄工所へ、各ギヤー類は本所区（今の台東区）の東京ギヤー製作所へ、ダイナモ、マグネット、その他の電気部品は池袋の沢藤電気製作所へ、電球、電球コード類は芝区御成門の北野電気商会（現在のスタンレー電気の前身）へそれぞれ発注した。

風防ガラスには輸入ガラスを使用し、西郷硝子店と高橋硝子店に発注した。ペーリング類は米国製を用い、タイヤは国産の横浜ゴム社製のものを使用した。

そして最終的に、車体（シャシー）は自家鍛工場にて野口秋次郎氏を主任として鍛造加工し、内張は自社の内張係の鶴原組、塗装は自社塗装係の山本善政氏が担当し、車室（ボディ）部分も自家工場が高木政二郎、川合仁作、山田卯助氏が中心となり製作されたのである。



大正11年ヤナセ号の試乗会

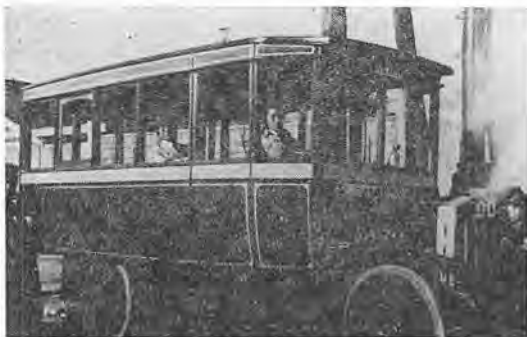
## 昭和初期の国産自動車業界

昭和二年石川島造船所は英ウーズレー自動車会社から同車の製作権を正式に譲渡

され、六気筒のトラックを完成し、車名を「隅田号」と命名した。同年四月大阪に日本ゼネラルモーターズ株式会社が設立され、続いて昭和四年にはダット自動車株式会社がダットサン小型自動車の製作の準備を始めたわけである。石川島造船所の自動車部が独立して株式会社石川島自動車製作所となったのが昭和四年の五月であった。

昭和五年十二月に、鉄道省が省営バスを開始するに際し、石川島製作の「隅田号」がこのバスとトラックに採用され、これが鉄道省が正式に認定したバスシャシーと指定されたのである。昭和六年二月十二日に、警視庁が初めてナンバープレートとテールランプの細則を改正し発表した。同じく昭和六年四月には自動車交通事業法が発令され、かつて日本ゼネラルモーターズ社が大阪に設立されたことよって、ゼネラルモーターズ社と一時縁を切っていた当社は、昭和六年四月に再びキャデラック並びにビュイック号の全日本販売権を手に戻すことができ、直ちに日本一円に販売を開始したのである。

昭和六年九月に「ダットサン」の試作車がようやく完成した。同じく昭和六年には川崎車輛株式会社が「六甲号」を試作し、その頃日本車輛株式会社も自動車の製造を開始すべく、試作車「熱田号」をつくり、そのため会社から堀久氏が日本車輛に移ったのである。当時の日本車輛の社長が、学生時代私の親友であった三瓶勇治君の



大正7年ヤナセ試作の東京市街自動車

父上三瓶勇佐氏であった。今日の日本車輛の社長天野春一氏は、私と幼稚舎からの同級生である。二年遅れて昭和八年には汽車製造株式会社が「筑波号」をわが国初めての前輪駆動式で製造したのである。

「ダットサン」の試作を終えたダット自動車製造株式会社は、石川島自動車製作所と合併して自動車工業株式会社となったのが昭和八年であった。なお、昭和八年には太田製作所の太田祐雄氏が「太田号」の小型四輪車の製作を開始したのである。

同年、豊田織機製作所は、シボレー号をモデルに「豊田号」の製造を開始したのである。この当時、自動車製造部門の仮称を豊田自動車工場とし、資本金一千二百万円、社長豊田利三郎氏、副社長豊田喜一郎氏で始めたのである。利三郎氏は、当時の三井物産の大番頭児玉一造氏の令弟で、豊田家に養子として入られた方であり、また、私の手を取って指導して下さった会社の故井上治一取締役とは神戸商大の同級生でもあった。そして、令兄の児玉一造氏は、三十歳台で三井物産の横浜支店長に就任された後、棉花部を独立し、東洋棉花株式会社を創立され、初代の社長に就任された。

同昭和八年、戸畑鑄物株式会社が自動車部を開設した。そしてこの戸畑鑄物自動車部を分割して新たに自動車製造株式会社を設立し、この自動車製造株式会社と戸畑鑄物の自動車部が再び合併して日本産業が資本金一千万円をもって日産自動車株式会社を設



大正8年ゴーハム式小型三輪車

設した。この当時、自動車製

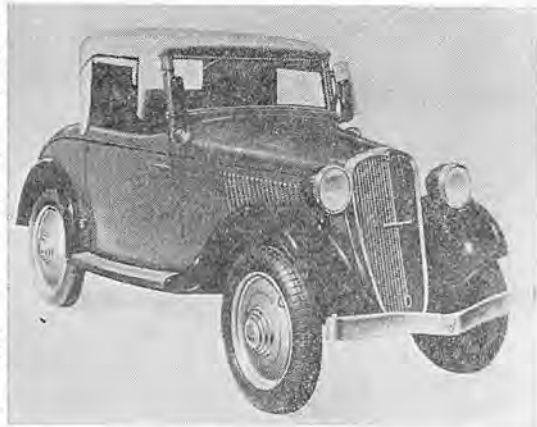
立したのが昭和八年十二月であった。なお、池貝鉄工所がディーズ  
ル自動車の試作車「池貝号」を試作したのもこの頃であり、間もな  
く「豊田号」の乗用車の試作車も完成した。

### 政府の保護

昭和十年、岡田内閣は閣議において自動車製造法  
案を制定した。同年十一月には豊田はトラックの  
試作車を完成し、盛大な披露会を行なった。また、昭和十一年には  
新潟鉄工所が「新潟ディーズル車」を試作し、国産車として日産並  
びに豊田の生産台数が次第に上るに従って、この国産自動車に対し  
て国家が強力な支持援助をするために、自動車製造事業法が制定さ  
れたのが昭和九年であった。

商工省は、従来市場を二分していたメーカーに対し、昭和九年八  
月以前の事業範囲を限定し、日本ゼネラルモーターズ株式会社が年  
間九千四百七十台、日本フォード株式会社が一万二千三百六十台、合計二万一千八百三十台とい  
う製作制限を制定した。これと同時に、日産、豊田は各六千台の生産計画を指示され、一年間の生産計画を約三万三千八百三十  
台にすべく、政府が強力な指導に乗り出した。その頃、三井物産株式会社は、小型自動車の「オオタ号」を制作  
している太田製作所を買収し、三井物産の最高幹部福井菊三郎氏の令息福井孝一氏がこの経営に当たった。そし  
て高速機関工業株式会社として、品川工場で「オオタ号」の生産を開始した。

自動車製造事業法が施行され、同時に日本自動車株式会社と豊田自動車工場は、この法律による許可会社とし



昭和11年頃のダットサン

て指定され、また、同年、東京自動車工業株式会社が創立された。これは、東京石川島造船所自動車部が改称したところの石川島自動車製作所が、自動車工業株式会社となり、東京瓦斯電気工業株式会社自動車部との合併により創立されたものである。

昭和十二年、ダットサントラック販売株式会社は日産自動車販売株式会社（社長・山本惣治氏）と改称し、日産ダットサンの一手販売会社となった。同年八月に豊田自動車工場は、豊田自動車工業株式会社として発足し、昭和十三年十一月に豊田自動車は、拳母の工場を完成させている。

昭和十六年四月、東京自動車工業株式会社は、ディーゼル自動車工業株式会社と社名を改め、同年九月には、ディーゼル自動車株式会社の日野製作所が完成した。同年十月六日、全国自動車修理加工業組合連合会が結成され、父が初代の会長に就任した。昭和十七年五月にディーゼル自動車日野製造所を別会社に分離し、これを日野重工業株式会社（社長・大久保正二氏）とし、ディーゼル自動車工業は自動車製造事業法による許可会社となった。これが今日のいすゞ自動車である。

わが国の自動車産業は、外国車一辺倒から国産車に対する保護政策が確立され、日本の政治の移り変わりと同じ歩調で変化をしたのである。

### 当時の世相

そのころ、日本の姿は日々軍国主義的な国に変化して行ったが、その背景を見ると、私が慶応大学の本科に入学した昭和十一年（一九三六年）頃は、まだまだ表面的には楽しいことがあった時代であった。

一月十三日に日劇ダンシングチームが初公演したり、二月五日名古屋鳴海球場で始めてのプロ野球、巨人軍対金鯱の試合が行なわれた。プロ野球で想い出すのは、確か昭和九年頃、慶応大学野球部の名投手宮武三郎氏を中

心にして、山下実一壘手等が参加し、横浜にパラマウントと言うプロチームが誕生したことである。何の関係かある日父が「横浜に職業野球団ができたので出資して株主になったよ」と私に語ったことがある。私の学生時代あれほど野球を嫌っていた父なのに、おかしなこともあるものよとあきれていたが、一つのチームではゲームもできず、一年もたないうちに消えてしまった。

昭和十一年六月三十日、落語家、講談師二百五十人が愛国演芸団を組織し、カーキ色の国民服と戦闘帽という制服を決定、着用し、八月一日にはベルリン・オリンピックが開催され、次期開催地が東京と決定した。また、十一月二十五日には、日本の運命を決定した日独防共協定が調印された。

翌昭和十二年（一九三七年）七月三日に、浅草に松竹の国際劇場が開場されたが、わずか数日後の七月七日に蘆溝橋で日支事変が勃発した。九月十一日には後楽園球場が開場されたかと思うと、東京市では出征将兵のマーチを留守宅の門口に付けるようになった。また十月十一日には、棉花の輸入制限が開始され、一切のぜいたく品の輸入が禁止された。アメリカ製乗用車の輸入販売も事実上この頃から禁止されたのである。

続いて昭和十三年（一九三八年）一月三日には、杉本良吉、岡田嘉子の二人が日本を逃げ出し、ソ連に入国して人々を驚かせた。そして、四月一日には国家総動員法が公布され、国民の自由は完全に奪われることになり、同月六日には電力の国家管理が実現し、灯火管制規則が実施された。また、十月二十七日には日本軍は武漢三鎮を占領し、町中戦勝気分でチヨーチン行列を行ない、劇場では観客全員が舞台の上で「万才、万才」と大喜びする光景も見られた。

こうした時期、会社は、本業のアメリカ製自動車の輸入販売がますます困難となってきたので、九州地区では「ダットサン」、東京地区では高速機関工業製の「オオタ号」の販売を始めた。このような社会情勢下に私は大

学を卒業し、梁瀬自動車株式会社芝浦工場に入社したのである。

私が入社した昭和十四年は、国民生活の上のしかかる戦争の重圧が目に見え、肌にししひしと感じ始めてきた年でもあった。働けるものは全て戦争遂行のために総動員するため、昭和十三年には国家総動員法が施行されたが、それでもなお戦力不充分と見た政府は、昭和十四年には、大学における軍事教練を必修科目にしてしまった。そしてついには、同年七月八日、白紙召集をもって、婦女子を含む多くの労働者を政府指定の軍需工場に徴用することができる、という国民徴用令をも公布したのである。

また、精神的にも、国民は多くの制約を加えられた。警視庁は、待合・料理屋などに午前〇時閉店を通過したり、学生の長髪を禁止したりして、国民の精神を統制していった。こうした戦時下、米・石油・マッチなどの物資も次々と統制され、同年六月には「電力を無駄に消費してはいかん」ということで、ネオンが全廃され、同じ理由から制約をうけた女性のパーマメントについては、「大和なでしこと言われる日本女性の黒髪を毛唐のようにちぢらせる必要はない」という考えも廃止の一つの理由であったと言われる。このように、この頃は「せいいたくは敵だ」という標語一色に塗りつぶされ、物資の不足した時代だったのである。

しかし、国民生活を本当におびやかしたのは物資の不足ではなく、物価の騰貴であった。それは賃金のそれらに比べてはるかに急激で、労働者の実質賃金は低下する一方で、生活に及ぼした影響は深刻であった。このため政府は同年十月二十日に物価統制令を施行した。ところが現実には、ストップしたのは賃金だけで、物価はストップしなかった。いや表面的にはストップしていたのであるが、その値段では買えず、物はすべて表から裏へまわってしまい、ヤミ値でなければ手に入らなくなってしまったのである。

## ヤナセの歴史 第二部

昭和十四年～昭和二十年 私の入社から社長就任まで

### 戦時体制への移行

#### 芝浦工場の想い出

昭和十四年三月、私は大学を卒業し、社会人となったわけである。当時は、今日の大学卒業生のように明日に対し、また将来に対し、胸のふくらむ希望もなければ、自分の人生に対する抱負もなかった。三月に卒業しても、五月に行なわれる徴兵検査のことで頭がいっぱいで、そしていつ戦場に送られるかという不安を胸に、眼の前真っ暗な状態で、社会人として第一歩を踏み出したのである。この時代の青年には将来の計画などもてるはずがなかった。この無計画性は、私の大きな欠点の一つとなり、生涯つきまとわれることになった。

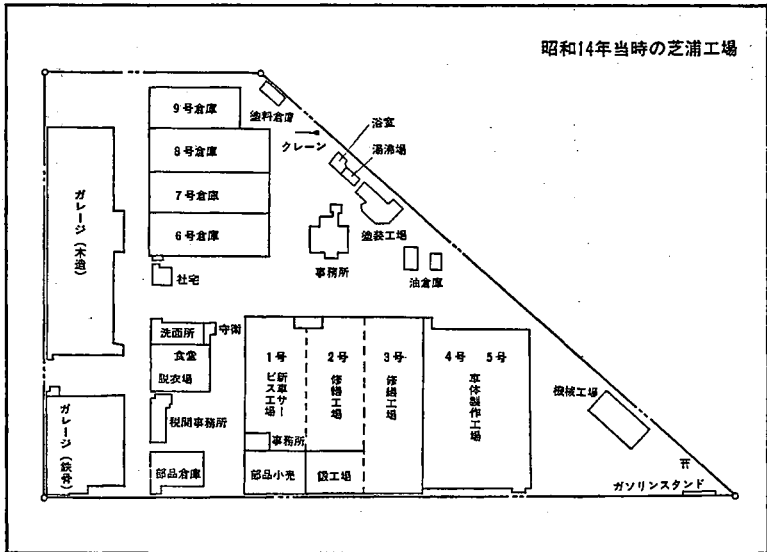
たしか三月二十四日であったと記憶しているが、初めて私が芝浦工場の見習社員として出社した日は、やはり緊張していたことを覚えている。当時の芝浦工場は、簡単な地図で示すと左図のようなものであったが、その建

物の古さ、工場の汚なさにはかなり驚いた。

私は庶務係に配属されることになったが、大学時代からの同級生で特に親しくしていた伊藤三郎氏は、日本橋本社の経理部に配属された。彼は学生時代番町の私の家にはほとんど寝泊まりし、父の覚えめでたく、大学を卒業後本社経理部に入社したのである。その時、もう一人同級生が入社した。それはT.C.J.の日比谷専務、ウェスタン自動車の津田取締役、株式会社梁栄の日比谷専務のいところであり、また私の家内のいところでもある日比谷五郎君であった。彼は梁瀬喜作氏の部下として、芝浦工場購買係に配属された。

昭和十四年頃の会社は、東京本店が日本橋通三丁目であり、総務部、企業部、経理部、自動車部、砥油部が日本橋の本社内であり、工務部だけが芝浦にあった。一方、地方は大阪支店が梅田、名古屋支店は千早町、福岡支店は薬院掘端にあり、その当時の社員数は、全国で一一九名であった。

当時、会社の本業であるゼネラルモーターズ車の輸入販売の仕事は、日本を覆う軍事色が強くなるにつれて、全く



途絶されてしまっていた。日本橋の本社は開店休業の状況を呈し、名古屋、大阪、福岡の三支店も自動車の修理加工というサービス工場関係の収益で細々と運営を続けなければならなくなった。従って、大阪、名古屋、福岡には、自動車の販売についての優秀な人材はむしろ不必要になったので、私は当時の社長（父）に強く要請し、大阪支店の取締役大阪支店長の早川吉治氏をぜひとも東京に招き、工務部の部長に迎えることを進言した。

それまでの長い間、昭和十四年まで、ほとんど工務には新しい人材の投入がされておらず、一年前に大阪から上野幹造、田村元伸、鴻農晋の三君を工務部へ迎え入れたばかりであるが、なお一層の工務部強化が必要であったわけである。大阪支店長を工務部長に迎え入れるということは、現在では何ら大きな驚きは感じられないだろうが、支店長の転勤というものは従来ほとんどなかったもので、当時の会社としては大変な驚きであったらしい。工務部に刷新の空気が流入してきた。当時は本支店間の人事の交流も非常に少なく、福岡支店長の中山信市氏、並びに岩永政定氏などは生涯福岡支店勤務であった。

早川吉治氏は私の強い懇請を快く聞き入れて、東京へ移られ、そして工務部長を引き受けてくださった。長い間工務部には人事の交流が無かったため、一つの新風が加えられた。そして同時に車体製造専門の高浜工場が竣工をしたので、工務部が芝浦工場と高浜工場に分離した。工務部高浜工場の工場長に梁瀬喜作氏が就任し、芝浦工場と高浜工場が機械関係と車体関係に分離し、新たに発足することになったわけである。

この頃の職員宿所録（昭和十四年十二月十五日現在）に、天然瓦斯自動車掛として初めて私の名前が載せられている。そして、それまで工員扱いであった市来宗男氏も、天然瓦斯自動車掛として、職員に抜てきされたわけである。

昭和十四年、私が入社した時の役員及び職員は次の通りであった。



機械油販売係	洞 達男	購買係	田村仁三郎	嘱託	宇都宮甚之助
同	宮地 正徳	応召中	野坂 光雄	同	岩見四郎次
応召中	池田 豪夫	車室係	山吉 健一	◎大阪支店	支店長 早川 吉治
モービル油販売係	田中米二郎	工作係	若山 林蔵	支店長代理	中村種太郎
総務係	島田 開吉	庶務係	星野 勇	砥油係主任	松本 慶弘
応召中	高城弥太郎	部分品係	大井 寿郎	自動車係	板橋 誠一
モービル油販売員	湯川 滋	計算係	山本 康平	庶務勘定係主任	佐々木三郎
○工務部 部長(嘱託)	丸山代重郎	工作係	小林長三郎	砥油係	三輪 高雄
庶務、購買係主任	梁瀬 喜作	検査係	市来 宗男	庶務勘定係	松浦 種雄
車室係	依田 素	倉庫係	阿部 一馬	車輛係	鈴木 敏彦
技術長心得	河村巳之助	修繕見積係	宇田川賢吉	倉庫係	水野 由彦
車室見積係	上野 幹造	購買係	平山 大和	自動車係	伊藤 好雄
修繕係・車台係国産自動車		計算係	高橋 守郎	砥油係	宇都宮 豊
研究係主任	富沢 又次	見習	渋井 裕士	砥油係	神野 知礼
修繕見積係主任	星野 二郎	同	岡田 桂次	用品係	神戸 良三
計算係主任	熊倉 文彦	同	程野 準一	見習	藤井 勝利
部分品係主任	田島要次郎	嘱託	高野 清平	嘱託	小松 徳松
庶務係	鴻農 晋	同	関根 喬人	同	熊野 喜一

同	永野 種二	販売係兼磁油係	福島 利夫	ダットサン係	小畑 利夫
同	坂本鎌重郎	庶務勘定係	菅谷 彰	庶務勘定係	田中 福市
同	山本伊三郎	嘱託	笹井義一郎	庶務勘定係	坂本 什
同	岸本 政夫	◎福岡支店 支店長	中山 信市	見習	市川 秀男
同	猪木 義章	支店長代理	吉本辰次郎	同	許斐 龜
◎名古屋支店支店長	花岡 条吉	磁油係主任	江頭 鉄二	同	桃崎 資夫
用品係兼工場係	祖父江鉄雄	販売係兼工場係主任	岩永 政定	嘱託	山津 善市

代用燃料自動車係

世相はますます戦時色が濃くなり、石油の統制は日を追ってきびしくなってきた。バス、トラックは薪で走るように研究され、タクシーは木炭自動車を使用するようになっていった。そして、一台一台が背中（後部のトランク）に燃料釜をかついで走ることとなった。この木炭や薪を確保するために、京都をはじめ関西、北陸の山を買い求め、この山で成功し、日本屈指の山林王資産家になったのが、大阪相互タクシーの多田清社長である。実にすばらしい先見の明であった。

昭和十四年七月、正社員になった頃、ある日、本社の社長室に呼び出された。どうせ怒られることと腹を決めて日本橋へ出頭したところ、庶務係から新しい仕事、すなわち代用燃料自動車係を命ぜられた。主任には田村仁三郎氏を置き、その下で研究・製造・販売をすべてお前一人でやれとのことであった。

既に、芝浦工場内では市来宗男氏を中心とした木炭自動車を研究するグループができていたので、このグループに併せて統合することとなった。市来氏は、現場育ちで職人気質丸出しの気性の荒い技術者であった。少して

も氣に入らぬと酒に酔い、幾日も会社に顔を見せなくなる。その下で助手役の佐内政男氏は、丸坊主のすごい面構えで、市来氏に輪をかけたやくざエンジンニアで、けんか早く、大変なおじさんであった。この二人を気持ち良く働かせることは、学校出たての私にとっては大変な大役であった。しかし、二人とも私に対しては本当に協力的であったことは、幸いであった。酒好きで職人気質の技術者の市来氏は、気が向き、アイデアが出てくると、キャバレーの床の上に座って図面を描き始めるなど、今日でも想い出はたくさんある。

### 本社への隷屬意識

当時、工務部（芝浦工場内）全員は、次第に日本が戦時色を深める中で、会社の本業である外国自動車の輸入販売業務の縮少、減速状況を肌身に強く感じていたので、部内には「今後我々はどうなるのであろう」という暗い空気が蔓延していた。「これからは自動車の輸入販売に頼らず、我々の力で会社全体を背負って立とう」という気構えなどは全く見られなかった。長い間本社に隷屬していたため、付屬物として、利益を上げる、または利益確保に対する責任ある企業意識などは全く植えつけられていなかった。しかし、長い間その環境下で辛抱強く、黙々と働いている人々の中には、実にいい人が多かった。

新台係（ニューカー）の新車整備を取り扱っていた高野清平老（長男高野良平君は父の跡を継ぎ、フォルクスワーゲン新車整備係として、横浜デポで今日もなお親子二代の勤めをしてくれている）は大正五年入社以来一日の欠勤もなく几帳面な仕事、正確無比な事務などで高く評価されていた。朝は誰よりも早く、夜は誰よりも遅くまで、黙々と働いていた姿は、若い見習社員の眼から見ても、頭の下がる思いがした。

その下に、技術員として優れた腕前を持っていた多田晋三君、岡幸一君（戦後会社を辞めた後独立し、群馬県倉ヶ野で修理工場を開業、今なお健在の様子である）がいた。修繕係の責任者は関地良胤氏で、関地氏は高野老とは全く異なったタイプの好人物、善意のかたまりのような正直かつ誠実の人であった。その下に出端伊佐雄君、

目崎時次君、吉村実君、山口藤吉君などが中堅で、若手には大竹芳二君、鈴木善一君、夏目明君、西倉吉君、市川喜一郎君（現在東京支店車体管理部在職）などがいた。また、修理用の部品を製作していた製作係（機械工作係）には木所善助職長をはじめ、江田錦三君、五十嵐文治君、斎藤喜作君などが中堅工具として働いていた。その下の若手に鳥海秀一君、吉田健一君、速水文雄君などがいた。

なお、鍛工係として野口秋次郎氏が職長を務め、その下に山形丑松という、腕のいい本当の職人らしい職人さんがいた。この山形君は、会社の創立四十周年の祝賀会が椿山荘で行なわれたとき、あまりの嬉しさか、祝い酒が過ぎ、帰り道でバスにひかれて亡くなられてしまったが、いずれも在職二十年以上、会社創立以来の勤続者ばかりであった。

#### 工務部の人々

彼らは善意と、古い日本人の良い面だけを持ち合わせたような、良い人達であった。眼をつぶると高野さん、関地さん、野口さん、木所さん達の顔がはつきり浮かんでくる。

工務部（芝浦工場）の事務所は、梁瀬喜作氏の独壇場であった。本社とのパイプは彼一本であったので、全員が一目も二目も置いていた。車体係の依田素氏は、おとなしい神経質な紳士であった。河村巳之助氏は、全く自分の仕事にのみ熱中するタイプで、他との協力は苦手であった。上野幹造氏は大阪から転動してきたばかりで、車体製作の部門を梁瀬喜作氏の下で勉強中であった。修繕係主任の星野二郎氏は、あだ名が、ラッパで、大きな声の持ち主で、現場の連中を大声で叱咤激励していた。計算係主任熊倉文彦氏は、慶応商工部の卒業生、神経質の代表者の如く喜怒哀楽七面鳥の如く変わり、怒り始めると口汚なく部下を長時間にわたってののしるなど、私にとって最もにが手な一人であった。田島要次郎さんは、現在と全く変わらない温厚な人物で、見習社員に比べて一つの大きなよりどころであった。

これから先いよいよ戦争に突入する時点で、野坂、田島、田村の三幕僚時代が始まるのであるが、田島氏は見習社員を暖かい気持ちで迎えてくれた。私の直属の親分、庶務係の鴻農晋氏は上野氏とともに大阪支店からの転勤組、珠算の早いのに先ず驚いた。字も早く、きれいなところが社長の父の気に入られたらしい。当たらず触らず、大変な厄介者を預ったという感じが私にもはっきりわかる位の正直な人だった。彼は私の入社早々、野球の試合で足を折り入院されたので、庶務の仕事は何もわからぬ見習員の私一人。おかげで、当って砕けるで仕事の実務を覚えることができた。

入院中の鴻農氏の月給を、四月二十五日に奥さんに届けてあげようとしたところ、工務部長として大阪支店長から転任された早川吉治部長に、頭から叱られた。「苦勞無しの坊ちゃんにはわからないだろうが、月給というものは、正直に女房に言っている人もいるし、言っていない人もいる。届けてあげる親切心が家庭争議を起こさせないとは言えない。おやめなさい。必要だと思うなら、その中の半分位を届けてあげなさい」と。私はなるほど大人とは難しいものよ、と驚いたものである。

富沢又次氏は、兄(富沢喜一氏)が中島飛行機の取締役総務部長で、父と同じ群馬県人である母の義弟の丸山代重郎氏の甥にあたり、根っからの技術屋さんであった。戦時色が濃くなり、国産車メーカーに移りたい気持ちが出はつきり顔に出ているように思う。田村仁三郎氏も上野、鴻農両氏とともに、大阪支店より転勤してきた生粋の大阪商人である。本社、工務部に全く見られないほどの商売人で、頭の回転と身のこなしの早さに驚いた。なり振り構わぬタイプで、自ら手を汚し、命令するとただちに自分も協力するタイプであった。笑うと実に可愛い顔になるが、口だけは常に辛らつであった。見習の私には実に親切に色々と教えてくれたものだった。

工務部の中で、唯一の大学出の実力者で、花形社員であったのは、野坂光雄氏であった。彼はちやうど昭和十

四年に陸軍に応召され、自動車関係の仕事に携わっていたので、陸軍少尉の軍服姿でよく芝浦工場に顔を出していた。づけづけものを言うことが好きらしく、大きな声で「貴公ら、何をしてるか」とよくどなられたのを覚えている。彼は当時、社内でも若手将校であり、私にとっては可愛い兄貴のような存在であった。また、その当時、守衛に岩見四郎次と言う人がいた。この人は海軍の下士官上がりで、美髯をたくわえ、常に日本海軍気質を持ち続けた実に立派な守衛さんであったことを、いまだに記憶している。若い工員諸君、特に鳥海秀一君などはよくどなられていたものである。

### ボディ製作

会社はこの時期から、ボディ製作と天然瓦斯自動車の開発を主体に、戦時下を生きることになる。会社は、父が日比谷に梁瀬商会を設立した時から、馬車製作の職人と工夫を重ね、ビュイック号の車室の製造に取りかかり、大正七年にはクライスデル車の乗合自動車五十台の車室の架装・製作に成功し、東京市街乗合自動車株式会社(青バスの前身で現在の東急バス)に納め、純国産自動車「ヤナセ号」の車室の製作に成功した実績がある。

さらに大正八年日本陸軍がシベリア出兵を行なったとき、輜重部隊が初めて自動車を採用し、会社は、ビュイック幌型車(一九二〇年型)数百台を納入している。当時博多支店から転動してきた市来宗男氏は、ビュイック自動車の操縦運転指導兵として、大正九年十二月シベリアに出征し、大正十一年に帰京した。

従来、ビュイックの箱型(リムジン)は、シャシーを輸入して、それに馬車職人などを用い、ボディを製作してシャシーに乗せていたが、陸軍のシベリア出兵を契機として、幌型ボディの国産化の研究が始まった。

大正十二年九月、関東大震災後も幌型車の製作が一般化され、芝浦二丁目にあった脇田自動車株式会社(後の帝国自動車株式会社)にビュイックの幌型を発注し、多量に製作をさせ、またシボレーのトラックなども多量に

発注し、生産を依頼した。

当時ボディー製造業者はその数も少なく、日本自動車株式会社と小柴自動車（馬車屋）それに梁瀬自動車株式会社の三社のみであったと記憶している。梁瀬自動車、日本自動車でボディー製作に従事した職人が、大正十二年以後、独立して次々と工場を設け、自動車の車体製造業者は次第に多くなってきた。これが俗に自動車業界で言われる「ボディー屋」である。脇田自動車、信濃自動車、目黒ボディー、倉田ボディー、藤永田ボディー、日本車輛ボディー部、後藤ボディーなどである。その当時シボレーのトラックは、シャシー一台二千七百円で、三方開きのボディーがついて一台三千円であったから、ボディー代はわずか三百円であったわけである。

昭和八年頃から日産自動車がダットサン自動車を作り始め、当社はボディーの試作を受注し、毎月約八十台を納めるようになった。日産自動車が多量生産に乗り出すようになってから、当社には、プレス機械などの設備が無かったため、ほとんどが手製（ハンドメイク）に頼らざるを得ないありさまで、多量生産の受注は不可能であったので、高速自動車「オオタ号」の乗用車、トラックのボディー製作に乗り換えた。と同時に、シボレートラックのシャシーにのせる乗合自動車（バス）のボディー並びに特種ボディーの製作に着手した。

昭和十二年、十三年頃には日本内燃機株式会社の専務取締役であった蒔田鉄



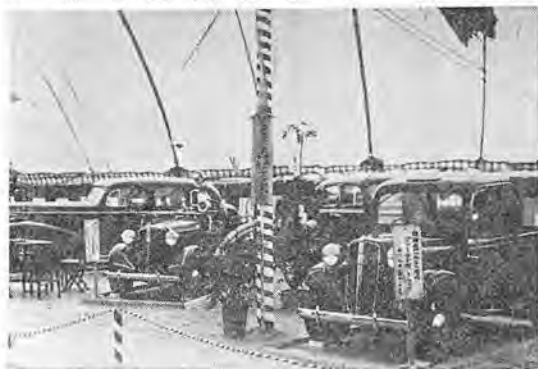
満州事变当時陸軍に納入されたビュック幌型車

次氏からボディ製作の話があり会社はこれらの製作を多量に引き受けることにした。日本内燃機株式会社が製作した四輪駆動軽自動車に載せるボディであった。

### 軍需特殊ボディ

次第に軍事色が強くなる自動車業界において、陸海軍の航行本部の特種ボディの注文にも応じて、仕事がいくらでもあるような忙しい状態になった。特種ボディの主な物は、病院車、X光線車、患者輸送車、工作車などであった。また、会社が販売権を持って販売を続けていたレオ自動車に、消防ポンプ機械を搭載したボディを製作し、ポンプの製作は市原ポンプ製作所に一任していた。さらに、三井物産株式会社から陸海軍に納入する探照燈搭載自動車の架装工事を、蒲田の東京計器株式会社を経て受注したなど、特種ボディの受注がますます増加の傾向をたどり、この種の仕事は非常に多忙をきわめてきた。

昭和十三年頃までは芝浦工場内の一部（第四号工場と付属家屋合計三百四十坪の工場）で陸海軍航空本部へ納入する貨物車の特種ボディ、患者輸送車、レントゲン車、魚雷水雷搭載車を主に生産していたが、芝浦工場内の第一号、第二号、第三号工場内で行なっていた諸官庁及び民間の乗用車の大小修理工場としての作業もまた同時に多忙をきわめた。そのため民間の自動車の修理と、陸海軍の特殊車体の製造が同一工場内で行なわれているということは、軍の秘密保持ができないという理由で、他に是非とも特殊車体専門の独立工場を持たない限り、陸海軍の仕事を直接受注できない



福岡支店の37年型ビュックおよびダットサン展示会

いような状態になってきた。その頃、室蘭の日本製鋼所から水陸両用のキャタピラ戦車の試作注文を得て試作中、その試作と民間の自動車の修理を同時に行なっているというために、軍の機密が保持できないという理由で、注文を取り消されるという苦い経験もあった。

民間の仕事がますます風雲急を告げていた時代のため、先細りの状態であり、陸海軍の仕事をもらわなければ工場が成り立たない状態であった。そのためには、陸海軍の専属工場を建設する以外に方法はなく、工場建設に必要な敷地を懸命に物色し始めた。

### 高浜工場

ちょうどその頃（昭和十三年）品川駅裏の土地約九千坪売却の話があったが、われわれがこの九千坪の土地の売却計画を知った時には、沖電気の海野氏が落札して手に収めた後であった。これが今の品川駅裏の沖電気の土地である。

それと前後して、芝浦一丁目の町内の顔役で鉄工場を経営していた相馬吉太郎氏から「東京市港湾部では近々に高浜町六番地のゴルフ練習場の土地約一万三千坪を払い下げるであろう」という情報を得たので、至急に調査をした結果、このゴルフ練習場は東京市の市会議員で、当時の実力者三木武吉氏がこの土地を東京市より借り受けて、ゴルフの練習場として経営していることがわかった。直ちに父は三木武吉氏に面談し、単独入札の了解を得、支払条件は五年年賦で入札の保証金は三万円を積み立てれば入札の資格を得ることが判明した。この交渉に当たったのが梁瀬喜作氏であり、当日保証金三万円を工面し、芝浦海岸にあった入札場に出頭した。

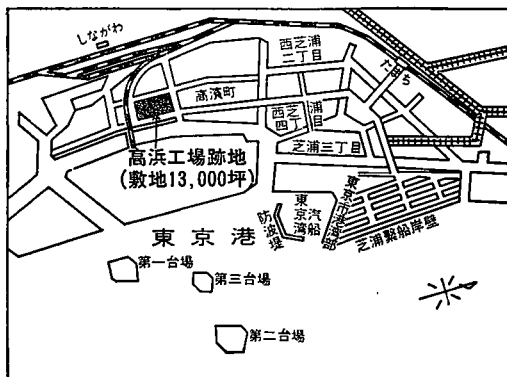
当時車体製作のボディ―製作事業の担当者であった梁瀬喜作氏は、民間工場と分離をしなければ陸海軍からの発注がもらえないという問題のため、どうしても新しい軍需用の工場を作るための土地が必要であると痛感していた。その当時の情報で、入札者は一人であったはずであったが、入札場に行ってみるともう一人の入札者がい

たのに、梁瀬喜作氏はまず驚いた。この人は自動車のブローカーであり、また待合の主人でもあった田中義啓という人であった。田中氏に内情を聞いてみると、彼の経営している待合のお客で、信州の尾沢という人の依頼で代理人札に来たらしい。この入札条件が三年年賦で、一坪当たり四十七円で入札することになっているというのとまで聞き出した。世の中は実に狭いものであり、この信州の尾沢という人はその当時は全くの未知の人であったが、今日では私のすぐ下の妹の尾沢明子の主人故尾沢金蔵君の兄の尾沢金一氏であった。

入札時間は午前十一時であり、このような競争相手が出現したことを社長に連絡の取れない梁瀬喜作氏としては、全く独断で、支払条件を即金に改め、一坪当たり四十八円で入札した。その結果、父梁瀬長太郎に落札と読み上げられ、その土地代金総額六十二万四千円を即金として支払わざるを得なくなった。五年年賦の支払条件が水泡に帰し、一坪当りの単価が大幅に値上りをしたことよって、梁瀬喜作氏はこれを父に何と報告すべきか、非常な苦境に立たされたわけである。その当時の六十万円は今では想像できぬほどの大金であり、即金で支払うことを考えていなかったのに、当然資金手当をしていなかったことから、父は非常に激怒した。

この土地は品川駅の裏駅に当たり、沖電気工業の前のほぼ正方形の土地であり、誠に得がたい土地であったが、父は「いくら土地が欲しいからと言っても、六十万円の金ができなければ保証金の三万円が流れて丸損になってしまう。大変なことをしてくれた。バカもほどほどにしろ」と梁瀬喜

高浜工場の位置



作氏を叱つたらしい。

ところで、この四十八円で入札した土地がどの位の時価評価かと、日本勸業銀行を訪問し問いあわせた結果、時価坪当たり百円位であろうとの話を聞き、梁瀬喜作氏は少しは安心し、落ち着きを取り戻したが、その数日後一万三千坪入札した土地の半分、六千五百坪を分割して欲しいという希望者が現われた。渡りに舟と六千五百坪を落札時の二倍以上の単価、すなわち百円で譲渡する話がまとまった。このおかげで、土地代金全額を即金で支払える見通しがついたので父（社長）のご機嫌は手のひらを返すように良くなり、数日前バカ野郎呼ばわりをされた梁瀬喜作氏も、「二十万円を出資するから君の希望通りの設計で高浜工場を造つてよろしい。また、君を工場長にし、陸海軍の特種ボディーの注文をとって仕事をやってみるよう」と、そしてさらに「この土地を手に入ってきた褒美として、株を百株与えて株主にしてあげよう」と父に言われ、面目が立ち、ここで梁瀬喜作氏も工場長として、軍需むけの高浜工場の発足に努力を始めたわけである。

そこで梁瀬喜作氏は、桑原政次郎棟梁に高浜工場設計画を依頼し、間口八間奥行き二十五間の中央に柱のない二百坪の工場を十棟、延べ二千坪の工場並びに厚生施設として風呂場、更衣場並びに食堂を建設した。当時の建設費は坪当たり八十円であり、工場の建設費は父（社長）から了解を得た二十万円以内の総額十六万円で完成をし、このボディー工場に必要な木工機械・鋸金・塗装・内張り、鍛鋼等の諸機械を購入し、準備万端整え、そして大阪支店から移った上野幹造氏を営業の最高責任者とし、梁瀬喜作氏の右腕として、昭和十四年六月十四日高浜工場が発足したのである。その結果芝浦工場の第四工場ボディーを作っていた人々、木工・鋸金・塗装・内張り・鉄鋼・巖装・鍛鋼・鉄骨などの人々は全て高浜工場に移り、その下に下請け制度を設け、いくつかの組に分けて、受注分に応じて臨時に工員を募集する体制をとり、高浜工場は陸海軍航空本部の専属の特種車輛のボ

ディー工場となったのである。

### その後の高浜工場

この高浜工場は、昭和二十年の終戦によって占領軍のパンの生産工場となり、東京の進駐軍軍人のパンは、全てこの高浜工場で製造され、配給されたわけである。

終戦後、日本橋本社を接収され、芝浦工場も接収された会社は高浜工場の事務所に本社を一時移し、高浜工場の事務所で戦後の諸準備を行なったものである。昭和四十年会社の創立五十周年に当たって、この高浜工場を、私が当時のソニーの井深社長にお願いし、ソニーに買い上げていただいた資金約十億円で、芝浦本社の建物を建築したものである。井深社長に、高浜工場をソニーのサービス工場として買って頂くことを、ゴルフ場のお風呂の中でお願いしたのを覚えている。

その時、五十周年記念の本社の建設費約十億円を借用した日本勧業銀行の芝支店長が乗杉恒氏（現相談役）であったのである。十億円を、高浜工場が売却できたら返済する約束で借用したが、売却がちょうど十億円になるまで返済を待ってくれた。その厚意は今でも感謝している。毎年毎年インフレで、土地価格が高騰する時代の話である。その後、ソニーに工場を売却し、十億円を返済することができたわけである。

今ではこの高浜工場はソニーのサービス工場として非常に重要な役割を果たしているが、あの前の道を通るたびに、高浜工場を購入し、売り渡した時のことなどを想い出して、懐かしさが一杯である。私の子供の頃は、高浜工場のあの辺一帯がすすきの原であったので、お団子などを作り、家族揃って高浜工場にお月見のドライブに行ったものである。時代の移り変わりの激しさ、大きさに唯々感無量なものがある。

昭和十四年六月十四日、高浜工場が新発足し、両方の工務部長として早川吉次氏が統帥し、芝浦工場は、工務部のスターであった野坂光雄氏が応召中のことでもあり、田村仁三郎、田島要次郎と私の三人が工場の中心的な

動きをするようになり、高浜工場は梁瀬喜作工場長、営業担当の上野幹造氏、そして私と同時に入社した学友の日比谷五郎君が梁瀬喜作工場長と共に働き、大きく貢献したものである。

高浜工場が新発足すると同時に、芝浦工場も高浜新工場に負けじと天然瓦斯自動車の器具製造・販売と取り付けに重点を置き、陸海軍を中心とした自動車の修理・加工の仕事にも重点を置いて忙しく毎日を過した。

### 品川駅地下道

高浜工場は昭和十四年に発足したが、品川駅の裏口には道が全く無く、田町駅から品川駅の裏口の高浜工場まで毎朝、毎夕、徒歩で通勤すると朝四十分、帰り四十分は歩かなければならなかった。

昭和十六年十二月八日、日本が英米に宣戦を布告し、太平洋戦争が始まってから、労働力は軍に取られ、軍需工場と言えども、労働力不足のため、学徒動員による若年労働者の労働力に頼る他には道がなかった。高浜工場でも聖心女子学院をはじめ色々な女学生の学徒の力によって労働力不足を補充することになったが、田町の裏駅から歩くということでは勤労者がいかにも集めにくかったので、裏の沖電気株式会社、隣りの友野鉄工場、前の芝浦シャリング、理研工業株式会社など、高浜工場周辺の地元企業が協議し、品川の駅から品川駅裏を通じて高浜町へ達する地下道を作ることを申請し、地元有志六社が三十万円を出資し、工事を開始した。昭和十八年にこのトンネル工事が完成し、これによって品川駅のプラットホームから裏口へ歩いて出られるようになった。

しかしこのトンネルも電灯は無く、天井は低く、立ったまま歩けば頭をぶつける程度の低いものであり、足場は、泥の上に水が溜り、腰をかがめて約十分真っ暗なトンネルを歩いてようやく高浜町に出たが、これでも田町駅から四十分かかって歩くことに比べれば、遙かに楽なことであった。こうしてわれわれの力で品川駅地下道ができ、これが高浜工場地元の発展に非常に大きく貢献したということについて、現在の高浜近辺の人々から忘れ

られているのは、残念なことである。

### 苦心三炭時代

昭和十四年十二月頃には、工務部の芝浦工場も次第に有能な士が集まってきて、しっかりとしたチームワークで動き始めた。

中でも戦争中から戦後へかけて、芝浦工場の庶務係として、または人事係として、現場の工員の掌握並びに教育にあたったのが故土屋庄之助君ではなかったかと思う。また、入社する小学校出の子供の教育のために、囑託として故煤賀（すが）儀八郎氏が入社され、毎日通勤され、工員の子供達の教育にあたっておられた。非常に闊達なまたおもしろい人柄で、昔は小学校の校長先生をされており、円満な人格で、若い工員からも大変人望があった。おもしろかったのは、彼のお嬢さんが、その当時有名であった女優の竹久千恵子さんであったことである。竹久千恵子さんは、東宝系の有名な女優であり、戦時下は古川緑波一座の主演女優でもあった。東宝の映画でも常に主役を務めていたエキゾチックな女優さんであったと記憶している。

高浜工場にもだんだんと人材が集まってきて、いつの間にか芝浦工場と高浜工場が両方で競うような格好になってきてしまった。

昭和十五年、十六年頃、戦雲はいよいよ厳しく暗く、戦略物資であるガソリンは逼迫し、ガソリンの一滴は血の一滴であると言われた。そこで、ガソリンの代用として、われわれは天然瓦斯、松根油、木炭などを使って自動車を走らせることに専念した。同時に日本橋の本社では、早稲田大学の小林教授と燃料の専門家畑中氏を招へいし、燻製装置を組み立てて、青森、秋田両県から地下埋没の草炭（サルケ）を購入して、自動車用燃料を製造すべく、高浜工場の限に研究所を作り、そこに釜を設置し、代用燃料の製造を父が始めた。この草炭を入れて木炭、メタンでヤナセの、苦心三炭時代と言われた時代である。

天然瓦斯のメタンガス自動車は、会社全体を企業として守る上からも収益性が最も高く、この収益で会社が保たれていたと言っても誤りではないが、草炭の方はなかなか思うように製品ができず、間もなく閉鎖してしまつた。同時に父（社長）は、日本橋時代に桑の葉から皮を作ることに専念し、父の遠縁に当たる水谷晁一郎氏をこれにあて、擬革の製造も開始し、これの商売を梁瀬商事株式会社で当たらせるように計画したが、保坂、宮地といった商事の連中が、この新しい案を持って来た水谷氏を暖かく迎え入れることをせず、結局はこの仕事もうやむやのうちに終わってしまったのが残念である。

なお、同じ水谷氏が商事で打ち込んだ仕事として、コンニャクノリがあつたのを憶えている。これはコンニャクをつぶしてノリにしたもので、終戦直前に日本劇場あるいは国技館で、動員された学徒の手によつて作られ、アメリカ本土に向けて空に流された大きな紙風船（この紙風船の下には爆弾がつけられていた）の材料となつたのである。従つて父は、思いつきもあり、また、色々な新しいことに手を出すことについては、むしろ私以上であつたかと思うが、残念なことに、赤字が出るとすぐにやめてしまうことも父の特徴であつた。私はむしろ赤字が出て最後までやり抜くことが好きな方で、手離れが遅いが、父はこの点はやすぎるくらい決断がはやかつた。

### 天然瓦斯自動車

天然瓦斯自動車の開発並びに販売も決して容易な仕事ではなかつた。梁瀬式減圧弁方式の装置の原案ができ、これを図面に引き始めた頃、漆山一氏の妹のご主人に当たり、中島飛行機的设计部長で、日本の航空機製造業界ではピカ一のエキスパートであつた伊地知壮一さんという人が、お氣の毒に身体をこわし、胸を悪くされ、自宅で休養されていたので、この伊地知さんを一週間に一、二度芝浦工場にお迎えして、色々教えていただいた。

そして、現場上がりの市来宗男君が六感で作った設計図面を、伊地知さんにこはこうした方がいいだろう、というようなアイデアで色々と修正・訂正をして頂いたが、現場上がりの市来宗男君は学者風の伊地知さんの意見を受け入れることを嫌い、間に入った私が非常に苦しい思いをしたことが再三再四であった。しかし、最後には市来宗男君も伊地知壮一さんの優れた学問的アイデアに敬服師事するようになり、言うことをよく聞いてくれるようになった。

日本一の飛行機メーカーであった中島飛行機の設計は伊地知壮一さん、試作機をテストするエキスパートが新山氏であった。新山氏は戦後プリンス自販の社長になられた。この伊地知さんの指導により、私が内務省からの命令で、天然瓦斯自動車の運転者を一堂に集めて講義をすることになり、教科書作成に着手をしたが、この教科書はほとんど伊地知さんの教えにより作ったものである。こうしてできた『天然瓦斯自動車の取り扱い方法』という白いパンフレットは、今どこにも残っておらず、その当時の会社の書類にも一部も残っていないことは誠に残念である。このパンフレットの一ページ目には「一気圧とは一平方センチに一キログラムの重力がかかることを言う」というようなことから書き始めて、一冊の教科書を作ったことを憶えている。

この教科書によって運転手の諸君に私が講義をし、そして卒業免許のようなものを発行し、天然瓦斯自動車の運転者は必ずこれを携帯することが義務づけられるようになったのである。

父は、個人で内幸町（前衆議院前・現在の飯野ビル）にガレージを所有していた。そして、その経営を平出田一氏に一任し、経理を梁瀬正寿氏が担当していた。平出正田一の妹のご主人成合英二郎氏が、ガレージの後ろで用品の商売をしており、その末弟が赤坂（ホテルニュージャパンの真前）で凹凸舎の名でタイヤ商を営んでいた。その成合英二郎氏の用品販売を手伝っていた一人の技術屋さん妹尾氏が、高圧ガス（天然ガス）で自動車を走ら

せる研究に成功した。当然のことながら、それを父に報告したところ、父は大いに関心を持ち、芝浦工場の市来宗男氏に研究を命じた。

いかにも父らしい考えとやり方であったが、一言も成合氏に断らず、車庫も会社も双方私のものだからという気安い気持ちで取り扱った。しかし、成合英二郎氏としては研究を盗まれたと、快からず思い、父と真っ向から対立し、そのガレージの用品部を独立させて日帝商工社を設立、父と公私のすべてを断絶することを宣言した。

そのとき、父は私にこの天然ガス自動車の仕事を命じたわけである。平出円一氏、梁瀬正寿氏とも会い、善処すべく努力してみたが、成合氏と和解することはできなかった。成合氏とも何回も面談したが、坊主憎けりや袈裟まで憎いで、真っ向からやつつけられた。父が大泥棒なら、せがれは小泥棒だと……。

結局、父が昭和三十二年他界するまで、成合氏との間は断絶し、遂に父の葬儀にも顔を見せなかった。私は入社早々、人の取り扱いの難しさと根廻しのむずかしさを身をもって学ぶことができたが、父の仕事の運び方には相当批判的であった。

### 命を張っての安全性試験

日帝商工社では日帝式（ピストン式）が、ヤナセ芝浦工場では市来宗男氏によって隔膜式（ダイナフロー式）がそれぞれ開発された。車の後部に、二百五十気圧試験で使用気圧百五十気圧のポンペを三本積むのであるが、これのメーカーは住友金属一社であった。これの入手が最大の難事であった。

ヤナセ芝浦工場と日帝商工社の二社の他に、天然ガス自動車を研究し、成功したのが三社、合計五社で競争したり、協力したりすることになった。二百五十気圧の耐久試験に合格したポンペに、天然ガスを百五十気圧充填し、これを肉の厚い、細い鉄鋼のパイプで減圧弁までひく。すると減圧弁のダイナフローの作動により十気圧ま

で減圧し、薄い、太いパイプで真空弁に送り込まれる。そして薄いダイナフローの真空弁からエンジンにガスが送り込まれるという構造が、ヤナセ・ダイナフロー式の装置であった。百五十気圧の高圧ボンベを車の後部に三本積み込んで走る自動車は、交通事故などによりボンベが爆発する恐れありとされ、内務省保安担当の小野寺技官の許可をとることがなかなか困難であった。

「交通事故の衝撃は、丸ビルの屋上から下にボンベを落としたくらい強大である。従って、丸ビルの屋上から百五十気圧に充填したボンベを、下のコンクリートに落しても絶対安全だと思うなら、お前はそこに座っている」と言われた。

しかし、こちらとしては、交通事故があっても安全である、と主張しているだけに、今さら逃げるわけにもいかない。とうとう小野寺技官との間に、私が道路に座っておりましようかと約束してしまった。いよいよ、実験日が近づいた昭和十六年のある日、小野寺技官が「お前が命をはって安全性を唱える姿に感心した」ということでこの天然ガス自動車は内務省から正式に使用認可がおりることになったわけである。天然ガスは、千葉県茂原から運搬用ボンベに積まれ、トラック輸送で芝浦工場に持ち込まれた後、現在の芝浦給油所の場所に設けられた天然ガス充填所に貯蔵された。保安確保の条件は非常にきびしかった。

昭和二十年、空襲が激しくなった頃、私は芝浦の天然ガス充填所が被爆することを考え、この対策に非常に苦しんだものだった。当時、日本橋本社の砥油部がこの充填所の管理・経営を行っていた。松田君という勇ましく、型破りなりーゼントスタイルのお兄さんが充填所の責任者であり、なつかしい思い出の人でもある。

天然瓦斯自動車の試運転、並びに商工省の検定試験を受けるための同業者間の競争は、誠に激烈なものがあった。この検定試験に合格した高圧自動車の取り扱い業者が約五、六社で一つの組合を作り、この組合の仕事も田

村仁三郎主任と私が担当することになったわけである。

日帝社の成合英二郎氏は、いかに私に辛くあたろうとも、何と言っても昔からの知り合いであり、話せばよくわかってくれた。しかし、高圧自動車製造株式会社という会社の津島社長と、その下にいた若山部長の二人の政治力、弁舌力、そして組合の大勢の人々をまとめる、えも言われぬ力は、全く驚くべきものであった。

まだ世の中の裏表もよくわからない学生上がりのボンボンは、こんなすごい人が世の中にいるものかと驚き、眼を見張るくらい腕の良い、想像もつかないタイプの男性たちにもまれたのだった。総会の議事進行の運び方、または父長太郎社長の取り扱いなどについても、眼を見張るものがあり、この一、二年の天然瓦斯自動車組合の会合、その他の運営について、非常に大きな勉強をさせられた。この野人とも言うべき、また実行力に溢れる野性美満点の津島氏、並びに若山氏は、今はどこでどうやって生きておられるのか全く消息がわからないが、何しろ恐ろしいほどの腕のいい連中であつた。

こうしたすごい連中の中に入ってもみにもまれ、蹴飛ばされ、突き飛ばされ、ヒョロヒョロ、ヒョロヒョロしながらもどうにか天然瓦斯自動車協会の中でわが社が主導権を保ちつつ、まとめていくことができたことは、田村仁三郎主任の力によることが実に大きかつたわけである。会社で際立って一風変わった風格を持ち、大阪商人の特性を骨にまでしみこませているタイプの田村主任でさえ、背負い投げを喰い、たまされ、足をすくわれ、色々と苦汁をなめさせられたものである。

## 第二次世界大戦

## 高浜鑄工所の設立

昭和十六年そろそろ生産が本格化されたダットサンの販売権を九州地方で取り、梁瀬モーターズ株式会社が設立され、ダットサンの九州における一手販売を始めたことも記録に残っている。結局高浜工場のボディ製造工場にしても、商人が始めた製作であり、思い切った設備投資はなし得ず、中途半端な形になったことが、むしろ終戦後は身が軽く済んだことにもつながったとも思えるが、梁瀬モーターズの福岡における販売も、小島三郎氏が販売部長としてこれに当たり、その下にセールスマンが四人いただけの販売機構であり、これも何やら、中途半端な感が無きにしてもあらずであった。

また高浜工場新設と同じ頃、株式会社高浜鑄工所を設立し、石川島造船所の自動車部が英国のウズレー自動車と技術提携した当時の技師、杉山勝馬氏を技師長に迎え、自動車のスリーブと空冷式小型エンジンの鑄造、ピストンリングなどの鑄造を始めた。社長が父梁瀬長太郎であり、専務取締役杉山勝馬、常務取締役工場長として梁瀬喜作氏などが参画し、資本金十八万円で開業した。

会社も次第に戦時色に対応しなければ生きていけなくなってきた。昭和十六年、梁瀬自動車株式会社は工場の方に営業の重点を置くため、梁瀬自動車工業株式会社と社名を変更した。また当時戦時下で商業流通ということが忌み嫌われていたため、梁瀬商事株式会社も後に梁瀬実業株式会社と社名を変更したのである。

芝浦工場では修理並びに加工と代用燃料自動車、高浜工場では特種車体の製作と、この二本で戦時中の会社の経営が保たれたわけである。企業としての収益は、芝浦工場の利益が会社の収益の大半であった。車体製作の仕事は、一時「レオ号」のトラックシャーシを輸入し、これに特殊ボディを架装していたとき、その収益性は高かった。しかし戦争となりシャーシの輸入がとまってしまった後は国産のシャーシが配車され、これに架装する仕事は下駄の、はなお屋の仕事であった。ほとんどの利益はシャーシメーカーに占められ、ボディ製造の方

には廻って来なかった。こうした実情であったので収益面での貢献度は少ないものであった。

### 経済統制

当時の商業並びに商事会社は軍から色メガネで見られ、三井物産、三菱商事などでも非常に経済活動が制約されていた。従って、東大を出て三井物産機械部に入社していた漆山一氏にも、父が三井物産の将来を憂え、会社への入社を勧めた。その結果漆山氏は昭和十六年常務取締役として会社に参加したわけである。

日本橋の本社の、それまでアメリカGM車の仕入れを担当していた総務部は全く仕事が無くなり、自動車部のセールスマンは中古車のセールスで生活を守っていたが、公定価格などが設定され、商売もなかなか思うようには行かなくなってきた。また、公定価格決定のため、利潤を少しでも多く追求せんとすれば、ヤミ商行為として厳しく制約されるようになったので、だんだんと腕の良いセールス諸君達も仕事をするのができなくなつて、田舎へ帰る人、転職する人がでてきた。

### 部門間の厚い壁

また、当時日本橋には清水雄太郎氏を長として企業部が組織上設けられていた。この企業部はそもそも高浜工場の今後の発展、芝浦の代用燃料をはじめ会社全般の計画や、今後の社会経済動向に従つての諸計画を樹立すべき部門であった。しかし、この企業部は昭和十四年の発足から昭和十六年に至るまで、一度の会合も持たれなかった。若い私は、企業部こそ会社の今後の経営方針を立て、指導すべき部門である。さもないと芝浦工場は芝浦工場として進み、高浜工場は高浜工場として勝手に受注することになりかねない。そして商事部門も独自の歩みを進めるとなると、このまま推移すれば企業がバラバラになり、一致協力ができなくなる、ということを非常に懸念して、ある日、日本橋本社を訪れ、清水雄太郎氏に、

「せっかく企業部があるのだから、月に一度位は集まって、高浜工場はどうなっているのか、何に力を入れてい

るのか、陸海軍からの受注の動向はどうなっているのか。芝浦工場は、代用燃料でどういうように利益を上げているのか、ということなどの総括的な打ち合わせをすべきである」

と進言をしたものである。眼の色を変えて怒った清水雄太郎氏は「工場の若僧が本社の重役に向かい進言するとはもつてのほか、生意気千万」と大声でどなられ、そばにあった茶わんのお茶を頭からぶっかけられたことをいまだに憶えている。

今まで長い間従属的存在であつた芝浦工場、また新しくできたとは言え、芝浦工場の分身である高浜工場が、次第に力を増してくることにについては、本社の主だった人々にとっては、決して快いものではなかつたらしい。また、当時社長の父が色々と新しい仕事を探し求めて、例えば草炭、例えば擬革などの研究と製造を、商事から変わった実業会社に担当させようとしても、油を中心としていた商事部門の連中は、快くこれに協力しようという態度は見せなかつた。

昭和十五年、本社経理部に入社した内田弘君によると「当時の本社が総務、経理、砥油、自動車販売の各部門ごとに清水、大原、保坂、鈴木各部長が縄張りを固守し、全体的なチームワークは全く見られなかつた、バラバラの状況であつた」と今でも述懐している。

昭和十六年十一月十四日、第四十四回株主総会において私は取締役に選任された。その時私は二十六歳であつた。役員も新旧交代の時期であつたが、漆山一氏の常務取締役、そして私の取締役に就任で、会社の重点が販売から製造工務に移行したのは明白だつた。

昭和十六年十二月八日、大東亜戦争が始まつた。私が一番初めに手をつけたのは工務部が芝浦、高浜の二工場に分離され、各個別々の営業活動が行なわれ、一元化されていなかつたものを一本化し、工務部を製造部と改め

て工場内の気分の刷新を図ったことである。長い長い間、工務部は本社に対して従属的な立場にあり、人材も本社優先という方針で歩んできた。その間、工務部を一人で背負って頑張ってくれていたのが梁瀬喜作氏であった。その努力は実に大きく、効果実績も大であった。しかし、その期間があまりにも長過ぎた。

その功は別として、新体制のため、梁瀬喜作氏に工務部から引退してもらうことが第一であった。しかし、それを行なうことには種々の抵抗があり、難事だった。若い私は、これを断固行なわねば新体制が出来ぬと野坂光雄氏、田村元伸氏、田島要次郎氏、日比谷五郎氏などと相計り、断行すべく父（社長）に進言した。梁瀬喜作氏は大正五年から芝浦勤務であったので、約二十七年同じ職場でつくしてもらったわけである。私情からはいつまでも工務部で働いてもらいたかったが、時代の変化は思いの外大きく早かった。そして本社の有名無実の企業部を改め、これを芝浦にうつし、この部長に梁瀬喜作氏を当てた。

梁瀬喜作氏は不動産の売買に妙を得ていた。昭和十二年、社宅およびテニスコートとして柿ノ木坂に八〇〇坪を借地し、これを昭和二十二年坪三百二十円で購入（現在の柿の木坂アパートの地）した。ついで昭和十三年、清水町の宅地五五〇坪と八〇〇坪を七万円で購入した。これが清水町のモーパートの場所である。これの坪当たりの単価が五十一円であった。昭和二十一年、下のテニスコート（現在のテニスコート）二百六十五坪を百五十万円（単価六千円）で購入した。今日では莫大な会社の財産となっている。



昭和13年頃の柿ノ木坂テニスコート。左より梁瀬利子、漆山裕、梁瀬次郎、梁瀬喜作氏

昭和十七年には、ほとんどのセールスマンが散ってしまったことが、当時の住所録を見てもよくわかる。

高浜工場の新設のとき編成した下請け組は、左記の如くで、製造部に改称されてもこの下請け制度は続いた。

木工——村松高造——村松新太郎

内張——鶴原組（鶴原安三）

織装——松尾小市（常備）

鍍金——浜井組（浜井倉三郎）

塗装——山本組（山本善敏——近藤勇吉）

硝子——高橋硝子

鍛工——久米組

機械——犬塚製作所

鉄骨——伊原組

しかし、芝浦工場はほとんど下請け制度を廃し、常備方式で仕事を進めた。また、日本橋の本社から輸入関係業務がなくなつたため、手があいた中島玉置氏を製造部に招いた。

## 大戦の勃発

日本経済の各部門に、軍の発言力がだんだん強くなつてきたいきさつについてはすでに述べたが、こうした軍事統制を決定づけたのが、昭和十四年九月ヨーロッパで勃発した第二次世界大戦であつた。

この第二次世界大戦の引き金をひいたのは、言うまでもなくヒトラーの率いるナチス・ドイツであつた。

当時、ナチス・ドイツは「敗戦ドイツから領土を略奪した上、軍備を制限しているベルサイユ条約を粉砕して進出し、さらにはソ連を撃破してドイツ民族の生存圏を獲得する」というヒトラーの強い理念に率いられ、一九三六年（昭和十一年）にラインランド出兵を敢行した。そして、薄氷を踏むようなこの出兵に成功したヒトラーは、その後武断外交に自信をもち、ドイツ国民の熱狂的賞賛を浴びたばかりでなく、これまで出兵に反対した国内の将軍や外交官をもねじ伏せた。以後、彼の軍事的・外交的独走をけん制する勢力を一掃し、一九三八年（昭

和十三年)には全軍の統帥権を手中に収めたのである。この時からヒトラーの姿勢は、守勢から攻勢へ転じていったのである。

一九三六年(昭和十一年)には、ソ連をけん制することを目的に日本と防共協定を締結、翌三七年(昭和十二年)十一月にはイタリアをこれに加え、日独伊防共協定を成立させた。その後、ハンガリーやスペインもこれに加わり、ナチス・ドイツはファシズム、反共戦線の結成に成功したのである。

一九三八年(昭和十三年)三月、オーストリアに強力な圧力をかけることにより、ナチス党の新首相を誕生させ、その結果、オーストリアをドイツへ合邦させることに成功した。さらに同年九月のミュンヘン会議においては、反対する英・仏を押し切ってズデーテン地方をナチス・ドイツへ割譲させることに成功した。こうして、勢いのおもむくところ、ナチス・ドイツは、強化しつづつあつた軍事力にものを言わせ、翌三九年(昭和十四年)三月にはポーランドにダンチヒ地方の割譲を要求したのである。ポーランドはこれを拒絶し、英仏が対ポーランド相互援助声明に調印するや、ナチス・ドイツは独・ポーランド不可侵条約及び英独海軍協定を廃棄した。

そして、同年九月、ついにナチス・ドイツ陸空軍は、念願の失地回復を目指してポーランド進撃を開始。ここに第二次世界大戦の幕は切つて落とされたのである。

日本の同盟国であるナチス・ドイツの快進撃の報はいやおうなく親枢軸、反英米の論調を高めた。昭和十六年の開戦の基礎は、この年にほぼでき上がったとも言えるのである。

日本国中がすでに戦時色で塗りつぶされていた。日本を取り囲むABC(D)ライン(アメリカ・イギリス・中国・オランダによる包囲線)により、石油の輸入がほとんど見込みがたなくなつた。従つて、戦争をやめるか、さらに戦線を拡大する以外に、日本の国に行くべき道がないところまで追いやられたのが昭和十六年であつた。

ついに昭和十六年十二月八日、ハワイマレー沖開戦をもって太平洋戦争が勃発した。

資源的に、物質的に、生産力的に考え、無謀な戦いと批判されつつも、油をはじめ諸原材料が一切輸入できなくなってしまう日本が、今後生きていくための一か八かの選んだ道が、この太平洋戦争への突入であろう。

十二月八日は寒い朝であった。食糧不足、カロリー不足のためか、この冬の寒さは特に厳しく感じられた。この朝、ラジオは勇ましく軍艦マーチを連続的に鳴らし、戦争遂行のために、一億国民が力強く団結することを要望した。また一般の国民も、このままでは飢え死にするしか道のないことを知っているのか、将来の結果を必要以上に考えず、大東亜戦争に踏み切ったという知らせを喜び勇んで聞いた。この喜びは、誠に悲痛な喜びであったことは否定できない。

国の最高責任者の決断は国の運命を左右し、また経営者の決断は企業の運命をも左右する。これ以上難しいものはない。決断は誠に勇気のいるものであり、沈養・冷静さが必要である。この決断によって栄枯盛衰がはっきり定まる。

### タイミングと勇氣

戦争の歴史において、決断の正しさにより成功した例としてあげられている話がいくつかある。

ひとつは、豊臣秀吉が中国地方に遠征中に、本能寺において織田信長が明智光秀に夜襲をかけられ、死亡したとの報を耳にして、即刻兵をまとめて京に駆け戻った例である。この決断とす早い行動のために、秀吉は信長の後の天下を掌中に入れることができたのである。

もう一つは、明治三十八年五月二十七日、対島沖において、わが海軍連合艦隊が、ロシアのバルチック艦隊に八千メートルまでに肉迫したときに、旗艦三笠の艦橋で東郷平八郎司令長官が「取舵いっばい」を命じた例であ

る。従来の海軍戦術原則から見れば、完全な邪道であり、冒険であったが、これが日本海海戦を勝利に導く大きな要因となった。この有名な敵前回頭はこの時決断されたのである。

もちろん、この敵前回頭は、東郷元師の頭に突然ひらめいたものでなく、それ自体はバルチック艦隊を待つ間に行なった徹底的な検討から生まれた作戦プランであるが、ただそのタイミングが非常に難しかった。機を失すれば味方が全滅しかねない。現に東郷元帥が命令したときは、秋山真之作戦参謀は遅すぎたと思つたという。しかし、東郷元帥は彼我の全ての条件を計算に入れた上で決断を下したのである。現在のビジネスマンに要求されている決断力も、まさにこういう性格のものではないだろうか。もちろん、この決断にはタイミングと勇気が必要であるが、それ以前に必要なのは情報であり、的確な情報を得ることも、決断を下す上での必須条件である。

残念ながら、世界一を誇っていた日本海軍でさえ、昭和二十年八月に完全な降伏を迎えることになる。その悲劇の原因は、情報の軽視と発想の硬直化、そしてこれがための誤った決断を繰り返し、これによって日本海軍は崩壊してしまつたのである。世界の情勢に関する知識が乏しかった日本陸軍の参謀ならいざ知らず、国際感覚も豊かで、そして世界の情勢を熟知していた山本五十六連合艦隊司令長官が、何でハワイの奇襲をあえて敢行したかということについて、いつも大きな疑問を持つていた。

太平洋戦争は戦前の予想とは完全に異なつた様相を見せた。空母を中心とする機動部隊が海戦の新しい主役として登場し、戦艦はその護衛役に回つてしまつた。そして、世界で初めて機動部隊に着想し、その威力を立証したのは、皮肉にも日本海軍だったのである。アメリカ海軍は直ちにそれを採用し、さらに徹底させた。新鋭戦艦をも空母の護衛に使用したのだ。ところが着想者である日本海軍は、徐々に改善されたものの、きわめて不徹底だった。大和、武蔵の巨大戦艦をも空母の護衛に使用する本格的な機動部隊が編成されたのは、昭和十九年三月

であった。大切な戦争の最中に、アメリカより二年以上遅れたのである。そこに最大の敗因があった。日米開戦当初の勝利は、六ヶ月しかつづかなかつた。戦争継続に必要な経済の諸問題に関して、軍人たちはまったく無知であった。

### 戦争体制の崩壊

太平洋の戦争が音をたてて崩れ始めたとき、国内の戦争体制も破綻をきたし始めていた。昭和十七年（一九四二年）後半のガダルカナル戦以後の戦局の実状は、日本の戦争経済ではとうてい賄いきれないような大規模な消耗戦の様相を呈していた。開戦前の計画では、予想もしていなかった航空機、輸送船をはじめとする莫大な量の兵器、資材が必要となったのである。そこで、軍需生産能力のすべてを、重要兵器資材の生産に集中し、国家総動員法に基づく国家統制を強化して、国内の決戦体制を整えようとした。

昭和十八年十一月には、軍需生産を一元的に統制・指導するために軍需省が設置され、同時に軍需会社法を制定して民間の重要兵器生産工場を軍需工場に転換させるなど、軍需生産状況に必死の手段がとられた。しかし、重化学工業の基盤が弱く、アメリカとは比較にならない劣勢な生産能力しか持っていなかった日本の経済力にとっては、予想もしなかった莫大な軍需生産の要請に 대응することができなかった。統制強化と軍需への集中は、他の一切の部門を犠牲にすることであり、国民生活に絶え難い負担を強いるばかりでなく、軍需生産を支える裾野となるべき基礎生産部門を喰いつぶして、ひいては軍需生産そのものをも行き詰らせる結果になった。

特に戦争経済にとつての隘路（あいろ）となったのは、原材料の不足であり、もともと資源の少ない日本は、鉄、石油をはじめとする軍需物資の大部分を、戦前にはアメリカをはじめ戦争の相手国に依存していたわけである。開戦によって原材料資源の輸入の道を絶たれたことは、軍需生産にとって致命的な問題で、少ない備蓄を

たちまち消耗したあとは、深刻な原材料不足に陥ってしまった。

開戦前の計画では、初期進攻作戦で占領した南方諸地域の資源を活用することになっていた。しかし、石油やボーキサイト、スズなどの南方の豊富な資源も、これを内地に運んでこなければ戦力とすることはできない。ところがこれを運ぶべき輸送船が、その大部分を陸海軍に徴用されて、物資運送用の船舶が極端に不足した。その上、十八年以後となると、アメリカ潜水艦による海上輸送路遮断作戦が大きな効果をあげ始め、船舶の被害が急増した。輸送の困難、それによる物資の不足によって、すでに軍需生産は崩壊状態になり、戦争継続に決定的な支障となったのである。

戦争経済の破綻が具体的な形として現われたのは、まず船舶の不足であり、次に航空機の生産目標の未達成であった。そして、このことは戦争指導にも大きな影響を与えた。

ガダルカナル戦が激化しているとき、作戦上の要求を掲げる軍部と生産増強の必要を主張する政府が、船舶を奪い合つて対立したり、限りある航空機用の資材をめぐつて、陸海軍が激しく対立したのもこの表われである。

昭和十九年（一九四四年）二月、陸海軍が航空機を奪い合つて収拾のつかない対立を演じ、さらにマーシャル群島を失つて戦争指導の欠陥が表面化したとき、東条英機は首相のまま参謀総長を兼任し、同時に島田繁太郎海軍大臣は軍令部総長を兼任する措置がとられた。この結果、むしろ陸海軍部に東条、島田に対する反感が高まるという逆効果をもたらした。戦局の不振、内外情勢の行き詰まりは、東条政権に対する不満となつて表われ、特に東条の参謀総長兼任による独裁的地位の強化は、彼への批判を強めさせることになった。国民も、戦争の将来に対する不安と生活の窮迫への不満を増大させていたが、きびしい統制と言論支配のもとで、表面に出して反対を唱えることはできなかった。海軍部内においても、島田海軍大臣が東条首相に追隨して、海軍の主体制を主

張しないことへの反感が強まっていた。

昭和十九年六月のマリアナ（サイパン）の敗戦は、海軍部内の島田に対する反感を一挙に爆發させ、重臣は東条の線で連絡を重ね、七月十三日、東条に対し島田海軍大臣の更迭、大臣と総長の分離、重臣の入閣の三条件を要求した。これに対して東条は、自ら総長を梅津美治郎大将に譲り、首相兼陸軍大臣として留任し、島田は軍令部総長を専任として、海軍大臣の後任に野村直邦大将を任命することにより、内閣の延命を図ったが、重臣の入閣を実現することはできなかった。重臣層の反対が強いのに加え、天皇陛下の信任が失われたことを知った東条は、七月十八日ついに総辞職した。

東条内閣を退陣に追い込んだとはいえ、木戸内大臣にも重臣層にも、戦争の将来についてははっきりした見通しや政策があるわけではなく、またこれを実行しようとする責任感もなかった。東条の次の後継首班を決めるための重臣会議では、誰一人戦争をやめようと言ったものもなく、自ら責任をとろうとしたものもいなかった。そして戦争を完遂するという前提で、総理大臣の人選を無定見に話し合った末、第一に陸軍から寺内寿一、小磯国昭があげられ、海軍からは元首相の米内光政が協力するということが、七月二十二日小磯内閣が成立した。小磯内閣に対して、陸軍はあくまでも戦争を完遂することを求め、国民に戦争への一層の努力を訴えた。

### ドイツ・イタリアの敗北

日本がますます破局に向かって進んでいるとき、ヨーロッパにおいても、一九四四年、昭和十九年夏、ソ連軍はドイツ軍を国内から追放し、全ソ連領土を解放した。フィンランドも一九四四年八月、和平派のマンネルハイム元帥が大統領となり、九月に対ソ休戦、対独国交断絶に踏み切った。

ナチスの侵略直後から、厳しい対独レジスタンス闘争を続けていたユーゴスラビアでは、すでに一九四三年十

一月、チトーを議長とする臨時政府が結成され、四四年十月二十日、ユーゴ人民解放軍はソ連軍と共に首都ベオグラードを解放し、ほとんど独力で国土のすべてをドイツ軍から解放した。

一九四五年、昭和二十年二月四日から十二日まで、ソ連領のクリミア半島のヤルタで米英ソの三大国の首脳会議が開かれ、ドイツの敗北を目前にしてヨーロッパの戦後処理と平和維持体制の問題をとりあげ、種々協議したが、一つの大きな目的はソ連の対日参戦を確認するための会談であった。ドイツ処理については、全面無条件降伏を要求し、ナチス勢力の一掃、ドイツ軍の解体、賠償の取り立てについて合意を見た。この時点では、米ソは協力者の友好関係にあったので、米国は、ソ連のドイツを東西二国に分割する要望に対し、反対することができなかった。

冬の間停滞していた西部戦線では、一九四四年、昭和十九年十二月中旬から、ドイツ軍はアルデンヌ地区で最後の攻勢を試みたが、戦力は続かず失敗に終わり、四五年三月から米・仏はライン川を突破して、ドイツ中央部に攻撃を開始し、四月にはルールの工業地帯を占領し、この地区のドイツ軍三〇万人を降伏させた。

最後まで抵抗したドイツは、国土のすべてが戦場となり、爆撃や砲撃でほとんどの都市が破壊された。当初連合軍は、ドイツの中央政府を解体して、非ナチス化を進め、ドイツを連合各国で分割占領して軍政下に置く方針をとった。ヒトラーをはじめ、首脳者の一部は自殺し、ゲーリングその他の指導者は逮捕され、軍事裁判にかけられることになった。

ヒトラーの滅亡と前後して最後まで運命を共にしたムッソリーニも悲惨な最後をとげた。ドイツの支配下にあった北イタリアで、連合軍の接近と共にパルチザン闘争が激化して、四月二十七日、コモ湖畔で民衆の義勇兵に逮捕されたムッソリーニは、翌日愛人とともに処刑されて、死体をさらされた。

イタリアのドイツ軍も五月二日、連合軍に降伏し、イタリア全土がドイツ軍から解放された。ドイツの壊滅とイタリアの降伏によって、今や戦い続けている枢軸国は日本だけとなった。

ドイツ降伏直前の四月二十五日、サンフランシスコで五十ヶ国の連合国全体会議が開かれ、六月二十五日の国連憲章調印まで会議が続けられていた。すでに世界は戦後の平和を問題としており、日本一國だけがこの五十ヶ国を相手に戦争していたわけである。

### 戦火のなかで

#### 本土空襲

米戦略空軍は軍需工業や交通機関を破壊し、国民の士気を阻喪させる目的で早くから日本本土の空襲を計画していた。初めての本土空襲は、昭和十七年四月十八日、ドゥリトル少佐指揮のB25が太平洋上の航空母艦から発進し、東京をはじめ五都市を奇襲したのが日本の初空襲であった。被害はほとんど無かったが、初めて敵機を見た都民の驚きは大きかった。何よりもアメリカがその気になれば、いつでも日本を空襲することができるのだという事実が、日本の朝野に与えた衝撃は大きかった。

昭和十九年六月から、中国の基地からの九州諸都市の爆撃が始まったが、空襲が本格化したのはサイパン島が米軍の手に入ったのちの、十九年十一月一日から終戦までの九ヶ月半であり、この間に日本空襲に飛来したB29は延べ一七、五〇〇機、投下した爆弾一六万トン、被災者九二〇万人、死者三五万人、負傷者四二万人、全焼家屋数は二二一万户という恐るべき数字となった。

昭和十八年に、アメリカがかねて開発していた、航続距離五、〇〇〇キロを越す長距離爆撃機B29が完成する

と、これを日本軍の地上攻撃の及ばない中国四川省基地に配置し、十九年六月十四日、九州の八幡製鉄所、長崎造船所を空襲した。それ以後も中国基地のB 29は九州・中国地方や満州を空襲したが、本格的な本土空襲は、米軍がマリアナ諸島を占領し、サイパン島にB 29の空軍基地を建設したことにはじまる。

サイパン島から東京までの距離は二、二五〇キロで、日本本土は、B 29の爆撃圏内に入ることになったのである。サイパン島からの日本本土空襲は、昭和十九年十一月一日の少数機の偵察行動に始まったが、この日は軍需省が誕生してちょうど一周年の記念日にあたり、私は、父(社長)のお伴で軍需省に呼ばれ、今後の輸送の確保、自動車の確保の件について会議を行っていた。その最中に空襲警報が鳴り響き、軍需省の防空壕に父をかばいながら避難したことを、昨日のように明確に覚えている。やがて本格的な日本本土の空襲が開始され、十一月、十二月は主として東京や名古屋周辺の飛行機工場が攻撃された。

昭和二十年一月から、中国基地のB 29がマリアナ基地のサイパン島に移り、大編隊による日本本土都市の無差別焼夷弾爆撃が開始された。中でも三月十日の午前零時過ぎから東京の下町地区を襲った爆撃では、焼失家屋二六万七、〇〇〇戸、罹災者一〇〇万人余、死者八万三、〇〇〇人を出す大損害が与えられた。わずか二時間半の爆撃で関東大震災を上回る死者を出したわけである。昭和二十年二月二十五日、そして三月十日、続いて四月十三日、十五日、五月二十四日、二十六日の七回の焼夷弾爆撃で東京全市街地の大部分が焼失し、開戦時の人口六八七万人が二五三万人に減り、市街地域はほぼ活動力を失ってしまった。

三月十日に東京を襲ったB 29の大空襲は、隅田川を中心とし、下町一帯が一夜にして焼け野が原になり、多大の死傷者を出した。芝浦工場勤務の数多い職員、工員は、この空襲により家を失い、家族を失った者が少なくなかったが、翌十一日にはトラックを二台持ち出し、一台は私自身が運転して、隅田川の罹災地をまわった。職員

工員の住所を尋ねつつ、その本人並びに家族の安否を一日がかりで探し求めたのだが、ほとんど知人の家か、または学校などに避難をしていたために、なかなか正確な安否の情報を得ることができなかった。しかし、二日もすると、家を失った人々も落ち着き、芝浦工場に出勤をしてくれ始めた。

### 花の芝浦一丁目防護団

戦時中、高浜工場には、高浜工場特設防護団が編成された。芝浦工場にも同じく防護団が設けられた。私が団長となり、田村元伸氏を副団長として、庶務主任の陸軍曹土屋雅信君が中心となり、工場の防衛にあたることになった。私は、芝浦工場特設防護団団長のほかに、芝浦一丁目防護団の団長も併せて命ぜられ、加えて麴町の青年団団長も任じられ、毎日の工場の仕事のほかに、いろいろと防護団の仕事を仰せつかってしまった。

当時の芝浦には、われわれの芝浦工場のほかにガスタンク、エンパイヤ・モータース、後藤ポディー、またはガソリンタンク製作の辰野製作所、または航空機部品メーカーの萱場製作所などの諸工場のほかに、有名な花柳界があった。当時の芝浦花柳界には、芸の達人な、その道で著名な芸者が多く、その数も全部で二五〇名を数えていた。料理屋としては芝浦工場の真正面の「雅叙園」をはじめ「東港園」「東屋」「磯の家」「おもたか」など十指を越える料理屋並びに待合があった。この料理屋と芸者連を合わせて、ほとんど女性ばかりの五〇〇人で芝浦一丁目防護団が編成されていた。

私が団長をやっていたこの芝浦一丁目防護団が、陸軍・海軍の査閲を受けることがあった。その時、当時の大隊長を命ぜられていた芝浦の名物芸者中葉姐さん(当時五十才を越えていたと思う)が、陸軍・海軍の若手の査閲官が到着し、東港園(今の芝浦園)の前の道路に全員が整列したときに、人員の報告を行なわなければならなかったが、大きな声で、緊張しながら「気をつけ」と号令し、次に「番号」と言って、人員総数の報告をする

時、番号と言うべきところを黄色い声を張り上げて「お勘定！」と言ってしまったのである。おかげでせっかく緊張していた全員が吹き出すやら、陸海軍の査閲官も腹を抱えて笑い出すなど、式はなごやかなものになってしまった。苦しい、辛い時にも楽しい一幕もあった。

また麴町半蔵門の家に帰れば、全麴町青年団団長として、麴町在住の青年男女を麴町小学校の講堂に集め、時局談を、青年の奮起を促すよう命ぜられ、たびたびの会合を行なったが、麴町の良家の子女、店の小僧さん、町工場の職人さん、通学中の学生、とそれぞれ職種と立場の違った青年男女を、一堂に集めての訓辞は、なかなか難しいものであり、また根本的に戦争に対して批判的であった私が、軍人と同じように、ただただ愛国心と竹槍で、鬼畜米英を皆殺しにせよ、という感情的な演説をすることは、全く苦が手であった。

こうした青年団の会合には、必ず憲兵隊から数人の憲兵が臨席し、行儀の悪い者、服装の悪い者にはきびしい制裁が加えられていた。昼は仕事に加えて特設防護団、夜は青年団の仕事など、そして空襲に備えてのいろいろな準備のために、昼夜兼行で働かざるを得なかった。全く眼のまわるような忙がしい日々を過ごしたが、この間に戦局はますます悪くなり、毎日の空襲により、生産力は眼に見えて減退し、東京の住民は飛び立つように地方へと疎開を行ない、東京は本当に軍関係の仕事に携わる者と役所に勤務されている人々だけの街になってしまった。真つ暗な町、汚い町をとぼとぼと歩いていく市民の足は重かった。

### 隣組

当時、父と母は、麴町三番町（大妻女学校の坂の上、現在の糖業会館）に住み、二階は憲兵司令部に提供していた。家から五味坂交番までの、一列の隣組は、まとまりが良く、仲もよく、協力的、友好的であった。番町の両親の家の隣が宮内省に勤務されていた岩佐男爵、その隣が荻野元太郎氏、その隣に井夔松師（お琴の先生）などの家が並び、荻野さんが有名な炭鉱会社の社長であったために、荻野邸内には一〇〇メ

ートル近くも掘った完全無欠と言われる防空壕ができていた。それまで、空襲警報が発令されると、全部の隣組の人々がお茶・ビスケットなどを持ち寄って避難し、空襲が終わるまで安心して避難していたのであった。

私の住んでいた麴町の半蔵門は、隣が警視総監の官邸であり、裏に永田秀吉氏（ヤナセ高分子産業㈱の永田雄氏の父）一家が住んでおられたわけである。時たま、警戒警報、空襲警報などのとき、共に住来で顔を合わせだが、サイパンを占領されてしまった後は、日本は誠に容易な攻撃目標となり、これによって全日本が空襲を受け、日本中本場に焼け野が原になってしまふのであろう。何とかこの辺で手を打たなければならず、今こそ国家の指導者は日本の将来のことを真剣に考えるべきではないか、というようなことをよく二人で興奮して話し合ったものである。永田さんは平和論者であり、正しい意見と強い信念を持ち続けておられた。

私は、警戒警報が発令されると同時に、当時のオースチン三六年型を運転し、真っ暗な中を麴町半蔵門から芝浦工場に駆けつけなければならぬ立場にあつたので、家の防護というものはまったくできず、自分自身のことばかりであつて、全力を芝浦工場の防衛に当てていた。

#### 家族を疎開

こうして、家を忘れ、家族を心配せずに、芝浦工場の防衛に全力を当てられたのは、一人きりで身軽であつたからである。家族は昭和十八年に福島県の塩川町に疎開した。東北線郡山から磐越西線新潟行の汽車で会津若松を過ぎ、喜多方に行く間に塩川という小さな駅があり、塩川に疎開をしたときは、長女弘子（ひろこ）はまだ二歳半、次女公子（きみこ）は一歳を越えたばかりであつたと記憶している。この二人の幼児を麴町半蔵門に留め置くことは、空襲に備えて誠に危険なことであり、是が非でも安全な地、そして食糧の得られる地に疎開をさせたいと思つたのは、家族の安全確保と同時に、一人で安心して後顧の憂いがない気持ちで芝浦工場の防衛に当たりたかつたからであつた。今でも、芝浦工場（現在の本社）の土地をはじめ、

すみからすみまでのあらゆる物に対して強い愛着を持っているのは、命を張って自分で守ったという気持ちが消え失せず、強く残っているためであらう。

会津の塩川は、冬期は雪が多ければ二メートルを越し、都会の者にとっては決して住み易いところではなかった。次第次第に東京から地方に疎開する人々が増えると、これを受け入れる地方の人々も「気の毒だから、暖かくこれを迎える」という気持ちから、次第に「都会から厄介者が流れてきた」という感じを持つようになってきた。従って都会から疎開してきた人々、特に男性が少なく、女性が多かったが、これら女性に対してその土地の女子の勤労隊と同様の勤労奉仕が強制されるようになってきた。二人の幼児を抱え、疎開してきた家内にとって松根油の堀り出しやら、飛行場建設のため、もっこをかついでの泥運びは、若かったとは言え、大変苦しい重労働であったが、一日も休まずやりとげたのは精神力であったと思う。

戦争の動向も知らぬ子供たちは、いつの間にか東京弁を忘れ、三ヶ月に一度くらい訪ねる私に対して、東北弁で話しかけてきたのには驚いてしまった。しかし、丸々と元氣そうに太った様子を見て喜ぶと同時に、一泊して直ぐ空襲下の東京にもどる時の気持ちは、もしかすると、これが子供達とも永の別れになるかも知れずと、後髪をひかれる思いであった。

#### 戦火にのまれた各支店

昭和二十年に入って大阪支店（六月一日）名古屋支店（三月二十日）横浜支店（五月二十五日）福岡支店（六月十九日）と、次々に空襲の罹災を受け、焼失してしまい、事務は全くとだえてしまった。三月十日の空襲で築地の方から押し寄せた火災が、京橋をなめつくし、日本橋まで火がおよび、周囲が全部焼失した中で、日本橋の本社はシャッターを締め、中に数人の青年が残り、中からシャッターに水をかけながら火を防いだため、ガラスは焼け落ち、シャッターは鉛細工のように曲がりはした

ものの、どうにか建物は焼け残ることができた。

あの日本橋の建物のレンガは、父の建築好きから、非常に凝って造られ、二八〇〇度でレンガを焼いたと自慢していたが、空襲のときにも、そのレンガだけはガンとして火を受けつけなかったことは、さすがに立派な建物であったと思う。確か日本橋の店を内部で守った青年の中には、東京支店外車部勤務の橋本勝義君がいたと記憶している。その当時、橋本君は車輛係で、運転手の見習いをしていた頃であったと思う。

日本橋の本社の人々のなかには、将来に見切りをつけ、または身の安全を図り、疎開のため退社する人が増えてきた。常務取締役の大沢喜市氏もついに会社を退社され、そして信州の田舎に家族とともに引き揚げられた。

大阪支店は桜橋、今の大阪の駅の真前の角にあり、一等地であったが、幸い直撃弾一つなく、焼夷弾もほとんど直接には受けなかった。大阪支店を守っていた従業員の諸君が、もう空襲も終わったということで引き揚げた後に、隣家からの類焼で、残念ながら店が燃えてしまった。昭和二十年六月一日のことである。当時の支店長は中村種太郎氏であり、油の方の商事が松本慶弘であった。

福岡支店も同様、渡辺通り、今の西日本新聞の隣、岩田屋の斜向かいにあり、これも直撃弾も焼夷弾も受けなかったにもかかわらず、昭和二十年六月十九日、類焼で燃えてしまった。燃えたときには、社員は全く一人もいなかった。中山信市氏が支店長で、三輪公氏が支店長代理であったと思



当時の大阪支店

う。また岩永政定氏は宮島工場の工場長であったと記憶している。

悲惨だったのは名古屋支店であり、名古屋支店は昭和二十年三月二十日支店の真ん中に爆弾の直撃弾を受け、事務所は全く壊滅し、ゴム印、金庫その他あらゆる書類を焼失してしまった。

横浜支店も、横浜の大空襲の日（昭和二十年五月二十五日）に類焼してしまった。

#### 忘れ得ぬ五月二十五日

何と言っても、忘れることのできないのは、

昭和二十年の五月二十五日のことである。そ

の頃は、二十三日の東京の空襲からほとんど五時間おきに東京が空襲を受けるようになり、朝の出勤時、昼の食事時間、夕方、また夜の食事の七時ごろ、そして床につく十一時ごろ、ほとんど四、五時間おきの空襲の連続であったが、五月二十五日は、ちょうど十日ぶりで風呂へ入りたくて、半

蔵門の家に帰り、一人で食事をし始めた七時に、第一回の警戒警報が鳴り響いたわけである。この直前会津塩川に疎開中の家内に、二十三日の空襲で家内の実家が焼失したことを知らせたばかりであった。

ところが警戒警報が鳴り終わった直後に、空襲警報にかわり、空襲警報のサイレンが消える前に、赤い炎と高射砲の音と花火のような焼夷弾の落下が見え始めてきた。虫が知らせたのか、今日の空襲は、いよいよ都心部または山の手に集中するのではないかと思ひ、身のまわりの品をリュックサックに詰めて、愛用のオースチンを運転し、芝浦工場に向かったが、三宅坂、桜田門、赤坂見附、青山は全く火の海で一歩も走れず、芝浦行をあきら

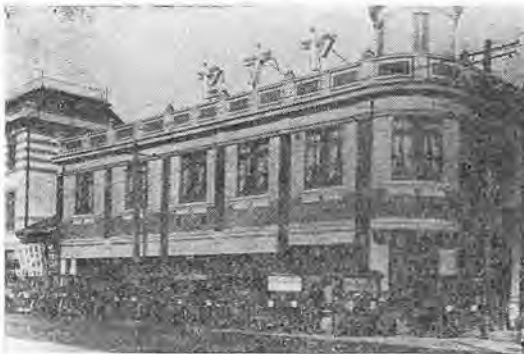


当時の名古屋支店

めざるをえなかった。そこで、三番町の両親を無事に待避させないと大変だと思い、三番町に車で向かった頃には、英国大使館の前の千鳥ヶ淵公園に、近衛第一連隊の馬が何百とつながり、この馬が高射砲の火の粉とそして異常な雰囲気を感じ、一勢に綱を切って暴れはじめた。

早くも宮城の半蔵門の御門は直撃弾を受け、赤いほのおをあげていた。半蔵門から千鳥ヶ淵、麴町は相当に早く空襲を受けたわけである。馬が暴れ狂い、人々が逃げ惑う中をどうにか麴町三番町の電車の停留所、この停留所の真前が勅使河原蒼風さんのお花の教室であり、そのあたりから逃げる人の群れで自動車は一步も先へ進めなくなつた。この勅使河原先生の屋敷の先を左に曲がると、右が清水建設の清水揚之助さんの屋敷があり、それを走り抜けて大妻女学校正門の四ツ角の家も、両親の家の真ん前の飯田さんの家も、その裏の味の素の鈴木忠治さん、治雄さん一家、昭和電工の鈴木さん一家のお宅も、全く火の海になつていた。

空襲警報と同時に焼夷弾攻撃をされた青山、赤坂よりも、麴町のほうが早かつたのではないかと思われるくらい火の海で、火が風を呼び、大妻女学校から家までの約百メートルの坂は炎の逆流で、何としても両親の家までたどり着くことができなかつた。その頃になると息も苦しく眼も見えなくなり、火の粉は全身を包み、着ていた作業服もこげ始めた。死物狂いでコンクリートの坂路を這いながら三番町 両親の家に向かって進んだときは、国民服も防護服も胸のあたりが全くすり切れ、皮が破れ、血が流れ



当時の福岡支店

始めていることすら気がつかない状態であった。家の五十メートル手前までようやくほふく前進をしたが、最後の五十メートルは熱と風で熱くて近寄れず、苦しくなり、このまま前進すれば自分自身を失うことになる気がつき、急拠坂を這いながら降り、三番町の電車の停留所の前のお堀の土手によくやくたどり着くことができた。

ちょうど小松ストア会長の小坂武雄さんの経営する三番町ホテルの真ん前の場所である。その土手にすわり、胸から手から足からの出血をふきながら、ふと前方を見ると、一人の紳士が、私同様疲れ果てた様子で、すわっておられた。「おたがいに大変な空襲でしたけど……」とお話をするうちに、その人が昭和電工社長鈴木治雄氏の令兄鈴木義雄氏（日本揮発油社長）であることを知った。今でも同じ東京ロータリークラブで、メンバーとしてよくお眼にかかる機会があるが、お眼にかかると、お堀の上で、茫然として二人で火事を見ながら、日本の将来について話し合ったことを、昨日のように思い出すわけである。

### 全焼した麴町の家

火勢もようやく一段落し、一晚お堀の堤の上ですわっていた私は、夜が明けると同時に、麴町三番町の両親の家に向かって歩き始めた。父が全精力を注ぎ込んで作った、一九二六年にでき上がった、当時建築費五十万円と自慢していた立派な家は、何一つ残さず燃えつくし、まだ煙を出しながらくすぶり続けていたが、その焼け跡に蔵と自動車の手庫だけがどうにか無事に焼け残っていた。

まもなくして、焼け跡に、母がポツリとモンペ姿と防空ずきんで姿を現わし、当然どこかへ避難したと思っただけのもの、万が一を心配していた私にとっては、誠にうれしい再会であった。両方で聞いた第一声は「お父様は？」という言葉であったが、母は父が当然荻野さんの防空壕にいつものように行ったと思っており、母は父とバラバラになり、防空壕に行くことができず、靖国神社に逃げ込んだと話をしているときに、父がいつもの紫色の風呂敷包みを手に持ちながら、焼け跡にひょっこり帰ってきた。「どこへ誰と逃げておられたのですか」と

聞けば「今日は荻野さんの防空壕に行くつもりで途中まで行っただけ、何とも言えぬいやな気持ちだったので、後戻りをして、そして九段坂下のお堀の土手にすわっていた」ということで、いずれにしても親子三人無事に生き残り、顔を合わせる事ができたことを喜びあった。次々と近所の方も集まり始めたが、その時、荻野さんの東京一と言われた立派な防空壕で、酸素の欠乏のため、全員が死亡された、という知らせが入ってきた。

ちょうど荻野さんのお宅の近所を通られた京都大学の小田万造博士ご夫妻が、この近所に東京一と言われる防空壕があるので、ぜひお願いしますと言って門を叩かれ、入られたそうであるが、荻野さんご一家、岩佐さんのお嬢さん、そのほか、十数人がその防空壕で酸素の欠乏のため、窒息死をされていることを知らされた。今まで一回もかかさずに防空壕に入っていた父と、今まで一回も入らずにその時だけ入った小田博士と、人間の運命というものは非常に微妙であるということ、つくづく感じさせられたが、両親の安全な姿を見て、私は直ちにガレージから父の自家用車ビュイックの38型一六〇号を運転して、芝浦工場に向かわなければならなかった。

#### 芝浦工場被爆

ガレージが安全であったとは言うものの、タイヤは二本焼けただけ、このタイヤを偶然二本あったスペアタイヤに取りかえ、番町から芝浦工場の安否を心配しながら、必死に運転を急いで芝浦へ向かったが、道路の上は死亡者が山となり、家屋は倒れ、燃え続け、電線は焼け落ち、その中を突破して運転するのは、決して楽な仕事ではなかった。

午前九時頃、ようやく芝浦工場の近くまでたどり着き、顔を窓から出し、首を長くして、芝浦工場の安否を一瞬も早く知りたいと気があせったが、近づくにつれて芝浦近辺があまり被害を受けていないことを知ったときの喜びは、思わず祈りたいほどの大きなものであった。近づくると芝浦工場の一部から煙が高く上っていた。団長として罹災した時に不在であった責任感が強く胸を打ち、留守を頼んだ田村君に「すまなかった」と叫べば、田村

君は「お留守に一部を燃やして申し訳ありません」と真っ黒な煤だらけの顔で謝まってくれた。

この日は、まず第一弾が芝浦のガスタンクに命中し、芝浦近所は火災によって昼のように明るくなり、芝浦工場も第四号、第五号、第六号の工場が焼夷弾の直撃をうけて焼失し、事務所と一号、二号、三号の工場と七号、八号、九号の工場が無事に残っていたわけである。芝浦工場では当日宿直に当った防護団員の死傷者は全く無かった。田村君を中心とした全員が芝浦工場を死守してくれた。吉永守衛も大活躍してくれたが、元氣一杯の鳥海秀一君などが兵隊として出征していたので、防空防衛は中年者以上の人々が実によく努めてくれた。

正午を過ぎる頃、自分の家を焼失した人々も、芝浦工場が無事かと、交通機関もない道を自転車、または徒歩で駆けつけてきてくれた。一人一人がお互いの無事を知り、手を握り、喜び合い、焼跡の整理を始めてくれた。涙の出るほど嬉しい光景であった。

幸いに高浜工場は全く空襲を受けず、高浜工場の特設防護団は空襲終了後直ちに休息に入った。しかし、芝浦工場が一部焼失しているのに、高浜工場特設防護団が誰も応援にこなかったということに、芝浦工場特設防護団の団長として、強く憤慨したことを、いまだに昨日の出来事のように記憶している。

戦争により人心が荒くなり、気持ちもすさみ出した状況下では、全社あげての団決が強く望まれるものであったが、日本橋の本社から誰一人応援、見舞いに来なかったことなどから、自分の職場は自分たちの手で守らなければならぬという気持ち、みんなが強く持つようになった。この芝浦工場が戦後の梁瀬自動車株式会社の枢軸となったわけである。

しかし、これで空襲が終わったわけではない。午後にはグラマン戦闘機が焼け跡の機銃掃射を始めた。眼の前まで急降下しての掃射は、身が縮むほど恐ろしいものであった。

やがて、電灯も何もない芝浦工場が静かに暮れて、食物なしでの一日の激務の疲れで、ぼんやりと守衛室で吉永守衛と水を飲んでゐる時、一人の男がよろよろめきながら門から入ってきた。火事場泥棒を厳戒していたので、誰何すれど、頭や顔など全身焼夷弾で焼けただれ、人相も全くわからない。遠い道を歩いてきたのであろう、立っているのがやつとであつた。誰だ、と再三聞いても、口の中で小さい声でかすかに答えるが、全く聞き取れない。吉永君と顔を見合わせ、確かに芝浦工場の人だろうが誰だろう、となかなかわからない。衣服はボロボロ、手足は血だらけ、ふと考え「お前は丸山勇造か」と私が大声で聞いたとき、喜んで首を縦に振つた。吉永君と二人でかついで直に医者運んだ。全身ケガしても自分の職場を心配して、歩いて芝浦へ駆けつけてくれた丸山勇造君の心は本当に嬉しかった。これがヤナセの本当のスピリットであろうと、涙がとまらず流れた。

### 清水雄太郎氏の死

昭和二十年五月二十五日昼ごろ、悲しい知らせが芝浦工場に入ってきた。それは本社の前取締役清水雄太郎氏が、その日の空襲によって麻布笄町の自宅の玄関前に倒れ、窒息死をされたという知らせであつた。

芝浦工場の焼け跡の跡始末が一応落ち着いたので、私はすぐに車を運転し、田村元伸氏と一緒に、麻布笄町の清水氏の自宅に駆けつけた。私が着いた時は、まだ玄関を出たところに、清水雄太郎氏が倒れたままの姿であつた。清水さんは大変強度な近眼であり、たぶん空襲と同時にめがねを失なわれたのではないかと思つた。奥さん並びに子供さんは群馬県に疎開されていたので、一人で笄町に住んでおられたのである。

防空ずきんを頭からスッポリかぶり、うつ伏せになつて倒れておられた。当時は火葬場などもまったくないので、自分で火葬をしなければならぬ。いつまでも道路の上に遺骸を寝かせているわけにもいかず、私と田村君と二人で清水さんを背負い、近くの広場で火葬をする準備にかかったが、そのころになり清水氏の弟の清水一郎

氏も駆けつけてこられた。私の車からガソリンを一ガロンほど抜いて、原っぱに穴を掘り、そして清水雄太郎氏の冥福を祈りつつ茶毘（だび）に付したわけであるが、私にしても田村君にしても、生まれて初めての作業であり、なかなか本職が行うごとくうまく進まず、きれいにお骨になるまでには、二時間以上の時間を要してしまっただが、このお骨を全部袋に入れ、清水一郎氏にお渡しした。

その間も煙を目当てにしてグラマン戦闘機からの機銃掃射を数回受け、われわれも近所の穴の中にあわてて飛び込まざるを得ない始末であった。清水雄太郎氏の腕時計や近くに落ちていたためがね、その他の遺品をお骨と一緒に清水一郎氏に渡して、そして夕方、田村氏と共に芝浦工場に戻ってきた。仏様を焼くなどは生涯で初めての経験である。子供の頃から知っている人を自分の手で火葬にする気持ちは、悲しさなど通り越した感じであった。

帰る家もなく、また着替え一枚、下着一枚、洗面道具など何一つ残っていない状態で、身の回りのすべてを失ったような淋しい気持ちで夕方を迎えた。考えれば、私にとって誠に長い一日であった。夕方になると、芝浦の海の彼方には入道雲が張り出し、焼け跡は夕陽に映えていた。そこから見る海は、平和で美しく、今朝から起きた大空襲など知らぬと言わんばかりの平和な色であった。その頃になってようやく、すべてを失ったということを知った。中でも残念だと思ったのは、子供の時からの数十冊のアルバムと、買いためた永井荷風、泉鏡花など数十冊の初版物の文学書であった。また愛好したビング・クロスビー、アームストロング、デューク・エリントン、ミルスブラザース、ボスエルシスターズ、エディ・ウィルソン、ファッツ・ワーラー等の数百枚のレコードが再び手に入らないと思うとき、えもいわれぬ淋しさを感じた。しかし、芝浦工場の事務所の床にゴザを敷いて横になった私は、すぐ深い眠りに落ちた。とはいえ、長い眼りは許されなかった。まもなく次の空襲でまた起こされて、全員警備の配置だったのである。

## 去る者残る者

戦局はいよいよ暗い見通しとなり、日本の将来に対する不安感に加えて、長い間アメリカの自動車輸入販売を主な仕事としていた会社のなりたちを考えると、従業員の将来に対する不安感はますますつのり高まってきた。家族と一緒に地方へ田舎へと疎開したいという希望者も増えて、生命の安全を願う気持ちは当然のことと理解できるが、疎開できず、逃げ出せない運命にある者にとっては淋しいものであった。疎開地での就職は労働力不足の折から簡単に得られたので、疎開希望者は次から次へと増え、ほとんど大半が疎開を始め、父梁瀬長太郎と一緒に仕事を始めた大沢喜市常務取締役も、ついに長野県の郷里に帰られてしまった。

芝浦工場においても、毎日毎日退職者を見送り、また、このころトラックの製作で、ますます人手不足を呈していた日産、トヨタ、いすゞなどの国産メーカーからも、芝浦工場の中堅幹部に強い誘いがあり、長い会社の歴史とともに歩んだ部品の大井孝郎氏を始め、数多くの人が国産メーカーに移っていった。将来性のない会社においても仕方ないからと、捨てぜりふを残して、退社した人も多くあった。

何かしらとり残されたような淋しさと焦燥感にうたれながら、その日その日の生命の安全をまもり、その中で芝浦工場として利潤をあげていかなければならない。焼け跡にたむろする全支店の人々の毎月の給与を、芝浦で稼ぎ出さなければならぬことの苦しさは、誠に言語に絶するものであった。その苦しみの中で、会社を見捨てず、私に協力してくれる人々に対して、どんなことがあっても恩返ししようという気持ちが強く心の底に芽生えてきた。

数多い誘いがあったにもかかわらず、野坂光雄、田村元伸、田島要次郎の三君は「われわれはどんなことがあってもヤナセに残り、あなたと運命をとまします」と約束し、誓ってくれた。同時に私はこの三人を必ず将来

十年先か二十年先か三十年先かわからないけれど、辞めた人よりも必ず幸せにしてあげなければならぬ義務があるのだ、ということ強く感じ、またそれを是が非でも実行し、実現したいと心に誓った。後足で砂を掛けるように辞めていった人達に比べて、残っていて良かったと言って、本人からも家族からも喜んでもらえるようにしたい。そのためには会社を再び隆盛にしなければならぬ。これが私に課せられた仕事であると痛感したが、正直言つて自信はまったくなかった。

田村元伸氏は昭和四十一年他界され、野坂光雄氏は残念ながら昭和四十六年健康を害して休職された。今元気でおられるのは、監査役田島要次郎氏ただ一人であるが、この三人には私は生涯恩義を感じているわけである。

### 焼けだされ

父は麴町の番町で焼け出され、長女の漆山文子の家に居候し、妹の嫁ぎ先の尾沢家などを転々としていたが、結局漆山文子、四女伊藤照代などと一緒に、故郷群馬県豊岡の姫宮山荘に揃って疎開をしたのは、昭和二十年六月ごろであったと記憶している。

東京の焼け跡に残ったのは、私一人となつてしまった。誠に幸せなことには、四人の姉妹は誰一人空爆を受けず、家も財産もすべて無事であり、失ったのは父と私の二人だけであった。私は防空壕に入れておいた身の回りの物も直撃弾で跡形なく飛んでしまったので、本当に下着一枚ない丸裸になってしまったが、芝浦工場の数多い現場の工具の諸君たちが、シャツ一枚、猿股一枚を「工場長、お使い下さい」と言つて持ち寄ってくれた。人の情けというものを、これほど強く感じたことはなかった。

前に田村君の発案と準備によつて、栃木県にある田村君の故郷の山の中に一軒家を見つけ、芝浦工場の従業員 の諸君たちの荷物を、トラックで数回往復して、ほとんど運んであった。次に私の荷物を運ぼうと準備していたが、その直前に焼け出されてしまったわけである。従業員 の諸君は、一番先に従業員の家財の疎開をしたことに

ついで、非常に喜んでくれた。私の疎開が間に合わなかったのを知っているので、それが私に対するシャツ一枚の持ち寄りになったのではないかと思う。

芝浦工場の防衛のため、芝浦の東港園の前に芝浦工場の寮を買い求めであった。それは「一藤滝の家」という芸者の置き屋であったが、当時一流の芝浦の芸者さんが二十数人住んでいたために、間数も非常に多く、寮としては最適であり、私が工場長時代に七万円で購入したものである。今の芝浦療養所のすぐ隣の建物である。田村君も家族が疎開していたので、そこに一人で寝とまりしていたが、罹災者がふえてきて、芝浦の寮もいつの間にか満員の盛況となってきたので、私がそここころがり込むわけにもいかず、一晚おきぐらいに田村君の部屋で寝かせてもらったり、または麴町の原安三郎さんのお宅に伺い、お風呂に入れていただき、泊めていただいたこともあった。また松竹の前社長の城戸四郎さんのお宅でお風呂に入れていただき、食事をごちそうになり、泊めていただいたこともあった。その夜空襲があり、お庭でお手伝いをしたことが、つい昨日のことのようである。

そのころは、本当に昼も夜も食べる物がなく、空腹をかかえていた私を、時たま心温かく「御飯を食べにいらっしやい」と招いてくれたのが、麻布竹谷町に住んでおられた日比谷平吉ご夫妻であった。家内の叔父、叔母にあたり、今日のTCJの日比谷輝夫氏のご両親であるが、私の乞食のような生活をご覧になり、よほど気の毒に思ったださったのか、時たまいただいた食事は、本当においしく感じると同時に、人には親切にすべきものである、人間は自分だけが幸せであればいいということではなく、人のためにつくさなければならぬ、親切にしなければならぬ、ということを心の底に強く教え込まれたような気がする。

戦後、富士紡に勤務されていた日比谷輝夫くんが、あまり厚遇されておらず、むしろ不遇な地位にあったのを知り、私はTCJに迎え、彼の持ち味を存分に生かし、TCJの専務取締役として大いに活躍してもらっている

のも、日比谷平吉ご夫妻に対する小さな恩返し of 気持ちがないと言えば嘘になるであろう。

人間は本当に苦しいとき、どん底に落ちたときに初めて人の情けを知り、人の心を知り、またいろいろと教えられることが多いものである。私の生涯にとって、昭和二十年は、本当にどん底のときであり、苦しいときであり、人の情けをこれほど強く感じたことはなかった。

ようやく初夏を迎えるころには、横浜にも大空襲があり、横浜の燃える黒い煙が東京に押しよせ、ほとんど東京が夜になったかと思われる位、真つ暗になってしまった。東京はほとんど二日間この黒い煙で覆われてしまった。人心はすさみ、元氣のない人々がただ下を向いて町を歩いているだけになり、誠に暗い毎日であったが、私は「いつかは必ず戦争は終わる。もし本土に敵を迎え、本土決戦などを行えば、数多い日本人の生命を失い、国民生活に多大な打撃を与え、その結果、日本で工業生産が復興し、農作物などがとれるように回復するまでには、大変な日時がかかるだろう。日本の再興は不可能に近くなる。それよりむしろ、始めあれば必ず終わりありということから、一日も早く、本土に敵を迎える以前に、終戦にもっていくべきである」と考えていた。

長い眼で日本を見た場合に、ただただ「死ねばいい」というニヒリズムにつながる気持ちが愛国心であるのか、日本民族を一人でも減らさないようにして、次の日本を再建させるのが本当の愛国心であるのか、私はむしろ後者の方の愛国心を選ぶというようなことを、七月八日の大詔奉戴日に話したところ、さっそく憲兵隊から出頭を求められた。あのころは、愛国心と言えは何でも通る時代であったが、口先だけの愛国心がまかり通っていた。私は、日本の将来を考え、日本を再建させるために、一日も早く戦争をやめる方が愛国心だと考えていた。愛国心というものは、軍人だけが持っているものではない。われわれ民間人も日本人である以上誰でも持っている。ただその愛国心をあらわす方法が違うのだ、ということ、私は憲兵の前で堂々と述べ、許されて工場に帰って

きたのである。

そのころから、戦争はまもなく終わるのであろうということは見当がついたが、さて終ったあと、敗戦日本がどのようなになるであろうか、われわれは何をすべきか、という点になると、モヤがかかったようにまったくわからなかった。社長、軍納部長、芝浦工場長という三役を引き受けさせられての二十九歳の青年は、まったく途方にくれ、何をすべきかの道もなく、食うものもなく、着る物もなく、今の若い人々には想像もできないような苦しい青春であった。泥だらけの青春、夢もない青春、その日その日を生き抜くことだけの青春であった。

芝浦工場の焼失した一部は特殊車輛の製造工場で、当時池貝鉄工所で、エンジン並びにシャシーを製作していた、モケとヒケと暗号で呼ばれていた特殊裝行車であった。どうして細かく調べたのか、このモケ、ヒケ並びに魚雷運搬車の製作関係をしていた四号、五号、六号だけが直撃弾を受けたわけである。

このような時期、会社の方では、昭和十九年四月一日から九月三十日までの決算定時株主総会において、取締役が改選され、梁瀬長太郎、漆山一、大原当一郎、梁瀬次郎、梁瀬喜作、吉崎良造の六名が取締役に就任した。これが第五十期の定期株主総会であった。

第五十一期定時株主総会は、昭和二十年五月三十日に行なわれ、その定時株主総会において会長制度が設けられ、梁瀬長太郎が会長に就任し、私が社長に就任したわけである。

### 社長就任

父梁瀬長太郎社長は、五月二十五日に、精根つくして建築した三番町の家を跡形なく焼失し、また戦局のますます不利になっていく様子を見、会社の前途将来に対しても、暗い見通しを持っていた。

昭和二十年を迎えた春ごろ、父から、第一線を引きたいというような発言がしばしば私にあって「お前がやる

気があるなら、社長を譲ってもよい」という話もぼつぼつ耳にするようになった。若くて、膏地っ張りで、無鉄砲だった私は、口が腐っても、私のほうからこんなむずかしい時期に「社長をやらせてほしい」などとは言えなかった。また、やる自信などまったくなかった。むしろ将来の不安を考え、どうしてもやってほしいというご依頼があるなら考える、というような受け身のいい格好をとらざるを得なかった。同時に、父は当時の常務取締役の漆山一氏に自分の後を譲って、そして、私が一人前の男になるまでの中継をしてもらい、このまったく不安な将来に対しての道を開こうとも考え、父の親友であった原安三郎氏にも相談した。腹心であった本社の清水雄太郎氏にも相談をしていたようである。

原安三郎さんは物の順序として、温厚な人柄であり、また年輩からいっても父と私のほぼ中間にある漆山氏に社長を譲ることが、順当なステップではないかという意見を、父に具申されていた、と父からも聞いている。また、本社の清水雄太郎氏も、当然温好で、常識のある、仕事にも経験のある漆山氏を社長に迎えることについて同意し、むしろ若年にして無鉄砲と見られる私に社長を命ずることは、非常に危険であると同時に、一つの博打であろうとさえ考えていたらしい。

四月のある日、父から漆山一氏を社長にするという話が正式に芝浦工場に伝えられた。そのころ漆山常務は高浜工場長を兼務していた。しかし、そこで一つの大きな問題が起きてきた。当時の芝浦工場の野坂光雄、田村元伸、田島要次郎を中心とする若手の連中が、それに対し真向から反対の声をあげてきたのである。

私があたかも芝浦工場長として扇動をしているかのような誤解を受けるので、この三氏に慎重な行動を要請したが、この三氏の意見は意外に強く、当時の社長であった父にこの三人が面談をし、そして、むしろこのむずかしい時期は私の方が向くのではないかという意見を具申した。これを知った漆山常務も快く譲歩し、協力を惜し

まないとの申し入れがあったので、父もそこでようやく腹を決めて、その後のある日「お前に社長を頼む」という正式な話があったわけである。話のあった私の方がむしろ驚いた。この空襲下、混乱している日本の今後が、本土決戦となるのか、降伏するのか、どうなるものかわからない。大勢の従業員とその家族を守りつつ、会社を再興することが、どう考えても不可能に近い時に、喜んで社長などという要職を引き受けるほど私は愚かではなかった。しかし、父の子として生まれたからには、宿命的に、これは自分の一生の仕事であろうという気持ち若い心の中に燃え上がってきた。

「できる限りやってみますが、その結果については誠にわからない。失敗したときは、どうかあきらめていただきたい」と私は言った。同時に父からは「今の状態より少しでも会社を良くした場合、君を初代として認め尊敬する」という一筆を書いてくれたのが五月の初旬であった。

五月二十五日の空襲で、この一筆を焼失してしまったことは、今考えても誠に残念なことであった。私にとって最大の財産を失ってしまったことになる。いよいよ五月三十日を迎え、日本橋の本社の社長室で、形ばかりの第五十一期定時株主総会が行なわれ、その席上で代表取締役社長に就任したわけであるが、今考えてみればおかしなことで、代表取締役社長兼軍納部長兼芝浦工場長の三つの役を抑せつけられた。もちろん社長就任のお祝いがあるわけでもなく、お赤飯のにぎり飯一つあるわけでもなく、お湯を一杯飲んだだけの株主総会であった。

亡母の書いた文章を集めた本に『福寿草』『福寿草つゞき』の二点があるが、その『福寿草つゞき』の中の、昭和四十五年六月に記した文中にこんなくだりがあった。

「社長就任二十五年の祝賀は、私にとって実に感慨無量で、言葉にはとても表わすことができません。二十五年の間、社長の座にあって、父より受け継いだ言葉を実に噛み分けて、実直に歩まれたことが、今日のヤナセに殆

展じた大きな原因であると思います。と同時に、会社の重役御一同や社員のみなさんが、若い社長を心から輔佐して下さったお蔭と、私はここに改めて皆様に御礼申し上げます。

ただ一言、母として社長に述べさせていただきたいと思えます。何でも無理を通す強い性質の父に、何をいわれどもこらえて、晩年の孝養をつくされたことは、実に立派な孝行ぶりでした。そして本宅へ来ると必ず何かお叱言が待っていて、それを一言の口ごたえもせず、礼を厚くして辞去する姿は、側目にも立派でした。母の命をかけて育てた甲斐があったとつくづく思いました。社長を護った会長は、自分の仕事をなくしたように淋しかったためか、数年間位は特に社長に対して強くあたっておられたように思われました。

当時は戦災続きの毎日で、いつ何時、麴町にも来るかと心の安まる日は一日もありませんでした。芝浦工場は陸海軍の指定工場であったので、田村氏とともに責任者としていつも空襲の時には屋上にのぼって、敵機の襲来を見守っていたのです。時折、番町の家まで入浴のためこられたが、敵機襲来のブーッという薄気味悪い音が鳴ると、折角入ったのに急いで衣服をつけて暗い道を帰って行きました。その姿は実にかわいそうでした。本人は少しもいやがらず、早々に支度して暗夜の中に消えて行き、心からご苦勞様と行って送り出したものでした。何事にも決して横着心を出さずに真面目に行動することが、いちばん私はうれしかったです。愚痴は一言もいわず、誠実にことを運ぶ心は立派だと思います。

二十五年間よく会社を大切にしておかげで、父の業をまします盛大にして今日になったことを、私はうれしく思っています。社長就任の時は戦火の最中で、何も無い時代で、お赤飯を炊いてお祝いしてやることもできませんでした。滿二十五年を迎える五月三十日には、私は心をこめてお赤飯を炊いて届けてあげたいと思うのです。

社長はなかなか孝行心が厚く、父の最期には心をつくして看護され、いまだに（十五年たって）孝養の心厚く、仏前に敬意を表しています。また仕事上、むずかしいことに当面し、父の仏前で、静かに父に相談している様子を見ると、兄弟も伯叔父も従兄もいない一人きりの姿なのです。その時、社長は父と語ることで心をなぐさめ、はげましているのでしょうか。この梁瀬という家系は、昔から親を大切にして孝行の心厚いと村の人もうわさしているとか、誠にうれしいお話です。

私はさいわい会社の皆さまからも、五人の子供達からも、大切にされ、いつもありがたいと喜んでいます。孫も元氣、ヒ孫も毎年ふえる一方、おかげさまで毎日元氣に過ごすことこそ、社長に対する最大の協力であろうと信じています」

### 裸の王様誕生

その総会后、日本橋から芝浦までの市電の中で、これから先の自分に与えられた責務の大きさに心が縮み、身の細る誠に重苦しい気持ちで芝浦にたどり着いた。まさに「裸の王様」である。家もなければ、着替える下着一枚もない。靴一足もない裸の社長、裸の王様ができ上がったわけである。

芝浦にたどりつくと、私を温かく迎えてくれた野坂光雄、田村元伸、田島要次郎の三君が「われわれ三人が必ずそばにいて、力一杯協力しますから、どうぞ安心して事に当たっていただきたい」と激励してくれた。私が今でも野坂光雄君を、長い病気で休んでいても、社友として、できる限りのことをしている一つの大きな理由であり、田島要次郎君を監査役として、今日なお信頼しているのも、あの昭和二十年の煤けたゴミだらけ、泥まみれの芝浦工場の中での、力強い握手から起きてきた気持である。田村元伸君を数年前に失なったことは、今でも残念であり、また彼の独特な発想は、私にいろいろと教えてくれ、野坂・田島・田村の三人三様の人柄の違いというものが、私には非常にいい勉強になったことを、今でも強く感じている。この三人の協力者を見ると、昔の桃

太郎さんのお伽話を思い出す。桃太郎は犬、猿、きじの三匹の家来をつれて鬼ヶ島を征伐する。三匹とも絶対必要であり、きじは情報、犬は忠誠、猿は策略のエキスパートである。この組み合わせは、現代の経営にもそのまま通じるものと思う。野坂君はきじ、田島君は犬、田村君が猿の役を果してくれた。

昭和二十年四月一日から九月三十日までの第五十二期、すなわち私が五月三十日に社長に就任して初めての決算においても、誠に幸せなことには、当期利益金として十五万三千九百九十五円九十六銭を計上することができた。工場も燃え、全国の支店が燃えた中で、十五万円の利益が計上できたこの第五十二期の決算が、私が社長に就任して第一回目の決算であり、この十五万円は私にとって生涯忘れることのできないありがたい十五万円であった。戦局はますます悪化の一途をたどり、生活もあらゆる悪条件に囲まれ、これから先どうして生きていくか。全社従業員とその家族の生活を守っていけるのか。正直言つて、まったく自信のない気持ちで、毎日を過ごした。情けない裸の社長の誕生であった。